

早稻田學報

大正二十年三月十六號 第二十四百四十六號 二月十日發行 每月一十日發行

目次

東洋文化の振興と兩洋文明の調和
愛國の問題

教授 牧野謙次郎
教授 横山有策

校報

校内消防設備の改善——罹災學生學費減免及猶豫——理工學部應用化學科實驗費免除——維持員會——學部長主任會——教授會——科外講義——圖書館顧問及同商議委員の囑任——圖書館建築委員の異動——講師の異動——罹災學生の轉學——圖書館報告

附錄 第四十回早稻田大學報告

校友會報

秋期校友大會と震災遭難者追悼會——平壤校友會の創設——大阪校友會秋季大會と田中理事の一行——鳥取縣支部總會——石川縣校友會秋期例會

面影

講師 中村宗雄氏

校友の動靜

名簿切後の異動——計報

學生及運動記事

學生委員會規則の制定——早大救護會の成立——早大スケート・ホッケー俱樂部の近況

雜錄

島田三郎氏の長逝——岡田講師の訃——校友中等教員招待會——留學生の消息其他

記念事業部記事

本部報告——田中常務理事の關西出張——資金申込芳名

大正十二年度本會維持費醜出者芳名報告

東京牛込

早稻田大學校友會

電話牛込一五三番

東京八八九番口座

意見

東洋文化の振興と

兩洋文明の調和

教授 牧野謙次郎

故總長と東西文明の調和

故總長大隈侯は多年東西文明の調和を唱へられて、その基調となるべき東西思想の研究にも力を注がれた。その時私はあやまつて同僚の金子君とその資料の取調を囑託された、因つて各その分擔の事項に就て取調をはじめることとなり、金子君は西洋を私は東洋方面を擔任したのであるが、久しく東西思想の相異なりまたは一致なりを研究したいと思つてゐた私共は、故總長のこの企がはじまつて更に一層の便を得た次第である。故總長は常に言はるゝに、『東洋古典の雄大なる思想と西洋科學の精密なる知識とをよく調和してその特色を發揮するときは、茲に世界の眞の文化が生れる、この文化が即ち世界平和の基なのである』と、この抱負を抱く侯は何等か一大著述を爲さんことを志されたが、不幸にしてその志を充分に果さず、唯だ未完の一遺著のみ世に残して長逝されたのは、實に千歳の恨事である。

東西兩洋文明の特色

自分等は侯の志を達し成さしめんと思ふたが、それには何よりさういふ大任に當る人物の養成が急務である。今我國の學界を見渡す所が、東洋知識に長じてゐるものは西洋知識に暗く、西洋知識を好む者は東洋知識を疎んずるといふ状態で、各其の一部分に偏傾して双方充分の意志を疏通し得ぬのが即ち今日學界の大缺陷である。願れば明治維新以來我國では西洋文明の吸収に熱心なる所から、西洋知識に長ずる者は比較的が多いが、東洋知識に長ずる者は年々凋落して來たので、この勢で行くときは、我々が却つて西洋人より我東洋の知識を教へらるゝ様になりはせんかと氣遣はれたのである。勿論文明な思想なりといふものは世界の共有であるから、東洋人が西洋人に教へられても、別に恥辱でもなく、また教へても別に誇といふ譯でもないが、唯文明の淵源がそれと異り、歴史その他の關係から發達の過程に

も相異の點があることを注意せねばならぬ。概して言へば、西洋の思想はギリシアに發し、東洋の思想は支那に發してゐる。それが交通の開けぬ所から、また性情乃至環象の差異などに基因し、その發達がそれに向ふ所があつて、一言以て之を蔽へば西洋の思想は智的に發達し、東洋の思想は徳的に發達して來たやうに思はれる。智と徳とは勿論相並んで行かねばならぬが、勢ひ何れかに偏するやうになるのが、また人類の弱點である。この相異したる所から、それが政治なり學問なり、その他百般の事業にそれと特色を有するこ

調和の前提として東西各別に研究の要

是等の事情あるに因りて、東洋人が、西洋の特色を容易に窺ひ知ることが困難なると同時に、また西洋の方からも東洋のそれを研究するのは難事となるのである。試みに、英國なり、獨逸なり、佛國なりの學者が支那の經典經書又は諸子類を譯してゐるのを見ると、その努力苦心の跡が歴々とあるに拘はらずその大切の要旨を充分に汲み取り得ぬ憾がある。しかし、今東洋人が自らそれを研究し發表するとなるときは、比較的容易に出來てしかもその誤りが少くなり得るので、随つて、これが文明の調和に進む捷徑となるのである。

る。世界の上より大觀するときは、東西思潮の調和又は文明の調和といふても、東西の文明なるものは、過去幾世紀の久しきを経て茲にそれぞれ發達してゐるのであるから、これを今一朝一夕に打破し若くは調和するのは固より容易の業でない。五十年か百年か永きは幾百年といふ歲月を費すかも知れぬが、しかし世界の生命から觀ればこれは何でもない。其れ故に、今日は西洋人に西洋の知識を東洋人には東洋の知識を研究せしめて、進んで意見の交換を行ひ、徐次に目的に進むのが順序であると思ふ。

實現の第一歩に特殊機關を創設

か、難事實現の具體的方法として、先づ東洋では東洋知識を研究する機關を備へねばならぬのであるが、吾々はまた故大隈侯の存生中に『東洋文化學會』なるものを設け、故侯を會長としてこの事業達成に力を致すこととなつたのである。その際恰も孔子の二千四百年に相當した年であるから、この會の起つたのを機會として、我々は曲丘の孔子廟墓に於て祭奠を行ひ、それより北京に出で同所に講演會を開き、猶ほ支那の學者と互に意見の交換を爲さんと企てたのである。そこでこの事を故侯に告げた所、非常に歡ばれ、これは是非やつて呉れ、自分も病氣でなけ

れば行つてやりたい位であるとして、更に、その費用を如何するかとの尋ねで、費用は有志の寄附なり會員の贖金なりで辨ずる心算であると申した所が、それは大層結構であるが、しかし行ふ以上は日本の體面を汚すやうなことをしてはならぬから、これには自分も考がある、これは大いに金を募つてやるべきである、のみならずこれは西洋人等の誤解を招き易いから、先づ英米の駐日大使等の諒解を得、出來得べくんば彼等の賛成を得るやうにせよとて、それに就ても種々なる暗示をされたものである。之に加へて、時恰も、支那の當時の大總統徐世昌氏の顧問青木中將が東京へ來られて、徐總統が豫て、密かにかゝる意圖を懐いてゐるながらその國民の誤解を慮れてこれを公然發表せず居たことを語り、彼此相通ずる所があるといふのでこの計畫を歡び、その後徐世昌に謀つて種々準備までもされるに到つたのである。これが大正七年七月であつて、侯爵が呼ばれて相談しようといふ人々が多く避暑遊行中のため、涼氣になつたら呼んで談しをしようと言つて居られたが、その時既に故侯は、病の侵す所となり、外來の訪問客を斷つて居られたので、この話が侯と別れる最後となり、遂に遺憾極りない故侯の逝去に遭ひ、我々の東洋文化學會も惜むべき會長を喪つたの

で、この事は果さずして空しく時を
過した。

しかし、吾々は、この種の事業を
實現するには何等特殊の機關が必
要であり、この機關が出来れば、こ
れに従事する人物も相當に出るもの
と信じてゐるので、これに向つて斷
えず努力することを忘れなかつた。

唯だ其の機關を如何なるものにする
かといふことに頭を悩したのである
。即ち、これを既成の學校に依る

とすれば左程難事ではない様に見ゆ
るが、しかし既成の學校にはそれぞ
れに目的があり歴史があるから、こ
れを今我々の目的とする専門に行ふ
には官私立の別なく困難なる事情が
ある。これは特殊の學校か又は研究
所を設けてするより外に道はない。

乍併、之を設くることは容易ならぬ
事業である。第一にその費用を如何
にするか、また、教授の任に當る人
を如何にするかといふやうな種々な
る問題が起る、しかし、今日では、
これは大にして言へば世界的の必要
であり、小にしては國家的の必要な
れば、これを國家の補助に俟つは當然
の事である。かやうな考は、獨り學
究の間に起つたばかりでなく、貴衆
兩院の議員中にもこの種の學校若く
は研究所の如きを設けて以上の研究
を爲す必要があるといふ事が唱へら
れ、これ等が或る機會に一致を見出
したのである。而して兩三回に互り

『漢學振興建議案』なるものが議院に
提出され、幸にしてこの建議案が成
立し、政府當局も同意を表して、茲
に百七十五萬圓の補助を見ること、
なり、以上の目的に進む素地を造る
ために出来たのが、即ち、明年一月
より開校する『大東文化學院』であ
る。此の學院は右の如き目的より開
くので乃ち他年の東洋文化大學開設
の素地を作るのである。故にその
學科も今姑く應急に止めてある。

西洋文明調和の方法如何

近頃支那の新人の稱ある胡適氏
は、墨子の經上下諸篇の研究には、
因明學と歐洲の哲學とを參考し、易
の繫辭傳に『易者象也』といふ論をブ
ラトン『法象論』と比較し、また荀子
の『類不悖、雖久同理』といふ理論も
アリストテレスの『類不變論』を參考
するときは、一層判りよくなるとい
ふことを唱へてゐるが、成程この
種の比較研究をするときは双方の學
理の發見を確めて興味あることであ
り、延いて東西思想調和の端に入る
こと、もなるであらうが、しかし
等のことは日本では疾くの昔に先輩
が唱へられてゐる。即ち故總長の如
きも幾多これと類似の見を持つて居
られたのである。

想ふに東西の知識を交換して行く
ときは、必ずや或る不一致とまた或
る一致點を見出すに相違ない。これ
を調和するには、先づそれぞれの特

色を尊重し、その劣なるものを採ら
ずその優なるものに從つてせねばな
らぬ。これが若し反對に行くとときは
却つて無益有害のものとなる虞れが
ある。それ故に、調和を圖らんとせ
ば、第一に双方の研究を深うし、そ
の長短を比較し、その結果眞の優劣
が明瞭となつて、はじめて眞の調和
が成り立つものであることを忘れて
はならぬのである。

歐米に於ける最近の傾向 と東西文明調和の曙光

今日西洋に於て東洋の學問研究熱
の旺なるは、今更自分等の贅言を俟
たぬのであるが、唯一言すべきは、
從來西洋で東洋の學問研究に志した
人々には、老莊の學、即ち虛無自然
の學を主とした者が多いといふこと
である。例へば、かの露西亞のレニ
ンの如きも莊子の説を引いてその主
義は東方の哲學者より發してゐるも
のと言ふてゐる次第である。かやう
に従前は西洋の研究者等の多くは老
莊の虛無的學說を研究して、或は非
國家主義とか無政府主義とかに解し
て行つたものであるが、近來、英獨
等では孔孟の堅實主義起り、老莊の
説は抽象的のもので實際の用にはな
らぬ、即ち土地を離れた學問である
から、土地を踏む學問には孔孟堅實
の教へに依らねばならぬといふ聲が
或る一方より興り、それが漸次學界
に勢力を得つ、あるのである。

のみならず、老莊にせよ、孔孟の
説にせよ、支那の文明は概して精神
文明であつて、西洋の文明は物質文
明に傾いてゐる。而してこの物質文
明の弊が鬱積してかの恐るべき慘禍
を残した歐洲大戦争の勃發となつた
のであるといふので、將來に於ける
この種の慘害を防止し以て世を匡救
するには精神文明に依らねばならぬ
といふことは、西洋學者中の識者の
論として一致しつ、ある。随つて、
この點よりも亦、西洋では近時東洋
文明の研究が愕くべき發達を見るに
至つたのである。是等の事は、我々
の同僚又は會中の同志が親ら歐洲方
面に遊び、または他の用件の序に該
地方の情勢を視察した者の報告に殆
んど衆口一致する所である。

右等の事より觀察するときは、故
總長侯爵の唱へられた東西文明の
調和といふことも單なる一空想にあ
らずして、今やその機會到来してこ
れが實現を見ることも遠くはないと
思はれる。勿論これを完成するには、
幾世紀の久しきを要するか知れぬ
が、その緒が着々開けて侯の理想に
近づくことは疑を容れぬ所である。
故總長として親しくこの事を見せし
めたならば、放總長の感想果して如
何なるかと想はれて一は以て歡び一
は以て悲むのである。しかし、故總
長は常に『哲人は死せず』と言はれた
のであるから、故侯の英靈は必ずこ
れを降臨して冥助を垂れらるゝこと
、深く信じてゐる。

愛國の問題

教授 横山有策

古往今來、地上に國した人種は多
いが、どの國でも自國だけは永遠に
繁榮するものと皆假定してゐる。そ
して事實永遠に繁榮した國は一つも
ない。之を史家に聞くと、自國の來
るべき運命を豫想してゐた人種が唯
一つあつた、それはかの強大なるロ
マ帝國の先人であつたエトルリヤ人
種ださうな。彼等は自國が十世紀間
繼續するものとなし、紀元前四十四
年大シーザーがロマの議事堂に刺さ
れた年、不思議な彗星が出現したが、
此時彼等は宣言して云ふ、之れエト
ルリヤが存在の第九世紀を終つて最
後の世紀第十世紀に入つたのである
と。
かくの如く往生際のい、人種は他
に多くはないであらう。
個人の死ほど明瞭な確實な事實は

ないが、抑我身となると、何となく永遠に生きるやうな氣持になる。少くともあす死ぬる身であるらしい行ひをする者は多くはない。國家にしても、『君の國家もいつかは亡びる。いや、その亡びるのも遠くはあるまい』と假りに云つたら——『よろしいか假りにだよ——假りに云つただけでも暗夜の外は用心せねばならぬ事になるらしい。』

英國の大デレック、ワルボールの書簡集に、英國が共和國であつた當時、ロンドンに駐在してゐたフローレンスの公使が本國に書き送つた書簡を引用してゐる。云ふ『或人は大保氏官(クロムウエルの事)薨去せりと申し、或人は薨去せずと申候。小官に至つては前者をも後者をも信ぜず候。』云々死んだとも信じない、死なぬとも信ぜないでは一體クロムウエルはどうなつてゐるのだと聞きたくなるが、一國の滅亡については此フローレンス公使の語が含蓄ふかく味はれる。古へのアセンスは亡びたともいへるし、亡びないとも云へる。ロマでも、印度でも。

亡びたのは何が亡びたのか。亡びないのは何が亡びないのか。百萬年の後、お望みとあれば幾億兆年の後、或は無限大年の後、人類が振返つて東洋の一孤島に國した日本といふ國の批評をするに假定する。彼は大方日本が人類の文化に寄

與した功績を述べ立てるに當り、適當な美辭麗句のないことに苦むであらう。それは疑ひない。そこへ行くにエチ・ジー・ウエルズなどは現代の毛唐人だけに甚だ語るに足らない。彼はその通俗な世界小歴史(三八〇頁)に於て記して曰ふ——

『今日まで日本は此歴史に於てほんの僅少な役割しか勤めなかつた。日本の隱遁した文明は人類の運命の一般構成に對して大して寄與しなかつた。日本は受くること多く、與ふるところ殆んど皆無。』

誰か故郷を愛せず、故國をいつくしまぬ者があらう。假りにありとすれば非常に複雑した大方強いたる原因が彼をして止むなくしかせしめるに相違ない。我々の間に愛國者は決して少くない。寧ろ少しく多過ぎる感がある。何故に多過ぎるといふ。曰く彼等はあまり多くセンチメンタル・ヘロイズムの愛國者であるから。センチメンタル、即ち感傷的といふ形容詞の最も適切な定義を知らない。辭書を引いて見るとこんな定義が掲げてある——

感傷主義とは半ば知力に由て蒙る啓かれ、而かも知力に由て支配せられるのを拒む感傷である。全く開化しないもの、即ち全然知力の働きの認めべきものなき場合にはセンチメンタリズムは起らない。全く國家の

觀念なきものには愛國の念のあらう筈なく、從て感傷的愛國心も起らない。故國の觀念はある。そして只やみくもに故國を大事がる。故國の事といへばすぐにも涙ぐましくなる。それは難有い感じではあるが、知力の指導を拒絶するものであれば結果は痛しくも故國の爲めにならぬ場合が多い。感傷的愛國者はそれである。

文學方面では感傷味の起る場合が一つあるとされてゐる。一つは眞の感情でないものを銜つて誇張する場合、他は眞の感情であつても之を適切に表現し得ない場合。失はれた一本の鉛筆にも多少の愛着心はある。併し『オー我が切愛する鉛筆よ、わがポケットの友、わがノートの友鉛筆よ、われをして試験に合格せしめし鉛筆よ、汝は今いづこにかある』なんてやれば誰だつて可笑しくなる。偽つた愛國者は決して多くないが、無意識に誇張し銜揚するその人はかなり多い。少しく故國のことに徹底的批評を加ふる人をすぐ國賊呼はりする者も、理想の指導に耳傾ける人であるとは云へない。

そこへ我れこそはといふ妙な英雄味が加はると、洵に笑止なセンチメンタル・ヘロイズムが生れる。

國を護ること、國を發達させることとは、愛國者の共に深く念頭に置かねばならぬ二つの要件ではない

か。それとも日本は世界に名だ、老舗であるから、此以上發達させる必要はない。あるがま、を護ればよいといふのなら、それ以上問題は無い。大事な一人息子である、精々厚着をさせて風邪を引かせぬ工風がよからう。今にその子は色青ざめ、氣むづかしくなつて、内辨慶の、女中ばかりいちぢめるい、若様になる。

萬一志すところ 邦家の進展發達にあると假定すれば、私は雜多分子の共存といふことの必要を高調したい。何でも無い。日本國民をして世界に於て偉大な國民たらしめる爲めには、我々の間にいろ／＼の思想を抱き、様々の感情に動く複雑な人々を抱容する事に由て初めて望まれるといふのである。社會が單純に一色になることは發達の上に於て決して望ましいことではない。ある一つの思想しか受納れる力のない民族は、同族結婚同様、次第々に消滅する運命をもつ。

保護若くは支配の上からいへば單純化ほど都合よく、雜多ほど治めにくいものはない。統率の點では軍隊式が最も完全である。あの制度に由つてロマは三百年間古代には珍しい平和な時代を當時天下に保つことが出来、ラテンの文化は深く民族の間に浸透するを得た。誰がああ成績を稱へないものがあらうか。同時に、ロマを亡ぼしたのもあの制度である事

を忘れてはならない。兵隊さんになつて列を組んで居れば、自分の兄弟でもつい見分けがつかない。そこに兵隊さんはあつて一人の弟はるない。個性の發達が阻止される事はいふ迄もない。單純化と雜多共存、劃一と個性尊重、保護と發達、此二つの要素の五分と五分のかね合ひに優れた政治家は危い綱渡りをやすくとする。

排他的消極的愛國でなく、進取的積極的でありたい。單に外來思想がわが純一性を破壊するを恐れるのでなく、進んで世界の文化を寄與する何ものかを創り出すことに全精力を注ぐべきではあるまいか。

諸惡の長は誇りである。天使ルシファアの墮落も誇り故であつた。驕る平家は久しくなかつた。『驕る者久しからず』と乃父に警戒されて、『驕らざる者亦久しからず』と記したかの驕兒は僅に面白い皮肉屋であつた。愛國心を自分と自分のタイプの者共の專賣の如く振舞ふものは、その誇りの心を反省しなくてはならない。自分の理解し得る思想だけ自分の正しと考へる事だけの存在を許して、其他をすべて剪除せんとするは、誇りから出立した恐ろしい錯誤で、其結果は却てその愛する國の進歩を阻害する。寛容な心は美しい。そして切曉琢磨を喜び、長短補綴を

四

四

き協議したり。
十一月廿一日午後三時 政治經濟學部教授會を開き學科整理に關する件等に就き種々協議決定する所ありき。

科外講義

未曾有の事局に際し、吾人が刮目して社會の實相を觀じ人生の意義に觸れんとする要求を感ずると共に一方には今更に改めて考究を要すべき事柄多々あり。此の要求に應ずる爲日頃研究深く識見高邁常に吾人を指導する、諸氏に依頼して左記の如き講演を行ひて大いに裨益する所ありたり。なほ次號よりは科外講義に就き詳報を掲載すべし。

十月三十日

日本文化史に於ける 震災の地位

- 一、日本群島の地質的成因
- 二、褶曲山脈と火山脈との對照
- 三、政治的・道德的・社會的勢力としての地震
- 四、大震災と將來の文化

教授 内ヶ崎作三郎氏

十一月八日 普選と勞働問題

教授 林 癸 未 六氏

十一月二十六日

帝都復興の理想と實際

衆議院議員 田川大吉郎氏

圖書館顧問、商議委員の 職任

職任

大學圖書館として我國唯一の内容を蔵する本大學附屬圖書館は益々内容の充實及其特色ある發達を圖らんが爲今回顧問及商議委員を囑任し該事業の達成を期すること、なれり。その氏名左の如し。

顧問

市島 謙吉氏 坪内 雄藏氏

浮田 和民氏

商議委員

二木 保幾氏 大山 郁夫氏

沖 巖氏 桂 五十郎氏

金子 馬治氏 吉江 喬松氏

永井 一孝氏 山本 忠興氏

寺尾 元彦氏 安部 磯雄氏

阿部 賢一氏 北澤新次郎氏

遊佐 慶夫氏

圖書館建築委員の異動

圖書館建築委員として新たに左の諸氏を囑任したり。

名譽教授 坪内 雄藏氏

圖書館長 林 癸未夫氏

幹 事 難波理一郎氏

猶ほ左の二氏と同委員を解囑したり。

安部 磯雄氏

前田 多藏氏

人事係の異動

評議員 坪谷善四郎氏

右人事係囑託

猶ほ前任片山主事は専ら記念事業

に努力すること、なり、庶務課主事 蟻崎敏雄氏 坪谷人事係の事務の方面を補佐す。

坪谷人事係囑託は、震災に因る我が經濟界の打撃の深刻なるを思ひ、將來一層校友等の就職に就き努力する必要があるを認め、就任早々京阪及名古屋方面に出張各方面に交渉する所ありたり。

講師の異動

漢文

西 一氏

漢文

齋藤 坦藏氏

哲學

早稲田大學

文學士

河面仙四郎氏

漢文(高等學院)

文學士 河野通禰太氏

右講師囑任

罹災學生の轉學

今回罹災したる諸大學の學生にして本大學に轉入希望の者は、教授會の決議を経て第一學年に限り轉學を許す事とし、十月末日へ切にて夫々試験の上編入を許したり。

圖書館報告

○本館拾月分閱覽統計左の如し

附館日數拾九日

種別 人員 冊數

學生貸出五、七四四人 九、四四八冊
特別貸出 二一 八一
館外貸出 一三九 五、九三一
公衆貸出 〇 〇

合計 五、九〇四人 一五、四六〇冊

○圖書新加月報 本館拾月分新加圖書は總計百七十三部二百七十一冊にして内洋書百二十部百四十一冊和漢書五十三部百二十九冊なり重なる洋書左の如し

Summary List of Books added to
the Waseda University Library
(Oct., 1923)

Adams, F. D.
Experiment in geology. Chic. 1918.

Adams, F. D.
On the origin of the amphibolites of the Laurentian area of Canada. Chic. 1909.

Adams, F. D. & others.
Report of a special committee on the correlation of the precambrian rocks of the Adirondack mountains. Chic. 1907.

Allfeld, P.
Lehrbuch des deutschen strafrechts. 8. aufl. Lpz. 1922.

Bacon, R. F. & Hamor, W. A.
American fuels. 2v. N. Y. 1922.

Bartels, A.
Geschichte der deutschen literatur. 9. & 10. aufl. Hamb. 1920.

Bartholomew, J.
Bartholomew's chart of the world on mercator's projection. Lond. n. d.

Bell, J. M. & Fraser, C.
Geology of the Hokitika sheet, North

Westland quadrangle. Wellington. 1906.

Bonardi, J. P. & Barrett, E. P.
Determination of molybdenum. Wash. 1920.

Book review digest; reviews of 1923 books. N. Y. 1923.

Bowles, O.
Technology of marble quarrying. Wash. 1916.

Byce, J.
Rise of new nations. N. Y. 1916.

Burrell, G. A.
Use of mice & birds for detecting carbon monoxide after mine fires & explosions. Wash. 1914.

Burrell, G. A. & Robertson, I. W.
Effects of temperature & pressure on the explosibility of methane-air mixtures. Wash. 1916.

Burrell, G. A. & Seibert, F. M.
Apparatus for gas-analysis laboratories at coal mines. Wash. 1913.

Burrell, G. A. & other.
Black damp in mines. Wash. 1916.

Caillaux, J.
Whither France? Whither Europe? N. Y. 1923.

Carnegie endowment for international peace
Prize cases decided in the United States Supreme court; 1789-1918. v. 3 Oxf. 1923.

Caviglio, V.
Earth for mankind. N. Y. 1915.

Clark, H. H.
Factor of safety in mine electrical installations. Wash. 1912.

Clark, H. H.
Ignition of gas by miniature electric lamps with tungsten filaments. Wash. 1912.

Clark, H. H. & Tisley, L. C.
Ignition of mine gases by the filaments of incandescent lamps. Wash. 1913.

Chayton, W. Theory of emulsions & emulsification. Lond. 1923.

Clement, J. K. & Lawrence, J. N. Laboratory determination of the explosibility of coal dust & air mixtures. Wash. 1917.

Clement, J. K. & Scholl, L. A. Inflammability of Illinois coal dusts. Wash. 1916.

Clement, J. K. & Walker, L. V. Electrolytic method of preventing corrosion of iron & steel. Wash. 1913.

Comstock, G. C. Observations of proper motion stars. 1906-1916.

Madis, n. d. Prof. T. (ed.) Machinery foundations & erection. N. Y. 1923.

Cronshaw, H. B. Oil shales. Lond. 1921.

Cornell's dictionary of business & finance. N. Y. 1923.

Cumont, F. After life in Roman paganism. N. H. 1922.

Cumulative book index; July, 1922-June, 1923. N. Y. 1923.

Dennett, T. Americans in Eastern Asia. N. Y. 1922.

Ehrenberg, P. Die bodenkolloide. Dresd. 1922.

Emmons, W. H. Geology of petroleum. N. Y. 1921.

Fallex, M. Europe, les etats 1922. Par 1922.

Faill, A. L. & Royster, P. H. Slag viscosity tables for blast-furnace work. Wash. 1916.

Fernald, R. H. Operating details of gas producers. Wash. 1916.

Fox, C. S. Civil engineering geology. Lond. 1923.

Frenkel, W. Leitfaden der metallurgie. Dresd. 1922.

Fraser, J. C. W. & others. Laboratory study of the inflammability of coal dust. Wash. 1913.

Gilson, A. M. Report on the geological structure of Murphree's valley. Montg. 1893.

Gillett, H. W. & Mack, E. L. Experimental production of alloy steels. Wash. 1922.

Grazbrook, R. (ed.) Dictionary of applied physics. v. 1-3. Lond. 1922.

Great Britain. Health, Ministry of Fifty-seventh annual reports on alkali, &c. works. Lond. 1921.

Guillet, L. & Portevin, A. Introduction to the study of metallography & macrography. N. Y. 1922.

Hahn, F. Leitfaden der quantitativen analyse. Dresd. 1922.

Hahnstein, A. Contes d'auteurs francais contemporains. v. 3-5. Tokyo, 1923.

Hannam, R. Deutsche und französische kunst im mittelalter, I. Marb. A. L. 1922.

Harker, A. Notes on geological map-reading. Camb. 1920.

Harper, R. M. Economic botany of Alabama; pt. 1. Montg. 1913.

Harper, R. M. Resources of southern Alabama. Montg. 1920.

Hatschek, J. Lehrbuch des deutschen und preussischen verwaltungsrechts. 2. aufl. Lpz. 1922.

Hayes, C. W. Handbook for field geologists. 3. ed. N. Y. 1921.

Hertz, J. H. Book of Jewish thoughts. Lond. 1922.

Lewitt, J. T. Synthetic colouring matters. Lond. 1922.

Houben, J. (ed.) Die meth den der organischen chemie. Bd. 2. Lpz. 1922.

Hayt, S. L. Metallography. 2 pts. N. Y. 1920-21.

Humbert, A. Japan & the Japanese. N. Y. 1874.

Huntington, E. World-power & evolution. N. H. 1920.

Huntington, E. & Visser, S. S. Climatic changes. N. H. 1922.

Isley, L. C. & Brunot, H. B. Preliminary investigations of storage battery locomotives; specifications, laboratory tests, permissible schedule. Wash. 1920.

Isley, L. C. & Gleim, E. J. Approved explosionproof coal-cutting equipment. Wash. 1920.

International congress of eugenics. 2d. New York, 1921.

Proceedings. 2v. Balt. 1923.

Katz, S. H. & Porter, H. C. Effects of moisture on the synchronous heating of stored coal. Wash. 1917.

Kelsey, W. R. Physical determinations; laboratory instructions of the determination of physical quantities, connected with general physics, heat, electricity & magnetism, light, & sound. 3. ed. Lond. 1907.

Knaulsch, H. Evolution & progress of mankind; ed. & coll. by A. Heilborn, tr. by J. McCabe. II. Lond. 1923.

Kraus, E. H. Descriptive mineralogy; with special reference to the occurrences & uses of minerals. II. Ann Arbor, 1911.

Krogh, A. Anatomy & physiology of capillaries. N. H. 1922.

Kudlich, R. H. Safe mechanical equipment for use in shaft sinking. Wash. 1922.

Kudlich, R. H. & Hood, O. P. Safe practice in using wire ropes in mines. Wash. 1919.

Levy, E. Compressed-air illness & its engineering importance; with a report of cases at the East river tunnels. Wash. 1922.

Low, A. H. Notes on technical ore analysis for students; step demonstration method. N. Y. 1923.

Lull, R. S. & others. Evolution of man; a series of lectures delivered before the Yale chapter of the sigma Xi during the academic year 1921-1922; ed. by G. A. Baisell. II. N. H. 1922.

McNair, M. W. List of American doctoral dissertations printed in 1921. Wash. 1923.

Meizner, M. Jewish law of marriage & divorce in ancient & its relation to the law of the state. 2. ed. rev. N. Y. 1901.

Morgan, P. G. & Bartrum, J. A. List of the minerals of New Zealand. Wellington, 1913.

Murhusius, H. Landhäuser. 2. aufl. II. Münch. 1922.

New York times index; v. 10, no. 2. (Apr.-June, 1922) N. Y. 1922.

Nippold, O. Development of international law after the world war; tr. by A. S. Hershey.

Oxf. 1923.

Nusbaum, C. & Cheney, W. L. Effect of the rate of cooling on the magnetic & other properties of an annealed eutectoid carbon steel. Wash. 1921.

Nusbaum, C. & others. Magnetic relativity relationship as related to certain structures of a eutectoid-carbon steel. Wash. 1920.

Ogawa, G. Expenditures of the Russo-Japanese war. N. Y. 1923.

O'Rahilly, A. Father William Doyle S. J. Lond. 1923.

Osler, W. Evolution of modern medicine. N. H. 1922.

Passow, R. Die aktiengesellschaft. Jena, 1922.

Phillips, W. B. Iron making in Alabama. 3. ed. Alabama, 1912.

Porter, H. C. & Oritz, F. K. Deterioration & spontaneous heating of coal in storage. Wash. 1912.

Proulx, W. F. Geology & mineral resources of Clay county. Montg. 1923.

Rawdon, H. S. Use of ammonium persulfate for revealing the microstructure of iron & steel. Wash. 1920.

Rawdon, H. S. & Jimeno-Gil, E. Study of the relation between the brinell hardness & the grain size of annealed carbon steel. Wash. 1923.

Reclus, E. Nouvelle géographique universelle, la terre et les hommes. 9v. II. Par. 1876-1894.

Rice, G. S. Mine fires. Wash. 1912.

Rice, G. S.

Notes on the prevention of dust & gas explosions in coalmines. Wash. 1913.
 Rice, G. S. & others.
 Coal-dust explosion tests in the experimental mine 1913 to 1918, inclusive. Wash. 1922.
 Rice, G. S. & others.
 First series of coal-dust explosion tests in the experimental mine. Wash. 1913.
 Ries, H.
 Building stones & clay-products. II. N. Y. 1912.
 Robertson, D. H.
 Control of industry. Lond. 1923.
 Robertson, W. S.
 Hispanic-American relations with the United States; ed. by D. Kinley. N. Y. 1923.
 Saunders, K. J.
 Buddhism & Buddhists in Southern Asia. N. Y. 1923.
 Schaffer, F. X.
 Lehrbuch der geologie. II. Lfgz. 19. u. 20.
 Schleyer, W.
 Badler & bademstalten. II. Lfgs. 1963.
 Schlund, P. E.
 Die philosophischen probleme des kommunismus vornehmlich bei Kant. Munch. 1922.
 Scott, H.
 Critical ranges of some commercial nickel steels. Wash. 1920.
 Scott, H.
 Relation of the high-temperature treatment of high-speed steel to secondary hardening & red hardness. Wash. 1920.
 Scott, H. & Mowius, H. G.
 Thermal & physical changes accompanying the heating of hardened carbon steels. Wash. 1920.
 Shafer, R.
 Progress & science; essays in criticism. N. H. 1922.
 Smith, E. A.
 Underground water resources of Alabama. Montg. 1907.
 Smith, H. I. & Hamon, R. J.
 Methane accumulations from interrupted ventilation. Wash. 1913.
 Stanford's general map of the world on mercator's projection. Lond. 1922.
 Stock, H. H.
 Safe storage of coal. Wash. 1920.
 Strasburger, E. & others.
 Strasburger's Text-book of botany. Lond. 1921.
 Swift, F. H.
 Studies in public school finance; the west California & Colorado. Minn. 1922.
 Tatsuzawa, T. (comp.)
 Gestaltende personlichkeit der neueren geisteswelt. Tokio, 1923.
 Thiessen, R.
 Structure in pale-zoic bituminous coals. Wash. 1920.
 Thorpe, J. F. & Ingold, C. K.
 Synthetic colouring matters: Val colours. Lond. 1923.
 Tonnies, F.
 Kritik der offentlichen meinung. Ber. 1922.
 U. S. Library of Congress.
 Report of the librarian of Congress & report of the superintendent of the library building & grounds, 1922. Wash. 1922.
 Unguhart, J. W.
 Steel thermal treatment. II. Lond. 1922.
 Viviani, R.
 As we see it; tr. by T. R. Yarrow. N. Y. 1923.
 Wallas, G.
 Our social heritage. N. H. 1921.
 Ward, J.
 Study of Kant. Camb. 1922.
 Watkins, J. A.
 Carbon monoxide poisoning in the steel industry. Wash. 1917.
 Wed, C. M. & others.
 Manganese, uses, preparation, mining costs & the production of ferro-alloys. Wash. 1920.
 William, R. Y.
 Mine-ventilation stoppings with especial reference to coal mines in Illinois. Wash. 1915.
 Wolfe, H.
 Labour supply & regulation. Oxf. 1923.

急 告 (維持費拂込に就て)

御拂込み下さいました本會本年度維持費の受領廣告は本月號掲載の分で一先づ完了致しました。然し何分にもあの際の事ですから萬々一の發表洩れ、遞送中の焼失なども豫想せられますから若し御拂込濟の方で掲載洩れの方が御座いましたら至急御一報下さい

大正十二年十二月十日

早稻田大學校友會事務所

校友各位

校友會報

秋期校友大會と震災遭難者追悼會

追悼會

九月一日關東地方を襲ふた大震災は、東洋文化の中心たる帝都をはじめ東西物資集散の咽喉をなす横濱、その他の市邑を殆んど曠野と化し、その厄に遭ふて斃れたる者萬を以て數ふるに至つたので、既に數旬を経たる今日もその凄慘の狀猶ほ我等の心膽を寒うするのであるが、これと同時に、各々志望を懷きながら空しく慘禍の中に投ぜられた人々を想ふて洵に測陰の情に禁えぬ、我が學園に於てもこれ等と運命を共にしたる者、校友四十名(尙行方不明者中に遭難者ある見込)學生十一名に及ぶ、或は研學の勞を積みつゝあり或は既に實社會に活躍し居たる者が實に慘たる終焉に逢へるを見て、多年學窓を俱にせるもの同情の念已み難く哀惜の情に堪えぬ次第である。されば、我が校友會に於ては十一月十八日を期し大隈會館に於て秋期校友大會を兼ね震災遭難の校友學生等のために其の遺族を招じ親しく諸靈を祭り且つ慰むると共に多數罹災校友慰安の園遊會を催

すことゝした。

晩秋の空は愁への雲深く冷風身に滲む日であつたが、同窓思慕の念深き校友等の相會する者三百餘名の多きに上る、午前十時咽び渡る樂の音につれて來賓はじめ齋主その他が會館書院の會場に參列するを待ち、嚴かに招魂の儀あり、幣帛神饌の供進あつて、齋主出雲大社教千家副管長恭しく靈前に進み、祭文を奏し震災の慘害を具さに追懐し茲に天折せる諸靈を祭る旨を述べ、暫しが間は一場寂として聲なし、次で高田本大學總長兼校友會長哀傷の至情を吐露して弔詞を朗讀し、震災當時を偲びては萬感胸に迫り、「諸氏夙に青雲の志を懷いて學を我が早稻田學園に修むること多年、或は業已に成りては社會の各方面に活躍し以て國運の進展に貢獻し、或は未だ盤雪の功を積みつゝありて將來大いに爲す所あらんとし我等また深く之を認識し之を期待せしに、人事寔に測るべからず忽焉として逝く而も其の死の慘たる悼惜の情已み難く思慕の念實に深し」といふに及んで、聲涙共に下り、一同當時の慘澹

たる状を目前に浮べて感慨殊に深し、これに續いて、痛ましき妻の老母や未亡人乃至兄妹等の

遺族が代る々々惜別の玉串を捧げ深き愁色に包まるゝさまは一同の暗涙をそゝる。最後に參會



平壤校友會の創設記念

者交々參拜をなし追慕の至誠を致し、かくて莊重なる追悼會を閉ぢたのである。

總長校友會長弔詞
時維れ大正十二年十一月十八日肅みて

祭を這般の大震災災に因りて不幸難に遭ひ幽明已に界を殊にせる本大學校友四十氏並に學生十一氏各位の靈に致す顧みれば九月一日の大震災は事咄嗟に起り其及ぼす所の範圍頗る廣汎其被らす所の慘害亦極めて峻烈にして家屋の崩壊流失若生の慘死損傷共に算なく加ふるに却火隨所に發し市邑村閭一夕にして焦土と化し瞬前の平和忽ち破れて幾億の財貨を焼き其慘害の大なる日を閱すること已に八旬に垂んとして悽愴尙ほ新なるものあるを覺えしむ奚んぞ圖らむ我早稻田大學出身の校友學生諸氏にして亦此禍中に在り難を避くるに遠なく雄魂空しく地に委して英靈再び同らすに由なきもの斯の如く多からんとは嗚呼悲い哉
惟ふに諸氏夙に青雲の志を懷いて學を我早稻田學園に修むること多年或は業已に成りて社會の各方面に活躍し以て國運の進展に貢獻し或は未だ盤雪の功を積みつゝありて將來大いに爲す所あらんとし我等また深く之を認識し之を期待せしに人事寔に測るべからず忽焉として逝く而も其死の慘たる悼惜の情已み難く思慕の念實に深し
然れども之を外にして我早稻田學園の蒙りたる損害は比較的之を輕微とすべく校友の多くは難を免れて各其業に復し以て國運の復興に盡しつゝあり教職員亦これ悉なきを得學生の多數も己に校に歸りて學に勵みつゝあるを以て諸氏が生前愛慕したる母校は其基礎更に鞏きを加へ校運益々隆にして前途の發展期して待つべきものあり諸氏にして

地下に之を知るあらは必ずや以て聊か慰むるを得んか
茲に諸氏の遺族を招し先輩舊友と共に壇を設けて祭を行ふに方り當時を回想して萬感交々胸に迫り涕淚更に新たに多く言ふに禁へず在天の靈尙はくは之を諒せよ

早稻田大學 總長
早稻田大學校友會長
法學博士 高田早苗

弔辭

度みて大震災遭難學生諸君の靈に告ぐ時維れ大正十二年九月一日未曾有の大震災に繼ぐに三日に亘る火災を以てし炎々たる紅蓮の焔は猛威を逞うし帝部を初とし横濱及び湘南の都邑を灰燼に歸し國富を壊滅すること百數十億生靈を奪ふこと十有餘萬同胞の悲歎何物か之に如かん
此の大震災災に當り絶大の希望を懷き久遠の理想に向つて勉學怠らざりし前途有爲の吾學友野田太郎氏外十名の諸君も亦此慘禍に罹られ卒然として不歸の客となれり嗚呼悲しい哉
吾等學生一同諸君の計に接し痛嘆措く能はず本日茲に諸君の常に敬慕せられたる遭難校友諸兄の靈と併せて追悼會を營み哀悼の徵忱を表す在天の靈尙くは饗けよ

震災遭難校友學生諸靈

- 早稻田大學救護會總代 蒲原俊慶
- 大正十二年十一月十八日
- 校友
菅間徳次郎君 中村恭太郎君
今 逸郎君 鈴木 雄治君

- | | |
|--------|-----------|
| 平澤 貞曠君 | 男爵 片岡恒太郎君 |
| 伊藤 眞路君 | 矢吹 悌悟君 |
| 川崎 信顯君 | 入澤 忠雄君 |
| 佐々木正雄君 | 甲藤 長氣君 |
| 岡村 五六君 | 馬場平二郎君 |
| 北條清三郎君 | 河野 通憲君 |
| 野田 保雄君 | 日吉 武雄君 |
| 北原 光躬君 | 上杉 博次君 |
| 山崎 昌平君 | 那須 信君 |
| 檜岡 太郎君 | 小林 庄司君 |
| 中村 高秋君 | 山村 政也君 |
| 吉永慶次郎君 | 八幡 俊隆君 |
| 杉山 直吉君 | 福井 廣治君 |
| 西村 豊治君 | 岩崎 義雄君 |
| 飛田 一郎君 | 金谷 仙一君 |
| 矢崎壽衛雄君 | 町田義二郎君 |
| 小鹽 寛君 | 三島 景美君 |

秋期校友大會

濕やかでしかも嚴かな遭難校友及學生の追悼會が了へると、その會館大書院に於て秋季の校友大會を開いた。震災後初の會合のこととして各自震災當時を追想して萬感交々起ると同時に舊友相親しむの情更に厚し、開會

の辭に次いで、直に議事に入り、推薦校友の件を議し、満場一致を以て別項の諸氏を校友に推挙するに決す。續いて會務の報告を兼ねて高田會長は主要左の如き挨拶を爲し、校の將來に就ては特に異彩を放つ様各自の努力と援助とを懇望され、猶ほ、名取常任幹事より震災校友の救援及び園遊會の催しに就いて説明あり、坪谷人事顧問よりは震災校友の職業紹介に就き懇望する所があつた。

高田會長挨拶の梗概

千古稀なる大震災が關東方面を襲ひまして朝野を擧げて其の善後の事に忙殺さるゝこととなつたので、我が校友會に於ても、幹事諸君は屢々會合を催し、獨り東京のみならず各災害地に在る罹災校友諸氏の調査及び慰問をはじめこれが積極的援助方法を講じ、殊に罹災校友中の失職者に對しては特に坪谷善四郎氏に顧問を依頼し翁女官氏を擔當者とし職業紹介の勞を執る等、非常天變の場合に處して巨細に互る心盡しをされたのであつて、これは主として幹事諸君の努力に依るのであります。今度の震災はその惨害の及ぶ範圍實に汎くその程度極めて深刻で、無量の富を灰燼に歸し數萬の人命を奪ひまし

たので、我が校友中にも既に判明せる死者四十名に上り、學生中で十一名は惨死の厄に遭ひました。學園としては愛兒を失ひ本會としては惜むべき會員を喪ひまして定に悼惜の念に禁えぬ所から、本會は母校と共に今日は等諸靈のために追悼會を営んだ次第であります。

我が學園の災害は、全焼若くは半焼といふ災禍に罹つた他の學校に比しますと餘程輕微の様に見えますが、あの焼失した應用化學科の建物は單なる建築物のみではなく、其の中には同學科に屬する種々なる設備や得難い機械及び研究材料等が密收されてあつたので、是等の消失は應用化學科にとり實に至大の打撃でありました。また、明治二十六年に出來て本大學の比較的古い建物として無數の内外名士を迎へましたあの大講堂は崩壊し、會館土藏は崩れ、塀は殆んど倒れ、その他屋根や壁などの破損しましたのを仔細に見積りますと、どうしても其の損害高は五十萬圓を下らぬといふのである。殊に故總長の記念事業は諸君の熱烈なる援助を得たのであるが、その半ば以上は今度の震災中心地たる東京方面の人士の芳志に因るのであつて、殊に何千、何萬といふ申込者は概ね間接直接災禍を蒙られたのであるから、是等の方には近き將來に於てその申込

金の拂込を促すといふことは御遠慮しなければならぬ。随つて、記念事業は固より中止はしませんにして、も實に深き打撃を受けましたので、是等直接間接の損害は決して容易ならぬのである。

それで、右に述べた諸建築の復舊費としも相當の臨時費を要するは勿論であつて、加之本大學の圖書館、帝大の圖書館を失ひました今日では學園の圖書館としては恐らく東京第一であらうと思ひますが、その書庫や閱覽室は先年來より狹隘を告げ殆んど新圖書の入れ場に困つて居た所へ地震の爲に多少の損傷を受けて居り將來の天災などに備へる上からいへば新に一層堅牢なるものを造らねばならぬのである。更に、舊講堂を失ひましたので科外講義や講演會の會場にさへ差開へる譯ですから故總長の記念大講堂、萬一大々の講堂を造るだけの金が出来ぬとしても記念に相應しいだけの講堂は必要上からも是非建てねばならぬ。また當學園が帝大などと同等の特権を得た今日其の實質に於てこれらの下風に立つ様では洵に慚すべきことであるから、大に内容の充實には力を注がねばならぬといふので私の總長就任以來未だ日は浅いけれどもその方に向つて渾身の努力をなす考である。然るに就職以來事件多く殊に震災の爲餘暇を得ない情態であります。そ

園遊會

大會に引續き、晝餐を兼ねて園遊會を開く、會場は天候が氣遣はれたため會館内にしたが、書院や洋館の方には、だんご、や、しるこ、あり、本館より別館に至る間は、おでんやあり、別館には、すし、に、てんぷら、及び蕎麥などが配せられ、各所に正宗の熱がなが出てゐるので、各自嗜好に隨つて各所を襲ひ、先輩後輩入り亂れ歡談笑語を交へ、簡素なれども大いに食ひ大いに飲むといふ有様で、罹災校友の慰安は固より、久振りに老若の學友眞に團欒の氣分を味ふて歡興盡きず、動もすれば荒ばんとする燒野原の帝都の一角に拘すべき人情美が漲り復興氣分が大に勃興した。かくて午後

四時を過ぐる頃、三々五々隨意散會した。

新推薦校友

被推薦者

新潟縣柏崎町廣小路七四四

海産物肥料問屋 矢口久一郎

市外青山穩田九六石川壽三郎方

帝國文藝部主任 濱村 米藏

下谷區上野櫻木町一七

著述業 宇野格次郎

牛込區中町二四

著述業 三上於菟吉

神奈川縣小田原町天神山

著述業 北原 隆吉

室蘭市泉町四〇

室蘭毎日新聞社長

鈴木 要吉

牛込區大曲

竹内商會火災保險部主任

米家 吾一

金澤市味噌藏町二五

魚問屋 能澤榮太郎

四谷區花園町六四

東京朝日新聞社運動部長

小高吉三郎

函館市外トラビスト修道院

三木 操

遭難校友學生遺族出席者

故今逸郎氏遺族 今藤郎氏

故町田義二郎氏遺族 町田力藏氏

故飛田一郎氏遺族

故西村豐治氏遺族 西村幸七氏

故馬場平二郎氏遺族

故中村高秋氏 中村恭太郎遺族

故北原光躬氏遺族

故山崎昌平氏遺族 山崎小之氏

故入澤忠雄氏遺族 入澤長子氏

故矢吹悌悟氏遺族 矢吹勝之助氏

故荒木龜之助氏遺族

故野田保男氏遺族 野田茂吉氏

故日吉武雄氏遺族

故古川儀一氏遺族

故吉永慶次郎氏遺族 吉永ふく氏

故岡本三郎助氏

故學生高津喜太郎氏遺族 高津七次郎氏

故學生矢野彦四郎氏遺族 矢野菊次郎氏

當日の出席者

教職員

高田 早苗 伊東 貞敏 伊藤 康安

出井 盛之 五十嵐 力 市川 繁彌

石井 眞峰 長谷川安兵衛 林 葵未夫

徳永 重康 徳永 庸 大久保清志

岡 次郎 渡 俊治 渡部寅次郎

蠣崎 敏雄 河面仙四郎 上村 鐵雄

神尾 錠吉 田中 穂積 立川 長宏

高橋 善吉 民野 雄平 竹野 長次

土屋 詮教 中村 功 中村 宗雄

中村彌三次 中桐確太郎 永井 一孝

難波理一郎 村田榮太郎 内ヶ崎作三郎

氏家 謙曹 山ノ内 弘 山口 一誠

山岸 光宣 前田 多藏 松井元太郎

松島鉦四郎 前田定之介 増田 綱

先光 孝 藤井鹿三郎 藤野 了祐

深澤 政介 小林 堅三 小林 行昌

新井 忠吉 天川 信雄 秋田 重季

木村 三郎 桐山 均一 北澤 武男

岸畑 久吉 岸本能武太 溝口 直枝

三宅 當時 密田真太郎 南 晴耕

七五三野仁一郎 清水泰次 鹽澤 昌貞

日高 只一 樋口 清策 平沼 淑郎

師岡 秀麿 末高 信 杉山 重義

鈴木 徳藏

飯田 憲造 飯島三之助 巖谷 冬生

今城 英一 濱島 清一 堀川 直吉

星野 欽治 木間 勇吉 別當 好平

別宮音五郎 土橋 觀英 徳田 重美

若林 成昭 川合 安朗 川上 信廣

龜石竹次郎 官谷壽三郎 依田 孟

米村嘉一郎 高橋 泰次 中川 重政

中村 功 中田喜代太郎 中村 真藏

村山 源吉 内田 繁隆 上坂 西藏

久間 九郎 倉辻 秀俊 八幡 恭助

山路虎之助 山田 末吉 山瀬 壽一

馬屋原仙一 前田 彦藏 松谷善三郎

府川文次郎 小林 義春 小柳 觀一

香山 賢郷 駒込譽之助 淺野謙次郎

秋山小次郎 佐藤 忠吾 齋藤 隆夫

岸本 雷助 三輪吉太郎 溝淵 兼次

宮本 正義 庄司 武志 島崎 尙

繁野 珠城 新保勘解人 諸角秋三郎

鈴木 等

井上 雅二 井上 俊吉 井口龜三郎

井口 誠一 井芹 繼志 伊藤 有道

伊藤 理基 居藤 高季 飯塚 信太

市川 又彦 岩田豐之助 磯 信太

稻本 廣吉 今村 興作 池田 龍一

池田 千秋 石井忠太郎 石井 民雄

石川 哲 石川 勝治 石田祐一郎

石谷傳兵衛 長谷川誠一 長谷川誠也

馬場園義馬 濱田徳太郎 原田駒之助

原田 實 原口竹次郎 二宮 知定

二宮 憲二 新妻 武雄 西川 伸一

堀川 直吉 星野 治作 星野 芳郎

木間真太郎 土井 潔 土居 健三

土肥禮太郎 外松龜太郎 東儀 季治

徳田 靜男 徳永 尙 豊田 俊助

富永 信雄 中條 清勝 小川兼四郎

小笠原鎌藏 小田井紫朗 小瀧 辰雄

尾野松太郎 尾崎 益三 織田 長博

大橋 爲之 大岡 胖 大河内隆弘

大塚 利雄 大槻 音松 大村 操

大野 金江 大山 繁雄 大島 正一

岡 侃 岡本 季三 奥野 雄三

奥 恂太郎 沖 作次 翁 玄旨

渡邊 八郎 渡邊太三郎 渡邊 五郎

渡邊 保穂 渡部 正直 渡邊 喜徳

渡邊 操 加藤 武 加賀美治兵衛

河村宗一郎 河本 眞一 片岡 彰三

影近 清毅 上村 英雄 相原文太郎

吉位恒太郎 吉田 弘 吉田 秀彌

橫澤源三郎 田中小太郎 田中 周衛

田中 常吉 田中 靜衛 田村 保

田村 又六 田淵 豊吉 谷野 治越

高橋圓三郎 高崎 保介 高木八太郎

高廣 三郎 種村 宗八 竹家吉治郎

竹田 茂 竹内 榮次 武島 賢吉

橋石 謙助 蘭田 廣志 津島 廣吉

坪内 大造 坪谷善四郎 恒川 惣市

汪 千三郎 名取 夏司 永井 清志

永瀨 博 中村 智一 中村孝之助

中野 鐵平 中野 實範 中島 直吉

永島富三郎 村山駒之助 椋原 政治

宇野澤辰次 鶴澤 宇八 内田 貴節

野間 五造 野島 八郎 桑原 忠夫

桑原 重矩 菅野 健吉 倉住 覺藏

楠田 政二 矢川源三郎 矢島 力

柳澤 泰爾 山田 清作 山田 隆治

山田幸太郎 山崎 孝藏 山崎 英一

山崎 峰與 山森 利一 眞船英之助

松原松之丞 松浦 九一 松藤 秀雄

松澤 一雄 前田梅太郎 増田 義一

増子喜一郎 藤井 眞雄 藤田 和夫

藤村 太吉 藤村 茂男 小林 十平

小久江成一 小久江勇策 河野 忠一

遠藤 五作 青山 幸吉 青山松一郎

淡路 周策 荒井源太郎 荒井 惟俊

荒巻 繁藏 秋本 泰三 蘆澤 夏雄

安藤 三郎 佐藤 正 佐藤安兵衛

佐藤 末野 佐々山雅一 齋藤 敬三

崎山刀太郎 木谷兵治郎 木下 明

京谷 大助 岸本市太郎 結城 敏

三好儀太郎 三村 威 水谷 憲章

宮川 源 宮田 修 宮子 音吉

宮澤 隆胤 宮澤 胤勇 白水 宗通

白崎鏡三郎 島崎 薫 澁谷 三

色田 正治 下村 正治 下倉 禎一

進藤 靖 廣田繁太郎 東 則正

平井 幸雄 平塚 幸三 平野英一郎

廣江源三郎 廣瀬 濟 廣本 義章

望月 直和 森 孝 森脇 美樹

百瀬 唯一 妹尾房次郎 仙台岩太郎

須藤 良一 杉原 岩作 杉原 治助

鈴木作平次 野木 浩之 鈴木 重孝

去る八月三十日平壤壽町武藏野に

於て有志の會合を開いた、大分此の

地方にも學園出の人が居られるの

で、永井柳太郎氏平沼博士の來壤の

平壤校友會の創設

時等折々な校友の會合はあつたが未だ校友會と名のつく様な具體的のものはないので、此處に平壤校友會設立の議を可決し一寸とした會則をも作るに至つた。

當日の出席者は割合に少なかつたが非常に氣持のよい意義のある會合で夏の夜を面白く過す事が出来た。

當日の出席者左の如し。

- 松永 六治 鄭 奎 鉉 中丸好太郎
- 砂田 翠月 木下 生盛 江上 成義
- 牧野 進 宮館 宏 三浦 正記
- 伊 宗 植 木村 榮一 宮口 武男

平壤校友會々則

- 第一條 本會ハ早稻田大學校友會ト稱ス
- 第二條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ厚クシ會員ト母校トノ關係ヲ親密ニスルヲ目的トス
- 第三條 本會ハ平壤在住、及附近ノ校友及關係者ヲ以テ組織ス
- 第四條 本會ハ左ノ役員ヲ置クソノ任期ハ二ケ年トス
- 會長一名、副會長一名、幹事一名
- 第五條 會長、副會長ハ會員之ヲ互選ス
- 幹事ハ會長ノ指命ニ依ル
- 第六條 會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ管理ス
- 副會長ハ會長ヲ代理輔佐ス、幹事ハ會長ノ命ニ依リ諸般ノ會務ヲ處理ス
- 第七條 本會ハ事務所ヲ平壤黃金町五拾一番地大阪毎日新聞平壤通信所ニ置ク

第八條 本會ハ毎年春夏秋冬ニ定期總會ヲ開キ其他必要ト認ムル時ハ臨時總會ヲ開催ス

第九條 本會ノ經費ハ會員ノ離出ニ俟ツ

第十條 本會ハ會員ヨリ會費トシテ月十錢ヲ徴收ス

役員氏名

- 一、會長 宮館 貞一
- 一、副會長 鄭 奎 鉉
- 一、幹事 砂田 翠月
- 石井 東作 宮館 貞一
- 鄭 奎 鉉 砂田 翠月
- 中丸好太郎 木下 生盛
- 江上 成義 松永 六治
- 牧野 進 丸本庄 太郎
- 高橋 正一 加藤 虎清
- 等々力敏夫 百々瀨 計馬
- 別府 世民 佐藤 勝
- 坂東 正 野口 金光
- 河村 國助 森口 修
- 在 校 生
- 宮 箱 宏 三浦 正記
- 木村 榮一 宮口 武男
- 尹 宗 植 吉尾 英克
- 黃川 田 林 羽根川 日出雄

大阪校友秋季大會と田中理事の一行

十一月九日午後五時より大阪校友秋季大會を大阪ホテルに催す、六時過開會幹事中山豐三氏座長席に就き會計報告あり全會一致可決後食堂を開く、總長代理田中博士及折柄來阪中の山本先生池田龍一氏田淵豐吉氏

列席せらる食後中山豐三氏當番幹事を代表して一場の挨拶を述べ、田中博士より震災當時の母校の状況に將來の經營策に付詳細なる説明に次ぎ此際記念事業完成に付特に援助せられたしとの希望あり維持員砂川雄峻氏當地校友を代表し誠意學校の趣旨に副ふべく努むる旨答へられ萬場拍手を以て賛成の意を表す引續き來賓山本先生池田龍一氏田淵豐吉氏のチブルスピーチあり終つて大阪校友會創設以來の盛會裡に九時頃散會す當日の出席者左の如し

來賓 田中穂積博士 山本忠興博士 代議士田淵豐吉氏 池田龍一氏 會員

- 井上 靜一 伊藤 孫作 和泉 榮
- 生駒吉之助 生駒左衛門 伊藤 儀助
- 伊藤 基明 伊藤 正文 原 正一
- 原田甚四郎 半田 宗一 西田 俊一
- 西尾 謙吉 本野 博章 堀田庄五郎
- 堀内 武夫 星野庄治郎 豐岡佐一郎
- 小川爲次郎 大谷 元忠 小野 松彦
- 岡安 理平 大森 純一 大江 萬助
- 岡田留三郎 於 勢 升 荻谷瀧三郎
- 大木竹治郎 和田 義公 和田真太郎
- 金澤種次郎 加藤 茂正 金田 國雄
- 榎原 七郎 川崎正太郎 吉宗 貞之
- 吉岡 和一 横山 包隆 高山 圭三
- 田部 信秀 高田 通泰 谷口 春雄
- 田中 莊二 田中 忠治 田名孝太郎
- 高橋 忠司 巽 精一 高木熊次郎
- 田村 秀 坪内 士行 土屋 昌美
- 辻岡 榮三 中島好太郎 鍋島熊太郎
- 中田 守仁 鳴神 靜一 那須野義勝

鳥取縣支部總會

早稻田大學校友會鳥取縣支部本年度總會は九月五日午前十一時より同縣東伯郡倉吉町吹吹公園内に有親館に開會し、同縣下各都市より校友並に歸省中の學生出席約三十名あり、開會地在住校友門脇太郎氏司會、開會の辭をなし、同縣支部長柴田秀藏氏昨夏支部創立以來の會務並に故大隈總長記念事業資金募集經過結果を報告し次で決議事項の提出あり。

『吾人は益々母校の眞精神發揮に努め地方文化の爲め貢獻せむ事を期す』との決議をなし尙ほ關東地方震災に就て左の決議をなした。『吾人は今回帝國未曾有の大震災に對し悲痛哀愁の意を表し其災害の一日も速に恢復せむ事を祈る』

石川縣校友秋季例會

早稻田大學石川縣校友會は十月廿一日金澤市蛤坂町山錦樓に於て秋季例會を開く席上互に母校罹災輕微を喜びつ、胸襟を披いて驩談に時を移し次回の冬季例會は少し繰上げ十一月廿四日能州和倉温泉にて開催すること、し植田耕造氏を準備委員に委嘱し十時半和氣露々の裡に散會せり當日出席者は左記十五名なり

- 關戸 寅松 木下賢太郎 能澤榮太郎
- 粟倉 精三 植田 耕造 武谷甚太郎
- 西原 佐一 廣根 守衛 紺野 孟平
- 堀内 益雄 河合 利恒 千代 清次
- 府坂長次郎 川村 善吉 犬飼寅太郎

面影

講師 中村 宗 雄 氏

とし、其長所を採つてその民事訴訟法と強制執行法との改制を断行し民事訴訟法上に新生面を開いたのであるが、



その特色は書面審理主義の煩を避けて口頭審理の簡捷に就き、自由口頭辯論や自由心證の新路を開き、殊に、事件審理の敏速を旨とし、小事件の解決を容易にして從來並に獨逸訴訟法に於ける缺點の多くを矯めて時代の要求を制度の上に實現した點にある。是等の點に就ては此後に於ける我國の民事訴訟法の改正に付て参考として研究する必要があらうと思ふ。」

近時著しき社會の進運に鑑み、我が政府當局に於ても特に法制審議會なるものを設け、選舉法その他更改を要する諸法制に關し衆智を聚めて調査しつゝ、あるので、我が現行法中最も缺陷多くして民間の訴訟事件進行上極めて不便不利なりとせらるゝ、民事訴訟法研究のため、獨逸方面に留學を了へて最近歸朝せられた講師中村宗雄氏を訪ふて、法學上の新傾向や特色ある獨逸新訴訟法の主要點などを窺ひ旁茲にその面影を紹介すること、した。

一日早稻田鶴巻町の氏の寓居を訪れると、氏は辯護士型の軽快な態度で迎へながら、快く請ひを容れて。

『私は最初獨逸に入りまして、獨逸獨逸に遊びましたが、主として專攻の民事訴訟法に加へて法理哲學にも特殊の興味を以て研究しました。

獨逸利ては舊裁判所法の不備で多年種々の弊害を生じたのですが、かの有名な學者で司法大臣の地位を占めたエキセレンツクラインが一八七七年の獨逸民事訴訟法を範

とて、制度を革めることは容易でないが、しかし明治二十三年以來殆んど改正を加へずに判例などで補正して漸くその體を維持してゐる。我が國の民事訴訟法改定の要を説き、次に、最近獨逸に於ける

法學上の新傾向 としては、古い獨逸流の注釋法學者や法律萬能主義者の時代が去つて、今や解釋法學

を無視しないと同時に社會一般の成程と首肯する所を目指す新しい氣運

が向いて居る。換言すれば頗る強い英米法主義の影響を受け初めたと云へる、故に此意味に於て我國にても英米法研究の一日もゆるかせにすべからざるを指摘し、更に法の實際的研究の進んでゐる點に就て次の如く語られた、

「歐洲では最近殊に法律を社會に適用することを忘れず、例へば維納大學では

晩餐を俱にししながら、法曹の學理及び實際的研究を進むるに苦心されたことなどを語り、最後に、從來の海外留學者は多く學窓を出たばかりの未熟の人が多かつたが、最近では相當の研究者が出かけるやうになり、文部省などでも相當の研究費を支給して研究員を送る有様で、専門の研究者が行けば向ふでも考慮を拂ひ出来るだけの便宜を圖るから、この方が有効であることを附言された。因に氏は大正六年大學部獨法出身で、その翌年には辯護士の試験に登第し、續いて岸博士の下にありて法學の實際研究中の所、大正九年本大學留學生として歐洲に渡り、所期の研究を了へて本年八月末日歸朝せられ、目下新研究を提げて獨自の講義に力を注いで居られるのである。

とて、氏が獨逸に滯留中同國知名の學者や法官その他の有力者を招じて

校友動靜

(名簿締切後の異動)

教職員之部

- 八〇 渡部寅次郎(講師)府下戸塚町清水川十
- 八一 吉田源次郎(講師)府下東鴨町三ノ七石
- 八二 井方
- 八三 邦語政治科
- 八四 齊藤忠太郎(一八)横濱市蒔田町東谷八
- 八五 八三渡邊千代吉方
- 八六 喜多莊一郎(講師)府下雜司ヶ谷鶴巻三

- 谷新太郎(一九)兵庫縣川邊郡武田尾
- 中村常一郎(二〇)橫濱市西戸部町四ノ原
- 一六〇六中學校前
- 石井久太郎(二三)府下南千住町地方橋場
- 二一四
- 久間 九郎(二八)府下大久保町西大久保
- 四四五
- 鈴木 寅彦(二九)小石川區原町八二
- 杉田 駿(三五)京橋區南傳馬町千代田
- 館内田口商業銀行氣附

專門部政治經濟科

- 出雲井忠則(三八)岡山縣勝田郡古吉野村
- 伊藤 勳(四〇)千葉縣茂原町二二三
- 新田 芳文(四〇)小石川區大原町一九新
- 田方
- 西村誠三郎(四一)府下平塚村戸越一三三
- 二
- 田邊 真平(四三)府下高田町大原一六三
- 一
- 中野 實範(四四)牛込區藥王寺町二〇
- 矢澤 信義(四四)四谷區永住町大安生命
- 保險會社內
- 吉田 健二(四五)大阪市東區瓦町四内外
- 土木工所
- 小佐野 胤(四五)神奈川縣保土ヶ谷町保
- 土ヶ谷二六一〇
- 熱田 助(四五)四谷區永住町大安生命
- 保險內
- 廣田繁太郎(四五)松尾鐵工所東京支店へ
- 入る
- 森本 磯(四五)神戸市葦合町一九五三
- 八木角次郎(三)神奈川縣川崎町堀ノ内二
- 〇〇
- 山崎 金藏(三)大成火災保險會社へ入る
- 林 武義(五)鳥取市瓦町新地遊廓稻荷

- 山方
- 桃井 傳吉(五)關領瓜哇島スラバヤ市サ
- イマンカリ十一號
- 井上丑五郎(六)奉天藤浪町一五ノ四ノ一
- 大藏豐次郎(六)京都府深草町稻荷境内町
- 伊達甚太郎(六)府下東中野小瀧一五二〇
- 山田 英吉(六)赤坂區青山南町二ノ三六
- 蘆澤 夏雄(六)府下西巢鴨町宮仲二四三

普ねく校友先輩諸君へ御願

明年三月本大學各學部及專門部各科を卒業せらるゝ者總數二千人以上の多數であります。御承知の通り連年引續いての財界不振に加へて前古未曾有なる關東地方の大震災と諸官廳の行政整理等相俟ち卒業後の就職難は是また空前の事であり、ますます大學當局者にも最も深く此事を憂慮致され、今回私へ其等の就職紹介を囑託せられ、私も東奔西走して微力を盡して居りますが、何分前述の時局で任務の幾分をも完ふし兼ねることを心配して居ります。就きましては先輩各位にも母校の爲且つは後進校友の爲各一臂の力を御添へ下されて直接に各位の御配下なり又は御知己の各方面へ一人にても多く新卒業生の就職を御援助下され度切に懇願仕ります。

大正十二年十二月十日

早稲田大學人事課囑託

坪谷善四郎

- 井出 雲平(八)大阪府鶴橋町天王寺村五
- 七九木内方
- 石坂 宗直(八)深川區古石場町二二番一
- 號館三七
- 川合彦太郎(八)明治火災保險勤務。荏原
- 郡矢口村蓮沼一四二
- 垣内 武應(八)加島銀行廣島支店勤務。

- 廣島市大手町七ノ八八ノ二
- 野間 賢(八)歐米視察中、京都市上京
- 區丸太町通り川端東入東丸太町十四ノ
- 七一一野間由喜方氣附
- 多田 守純(八)府下瀧野川町田端三〇七
- 七五三野仁一益(八)府下戸塚町諏訪五五
- 七菅原方

- 五
- 本間 勇吉(七)千葉縣稻毛海岸九〇二
- 山崎祐四郎(七)長崎縣北松浦郡小値賀笛
- 吹村
- 大橋弘之助(七)本郷區駒込坂下町二〇五
- 中川方
- 宮城 全通(七)東京市電氣局を辭す。那
- 霸市西本町一ノ三八

- 長谷川其雄(九)大連市薩摩町チ區三號
- 簡牛 凡夫(九)Bohler Japanischen Post-
- schalt Konigsplatz Berlin Deutschland
- 中 金次郎(九)牛込區矢來町三山里ノ
- 十二號竹内方
- 中津川定次郎(九)神奈川縣縣社會課勤務
- 橫濱市久保町一四一四
- 上田 亮(九)府下西大久保一三四上田
- 知精方
- 藤木 義幸(九)小石川區表町三八
- 阿部 清美(九)若松市濱六番町四丁目
- 木村 盛(九)芝區榮町十一東京親隣館
- 方
- 三浦千代治(九)府下岩淵町一四九二
- 溝神 重憲(九)四谷區鹽町三ノ四五
- 望月惣三郎(九)大阪海上火災保險會社勤
- 務。大阪市西區鶴町二ノ二五
- 森 前(九)府下大久保百人町三一四
- 關川 熊藏(九)佐賀縣藤澤郡鹿島町
- 原口 庸(九)小倉市外曾根村
- 恒川 惣市(九)博文館囑託。府下池上村
- 堤方九二〇谷方
- 永田 鍊治(九)府下西巢鴨町池袋丸山一
- 五三二
- 久保圭之助(九)牛込區辨天町二小川市五
- 郎方
- 山本精三郎(九)名古屋市明治銀行本店勤
- 務。同市西區上長者町四ノ二
- 藤澤 義夫(九)九段近衛歩兵第二聯隊第
- 三中隊
- 小泉 貞造(九)臺北市西門町三ノ四
- 佐野 喜一(九)府下蒲田町北蒲田三七八
- 宮田方
- 幾田 福保(九)靜岡縣引佐郡奥山村枋窪
- 六三
- 伊田 秀(九)丸ビル五階八千代生命保

- 險會社勤務、芝區輪町六五
- 早川 徳利(九)牛込區市ヶ谷船河原町一
- 九
- 林 玄(九)麻布區市兵衛町長田方
- 陳 雄(九)浙江省平陽縣南港鎮藻溪
- 街
- 小野 真男(九)千葉縣野田町幸町荒井方
- 小倉 四朗(九)舊姓茂呂を上記の通り改
- 姓。栃木縣佐野町二四一九
- 大泉 信(九)府下上目黒一九三九澁谷
- 方
- 大久保治(九)濱松縣隊步兵第六十七聯
- 隊一年志願兵(秋田縣大曲町黒瀬六二)
- 落合 祐彦(九)歩兵第六十三聯隊入營。
- (朝鮮會靈陸軍官舎二九ノ一四)
- 垣崎 茂一(九)大連新聞記者。大連市越
- 後町ヶ區二六號加藤方
- 上條 俊介(九)彫刻家曠原社研究所、府
- 下瀧野川町中里三三七三中里
- 土田 賢(九)光成高等普通學校教師。
- 朝鮮平壤府南山町
- 樂 市松(九)神戸市石井大同町五ノ三
- 二
- 野口 大吉(九)米國コロンビア大學在學
- 中(牛込區砂土原町三ノ二三)
- 松本 康雄(九)大阪市東區北濱野村ビル
- アング八千代生命保險會社勤務
- 小吉喜久雄(九)大連市山手町一七ノ二ノ
- 五
- 惠良 文策(九)大正生命保險會社。麴町
- 區有樂町二ノ七
- 鄭 顯模(九)京城府臥龍洞三九ノ一
- 佐藤 義俊(九)府下中野町三六七一金山
- 方
- 三澤 俊雄(九)府下下戸塚町三三一久須

美治助方

水野 秀雄(1) 群馬縣北甘樂郡富岡町原
富岡製茶所
白水辨太郎(1) 牛込區赤城下町一四高橋
方
須藤 村助(1) 愛媛縣松山市西堀端町
菅野菊三郎(1) 芝區芝公園六號地勢實協
調會館四階國際聯盟協會
末松義之助(1) 四谷區神宮ハラツク五號
舎一室
鈴木 巖(1) 臺北市北門町七鐵道部官
舎

英語政治科

威毛 基雄(三四) 兵庫縣有馬町鐵砲山
金 慶吉(三五) 橫濱市神奈川町浦島町
五八一
佐々木庄次郎(三六) シエネラルブローカ
1、府下澁野川町西ヶ原三〇〇

大學部政治經濟科

入江 源吉(三九) 盛岡市川原小路
遠山 景久(三九) 市立第六實業學校囑託
牛込區西五軒町三六
神尾 茂(三九) 大阪朝日記者、兵庫縣
武庫郡木山村小路
龜瀧盛太郎(四〇) 和歌山縣伊都郡河根村
野々村敬六(四三) 府下杉並村高圓寺驛北
二丁九六八

林 藤三郎(四四) 吹田操車場助役、大阪
府三島郡千里村片山鐵道省官舎第八號
二戸
尾留川新一郎(2) 植田銀行前郷支店勤務
大川 貞作(2) 川越市志多町六八五
町田 熊雄(2) 小石川區久堅町七八
森本 一雄(4) 大阪市西區江戶堀南通一

ノ五〇實業同志會理事

野間 正俊(5) 愛媛縣温泉郡素鷺村中村
水上鐵治郎(5) 淺草區西三筋町五六
古川不二雄(6) 長野町上諏訪町三〇一八
西田五一郎(7) 京都市木屋町三條下ル
加藤 弘(7) 神奈川縣鶴見町鶴見五五
五
小林謙二郎(7) 府下巢鴨町宮下一七〇二
大坪 森吉(8) 府下青山南町六ノ一〇八
田原方
加藤 周(8) 舊姓井上を上記に改姓。
315 E. Main St. Medford Ore. U.S.A.
請川 榮吉(8) 香川縣三豐郡觀音寺町柳
町大四方
久保田明光(8) 府下目黒九〇八
古 俊一(8) 府下青山原宿三一〇古屋
五郎方
坂田 知輔(8) 牛込區市ヶ谷谷町七
櫻木 俊晃(8) 牛込區築土八幡町十五岡
理月方
寶 覺 蒼(9) 支那貴州省貴陽縣南書院
越 逢 彌(9) 府下雜司ヶ谷五六二糖澤
方

百瀬 唯一(9) 櫻組を辭す府下杉並村高
圓寺五二七大澤方
長谷川 鑑(10) 小石川區小日向水道町九
〇府川方
那須野義勝(10) 片倉生命大阪支社勤務。
同府下天王寺村天王寺一七四六
倉澤 朝信(10) 栃木縣足尾町下間藤
橋本 精知(10) 鹽釜驛貨物課勤務。宮城
縣鹽釜町高町宮川方
神永 正雄(11) 日本郵船會社筑後丸
大橋 善次(11) 府下千駄ヶ谷四九一川井
一方

◎新名簿印刷成る

本年度會員名簿は今月三日迄に發送
を了へました。萬一發送洩がありま
した節は御申越次第お送り致します
から本年度維持費御醸出の御方で未
だに名簿御受取なき御方はその旨至
急御一報下さい。尙今日迄本年度維
持費御拂込なき御方は此際至急御拂
込を願ひます。名簿を御送り致しま
す。

大正十二年十二月十日

早稻田大學校友會

各位

追而アドレスベエバ印刷所燒失の爲め學報
發送上多大の支障を蒙つて居ります。従つて
學報の發送洩もあらうかと存じますが御
知合の中に學報不受の御方がありましたら何
卒御知らせを願ひます。

橋高 武憲(11) 府下澁野川町中里六二北
條萬吉方
竹内孫次郎(11) 第三師團第六聯隊一年志
願兵
土居隆四郎(11) 神奈縣鶴見町生麥町警住
宅一五
中村 信市(11) 牛込區山吹町三一服部文
四郎方
中田 原彦(11) 府下澁谷町青山南町七ノ
二ノ四山本方
内田秀三郎(11) 愛知縣内海町
山口彦四郎(11) 鐵道省大臣官房文書課勤
務、赤坂區福吉町一丙一〇號
山田 謙吉(11) 府下豊多摩郡野方村下沼
袋一一八七
江畑 脩誠(11) 秋田市檜山本新町上丁
澤井 省三(11) 千葉市九十八銀行勤務。
同市新町二五八八八川瀬直方
清水 信一(11) 京橋區築地小學校内收容
所五八號
守田 氏徳(11) 小樽市色内町六ノ三六六
倉繼業會社小樽出張所

邦語法律科

山田 末吉(二四) 赤坂區青山南町七ノ二
ノ六本間方
井上 武雄(二五) 府下大井町鮫洲泊船寺
内

專門部法律科

辻本作太郎(三八) 京橋區銀座館屋町五辻
本法律事務所
馬場定四郎(三九) 四谷區新堀江町一
山本 憲太(三九) 小石川區指ヶ谷町一四
五松井信藏方
金安 孝吉(6) 東京瓦斯電氣工業會社内

米村嘉一郎(7) 府下尾久町舟方二五八
國見 健一(7) 丸ノ内岩崎家庭事務所勤
務、牛込區馬場下町二葉館
上條 若丸(6) 千葉縣東葛飾郡中山村鬼
越坪井方裏長坂方
島崎 薰(10) 本郷區元町二ノ二安部
法律事務所
大喜多段之輔(11) 香川縣高松市旅籠町三
四

行政科

平野 與次(二三) 府下高田町雜司ヶ谷水
原六三二
上原 鹿造(二肉) 牛込區中町二四
淺野 兼助(二八) 大阪市東區味原町六一
ノ一三
内田竹三郎(三一) 京城府旭町一ノ二〇
大谷 信夫(三四) 橫濱市根岸海岸瀧ノ下
村上直治郎(三四) 小石川區丸山町一一
姫野 幸作(三四) 大分縣速見郡御越町龜
川
吉田與一郎(三六) 麻布區斧町一五五
矢部 精一(三六) 牛込區北山伏町二
新保勘解人(三六) 大審院判事

大法

上倉三之助(三八) 帝都復興院事務官、牛
込區若松町一〇二
高木 常七(五) 辯護士、本郷駒込林町二
三八
檜塚 三治(7) 長崎市片瀨町五七四檜塚
久治方
飯星 忠雄(8) 臺灣銀行橫濱支店勤務、
牛込區原町三ノ六一吉富方
安念 育英(8) 小石川區久野町一〇
辻 正二郎(9) 石川縣石川郡河内村

文科

持田 嘉策(9) 神奈川縣鎌倉郡中和田村
上飯田三六四〇
花田 一丸(11) 鹿兒島市清水町一八〇
堀部鉦太郎(11) 職業欄全部削除
松村美佐男(11) 府下西巢鴨町池袋登ヶ窪
七六二千島方
福味 文郷(二七) 自働車營業、小石川區
音羽町九ノ二二
蘆田 伊人(三七史英) 府下上落合六三〇
藤川 要(三八史英) 名古屋市中區芳野町
一ノ二一
島山 鴻業(三九) 廣島縣日影館中學教師
高尾 忠堅(三九) 牛込區南町二七
瀧澤 永二(四〇) 麴町區富士見町四ノ一
一
黒木 勘藏(四二) 北豐島郡中新井村字中
八一九
藤本房次郎(四二大哲) 大阪府南河内郡野
田村野野
吉田次郎(四四大英) 府下西巢鴨町三ノ
七石井方
早川 了祐(二大哲) 支那天津日本租界地
東本願寺別院內
石川宰三郎(二大英) 小石川區大塚坂下町
一二九
原 田 實(二大英) 教育時論主筆、牛込
區南山伏町一四宮田方
西川善太郎(三大英) 府下入新井町不入
斗九一八
西室 藤朝(三大英) 著述業、府下田端六
七推名方
小見山壽海(四大英) 岡山市外横井村
渡邊秀太郎(五大英) 神戸市海岸通り商船
ビルディング内パラマウント會社翻譯

係
谷 敏六(五大史) 縣立下關中學校諭、
下關市後田字京町二ノ二七
宗川 保(六大英) 日本橋區駿河町三越
吳服店本部廣告係
本山 忠治(六大英) 府下代々木宮ヶ谷一
四六六
西原 幸平(七大史) 舊姓水野を上記に改
正
竹内 秀雄(七大英) 神奈川縣立商工實習
學校教諭、濱市時田町東谷八九九
石島 水應(八大社) 愛媛縣西條中學校
平野規知雄(九大哲) 舊姓松村を上記の如
く改姓、天理教本部詰、奈良縣丹波市
町三島二二三
井上 博照(11大社) 神奈川縣平塚町新宿
北町五〇二
小田切 照(11佛支) 府下西大久保三九二
一
吉松 駿二(11佛文) 下谷區上根岸一二八
十河 佑賀(11大史) 府下中野町字園三一
一三
前田梅太郎(11大哲) 神奈川縣葉山町日影
茶屋
飯尾 重美 鐵道省監督局業務課、小石
川區大塚坂下町一〇六
稻垣 茂雄 遼陽塔大街森浩二方
大垣喜代松 府下西巢鴨町宮仲二二四九
老沼方
岡田 則美 府下大井町立會五七三渡邊
方
神戶 信 日進銀行在勤 府下下戸塚
四一三早川方
高橋 清 府下西大久保四八七

専門部商科

高木得四郎 水戸市上市黒羽根町三一二
竹内 昌策 旭川歩兵第二六聯隊一年志
願兵、北海道膽振國山越内村
瀧山 一三 下谷區谷中眞島町一ノ四木
村方
根岸 雄助 舊姓江利川を上記の通改姓
上信電氣鐵道會社社員、高崎市宮元町八
八
中西 橋三 名古屋市中區矢場町一ノ切
二二
永松 滿 神戸市榮町二丁目藤本ビル
テング
村上 就一 神奈川縣小田原町新玉舊一
ノ五七一
能倉 律 栃木縣下都賀郡野木村野木
八嶽善太郎 徵兵保險株式會社へ入る。
牛込區早稲田鶴巻町一一二有美館
山本 亮 静岡縣榛原郡相良町
小林 朝郎 府下巢鴨町一七〇五鈴木方
明渡 瑜吉 大阪市西區江戶堀香取館
里見 秀夫 府下雜司ヶ谷七一七
鹽瀨 眞 豐橋市第十八聯隊へ入營
芹澤 次郎 府下荏原郡平塚村中延三七
鈴木方

商科

山本 眞護(四〇) 山梨縣山梨郡甲運村山
本賢五郎方
金澤 邦造(四二) 三越吳服店員、牛込區
市ヶ谷田町
村井 五郎(四二) 北多摩郡調布田小島分
四七〇
雨森清三郎(四三) 大連市大黒町八四
青木 繁(四二) 大阪市南區堂ヶ芝町五
六四
黒川 信(四二) 大阪市西區北堀江二番

町三七影山正己方
松下 操(四三) 小石川大塚坂下町九〇
小崎 文治(四三) 大阪市東區京橋三丁目
七五大林組內
安達 市正(四三) 小石川區雜司ヶ谷町一
四四
島田 豐松(四三) 橫濱市神奈川一本松二
九六
伊東 英保(四四) 神戸市熊内橋通り一ノ
六後藤書店內
金子 美隆(四四) 芝區白金猿町三三
大山 嘉藏(四四) 赤坂區仲町七
前田 利一(四四) 明石市樽屋町富美屋寫
眞材料店
秋山 一三(四四) 名古屋市中區御器所町
島退二三村瀨方
渡邊 嘉一(四五) 大東洋行勤務、兵庫縣
武庫郡本庄村深江松苗六三四
三輪善太郎(四五) 本郷森川町一武和三郎
方
森岡 禎作(二) 安田銀行大阪支店勤務、
大阪西區田中町八四垣秀夫方
尾關 光藏(三) 山形市八日町
工藤勝太郎(三) 函館市元町六一
倉敷 定(三) 芝區白銀今里町七七
松岡 弘之(三) 松山市杉谷町十三
小山 藩(四) 兵庫縣武庫郡芦屋
板野 利三(五) 神戸市下山手通七丁目
大橋 昇(五) 大阪市西區築港三條通三
ノ三七清水方
大西 常弘(五) 大阪市東區德井町一ノ一
二
大谷 純三(五) 府下蒲田御園五
植田 平一(五) 兵庫縣武庫郡西灘村味泥
二二二

福田 由治(5) 上海虹口揚子路日本郵船
上海支店

池原 順平(6) 神奈川縣川崎町日本蓄音
機商會工場

花岡平三郎(6) 橫濱市久保町一三八九
原田 雄次(6) 府下大久保百人町二八五
速水信四郎(6) 大阪市西區八幡屋町四四
ノ一西原方

大谷武次郎(6) 神奈川縣平塚海岸平井別
莊

橋 繁三(6) 府下瀧野川町上中里一六
三

高池 豐三(6) 舊姓高橋を上記の如く改
姓、大阪市東區博勢町三高橋商會内

中川 雄二(6) 小石川區指ヶ谷町五〇
中村 宇一(6) 府下池袋一〇〇六

久布白正己(6) 長崎縣南高來郡小濱村
鬼頭 誠(6) 支那青島大平路二四號
篠原豐三郎(6) 大連市外沙河河口十區七ノ
六ノ一

井原 和一(6) 府下田端三三七
沖中 恒幸(7) 大阪關西大學教授

加藤 孟(7) 廣島縣府中町土生古市一
六〇二

橫尾 旭(7) 府下瀧野川町田端四九六
川井方

藤沼 春吉(7) 府下下瀧谷一七一
三浦 憲三(7) 府下東鴨町宮下一五七五

太田 矩雄(8) 府下池袋丸山一六三〇
中村遊龜夫(8) 芝區三田四國町七甲辰館
方

屋敷 彌一(8) 八千代生命勤務、大阪市
外東天下茶屋三九八

山中 英男(8) 府下淀橋町角宮八七九井
上肇方

寺崎 政七(8) 大阪市外玉出町中通六二
〇

淺野虎三郎(8) 濱松市濱松銀行内
宮崎 震作(8) 府下高田町三六二六
長谷川武範(9) 舊姓高木を上記の如く改
姓、府下上練馬村上練馬二〇四六

藤井 實(9) 嘉穂中學校教諭、福岡縣
幸袋町本町

山口金太郎(9) 福島縣若松市馬場一三三
町六

谷本沖太郎(9) 大阪府東成郡田邊町南田
邊一二七九

岡田 秀士(9) 宮崎縣延岡北小路中島方
小保方敬七郎(9) 高崎市本町一ノ一三六
舊姓小島を上記の如く改姓

蘆原 茂雄(9) 兵庫縣武庫縣岩屋十二ノ
十一

樹下 芳(9) 大阪市西區四貫島東洋紡
績會社工場

水野昌一郎(9) 府下蒲田町女塚一三八高
見澤森四郎方

本吉 信雄(9) 府下上落合六〇八
守分 巖(9) 麻布區本村町一六

杉田 道也(9) 名古屋鐵道局經理課
猪狩 博介(10) 大阪市高麗橋二丁目三越
吳服店

石田 芳春(10) 秋田縣山本郡響村金子瀧
場

原田幸一郎(10) 橫濱市西戶部字山王山六
六三矢田衛方

富田 堅三(10) 府下不難司谷七〇七後藤方
小笠原軍兵衛(10) 岩手縣江刺郡岩谷堂町
第九十銀行内

金子 鐵芳(10) 牛込區赤城下町六二菱谷
喜久二郎方

高橋 真治(10) 橫濱市西戶部町境之谷一
六九吉崎方

角田 治雄(10) 四谷區坂町一六二牧方
向坊勇三郎(10) 安田銀行四ノ谷支店勤務
府下角宮一石高正職方

上田 一郎(10) 住友銀行勤務、大阪市外
豐崎町南濱一八〇辻豐

藤田 三郎(10) 大阪市南區長堀橋筋一ノ
三高島屋吳服店僱友クラブ内

小暮丞之助(10) 日本橋區濱町三ノ一
島田 清(11) 住友銀行橫濱支店勤務
新庄 浩(10) 京城府明治町二ノ三〇

鈴木 清(10) 大阪市西區築港三條通四
ノ五三朝鮮郵船會社出張員事務所

飯島三之助(11) 府下代々木富ヶ谷一四二
五

林 麟四(11) 本郷區東片町九四共同出
張社内

小倉 一男(11) 麻布區本村町四
梶原 義博(11) 名古屋市南區熱田驛前駒
ヶ根屋方

片岡 正一(11) 牛込區辨天町四双葉館内
河本宗一郎(11) 小石川區若荷町六二

策松 武義(11) 平安北道廳理財課勤務。
平北義州郡南門洞二八二岩永在八方

高橋 藤麿(11) 小石川區戸崎町四六博文
館營業所

高浪 勝治(11) 大同電力會社庶務課勤務
明石 禮治(11) 秋田市秋田銀行勤務

串部 義雄(11) 松山市玉川町九七
山田 榮司(11) 府下高田町雜司ヶ谷五九
七

山岸萬十郎(11) 運送組合中央會勤務、牛
込區原町三ノ四西松方

安田 順時(11) 名古屋市中區鶴舞町六四

長田屋方
松下 敬(11) 名古屋市愛知銀行勤務。
愛知縣西春日井郡西春日井村

天野直次郎(11) 福岡市新大工町四三ノ二
淺川 和男(11) 神戸市八丁目五ノ一〇二

網野 青三(11) 府下瀧野川上中里一一八
富田方

齋藤 東平(11) 大成火災海上保險會社東
京支店員

木村保次郎(11) 深川區安宅町九渡邊方
水野 文治(11) 岡山縣倉敷町前神町眞鍋
方

庄司 武志(11) 府下尾久町下尾久赤土六
五八

平山 章(11) 岡崎市明大寺町馬場東八
十一

關東 貫一(11) 府下日暮里二八金杉二五
六漆原方

鈴木南海之介(11) 宇都宮市第五十九聯隊
須藤 真一(11) 實業之日本社營業部に入

鈴木哲四郎(11) 秋田市龜ノ丁東土手町二
九栗原源藏方

九栗原源藏方
小山 三郎(四五電) 麴町有樂町三ノ三東
京電燈會社研究所

北村 淑人(2建) 府下千駄谷町八五八
畑中與七郎(3電) 宇治川電氣株式會社電
力課志津川發電所勤務、京都府宇治町

妙樂二二五
粟屋 忠夫(3電) 芝區白金三光町一一七
早電舍經營

米山 清三(3電) 府下大井町坂下二七八
九

佐藤新三郎(4機) 日本紡織工業會社東京

出張所長不二商店支配人
湯淺 新策(4機) 月島機械株式會社勤務
本郷駒込片町一五

三村 宗一(4電) 府下下瀧谷向山一四一
八

石井 定(5機) 府下雜司ヶ谷龜原二三
中村 功(5機) 芝車町府營住宅北川方

太田 周平(6電) c/o Imperial Japanese
Navy Broadway Court Westminster
London

北原 四郎(6電) 長野縣伊那町本町三丁
目

大瀨 其一(5建) 府下高田町鶴山一四八
一根元方

山口 元實(5電) 山口工業社、松山市一
番町四

杉浦 啓二(6電) 杉浦電機商會、府下大
久保百人町一三四

佐藤癸巳太郎(7機) 芝區白金三光町二〇
八

鈴木 四郎(7機) 神戸市山下町三ノ七ノ
四九

田賀 綏良(7電) 東海電極製造會社大三
位工場勤務、府下上大崎町五二五

花野敬之丞(8機) 新潟縣新發田西ヶ輪
竹内 嘉助(8機) 原商會社員、大阪市
西區江戶堀北通一ノ二一

伊東 小一(8電) 橫須賀市海軍工廠造兵
部

飯田 專造(8電) 東京通信會建設局第三
課勤務、赤坂區青山南町六ノ五六常盤館

河野 俊雄(8探) 吳市和庄通三ノ一五六
ノ二

石瀨 二郎(9機) 千葉縣市川町市川四一
六

小倉順四郎(9機)青森市浦町橋本一七三
 中村 喜忠(9機)兼廣海軍工廠機械研究
 部附、廣島縣賀茂郡廣村一〇二五ノ一
 吉岡方
 吉田 耕(9電)鐵道省電氣局、府下池
 袋一四六三
 田野元三郎(9電)東京鐵道局蒲田電車々
 庫勤務
 島田 堅三(9電)府下淀橋町柏木三五三
 大幸方
 伴野 敬(9探治)イリノイス大學在學
 中 509 California St. Urbana Ill. U.S.A.
 上野伊三郎(6建) Berlin-St.honeberg Lu-
 tyoldstar 13, 11, E age links
 堀米 建一(11機)千葉市鐵道第一聯隊入
 營、麻布區霞町八
 飯沼 知茂(11機)理化學研究所勤務、府
 下西巢鴨町一八三〇福武療院內
 新納 愛吉(11機)東京鐵道局勤務、府下
 蒲田町女塚三九六永山方
 菊込 豐(11機)住友伸銅所勤務、大阪
 府西成郡東四條三丁目七三〇中村ツネ
 方
 村田幸次郎(11機)仙臺鐵道局運轉課客貨
 車掛
 田川 武三(11機)小石川區雜司ヶ谷一
 二
 安藤一太郎(11機)名古屋鐵道局長野工場
 技術課、長野市東之門町四山崎方
 平田 重徳(11機)鹿兒島市加治屋町一六
 八
 木全 太藏(11機)麴町區麴町三ノ五
 末光 弘兵(11機)廣島縣豊田郡中野村菅
 原方
 岡 修三(11電)靜岡市臺所町三八

筒井 三郎(11電)北陸送電株式會社勤務
 富山市鹿島町四村井信雄方
 内古閣重太郎(11電)麻布區霞町一岡野方
 梅田雅三郎(11電)神戸市上澤通三ノ一五
 三那波方
 遠藤 宗一(11電)群馬縣草津驛鐵道通信
 區詰
 壽崎 榮一(11電)府下西巢鴨三九〇
 小原有海生(11探)府下代々幡町代々木西
 原九六七ノ四渥美方
 高草 木喬(11探)日本鋼管會社員、府下
 大井町森ノ下三九七六村岡方
 高等師範部
 小松 鏡吉(三八地歴)八王子市府立第二
 高等女學校
 石丸 梧平(四一地歴)千葉市向寒川二四
 八
 渡邊 藤吉(四一國漢)本大學講師となる
 府下高田鶴山一四九一
 大瀧 讓次(四一地歴)牛込區北町一八
 川島 一男(6國漢)千葉市女子師範附屬
 小學校門前
 小松 忠男(6國漢)高知市北新町三丁目
 六九
 佐藤 鐵哉(6國漢)牛込區馬場下町三九
 柏木 永一(7國漢)和歌山縣日高郡川中
 村
 松浦縫之助(7英語)橫濱市神奈川町
 英語普通科
 前田 儀作(二三)小石川區久堅町七八
 專修英語科
 佐治 勇平(三〇)舊姓星を上記に改姓
 推 薦
 向井 兼徳(四三)神戸市中山手通り七ノ

八五近森方
 大飼修三郎(6)豊多摩郡和田堀内村日本
 濟美學校校舍
 徳光 衣城(11)東京毎日新聞社編輯局長
 木郷 根津宮永二九
 中島 秀雄(11)大阪府東町味原町六九
 堀籠虎之介(四五商)震火災により全焼但
 し家族は凡て無事(牛込區龜巻町二一
 四)
 訂 正
 大正二十九年推薦
 大正十二年十月十八日逝去
 大正十二年十一月二十三日逝去
 大正三十九年專門部政治經濟科得業
 大正十二年十月十四日逝去
 濱島 利重氏
 大正十一年大學部商科得業
 大正十二年十一月十日逝去
 奧村繁太郎氏
 明治四十二年大學部商科得業
 大正十二年九月十四日逝去
 久松 定省氏
 明治四十五年大學部商科得業
 大正十二年十月十九日逝去
 猿渡 榮治氏
 大正十二年專門部政治科得業
 大正十二年九月十一日逝去

計 報

島内 植貴氏
 大正二年大學部商科得業
 大正十二年八月十三日逝去
 坂口準四郎氏
 大正五年大學部理工科建築科得業
 大正十二年十一月十四日逝去
 山本 壽彦氏
 大正八年大學部機械工學科得業
 大正十二年五月十二日逝去
 新居 時寬氏
 大正九年專門部政治經濟科得業
 大正十二年十月二十八日逝去
 石川 市治民
 大正十年專門部法律科得業
 大正十二年十一月四日逝去
 藤渡 時彦氏
 大正十年大學部商科得業
 大正十二年八月二十八日逝去
 吉武 稔氏
 大正十年大學部商科得業
 大正十二年十一月一日逝去
 鹽濱 仁氏
 大正十一年度政治經濟學部得業
 大正十二年十月十七日逝去
 栗山 五一氏
 右諸氏の計報に接し哀悼の情
 に堪えず此に謹みて弔意を表す
 大正十二年十二月十日

早稻田大學校友會

其の後判明したる大震災災遭
 難校友諸氏とその遭難の場所左
 の如し
 男爵片岡恒太郎氏(四二大商)大磯別
 荘に於て
 伊藤良路氏(四四大商)箱根に於て
 矢吹佛悟氏(四五大商)東京電燈橫濱
 支店に於て
 金谷仙一氏(4機)本所被服廠に於て
 山崎昌平氏(7大商)横濱市に於て
 中村高秋氏(9大商)本所區羽田調帶
 製造所に於て
 山村政也氏(10推)日本電氣會社に於
 て
 荒木龜之助氏(8專政)横濱市に於て
 矢崎壽惠雄氏(8機械)日立製作所に
 於て
 西山英二氏(8電氣)日本電氣會社に
 於て
 町田義二郎氏(9大商)東京海上火災
 代理店に於て
 小鹽電氏(11專政)神奈川縣中郡相川
 村に於て
 三島景美氏(11大政)横濱内國通運會
 社に於て
 岩崎義雄氏(11大商)京橋區泰昌銀行
 に於て
 西村豊治氏(11大商)横濱市第二銀行
 に於て
 福井廣治氏(11大商)横濱市山ノ手に
 於て
 古川儀一氏(11大商)本所に於て
 猶生死不明なる諸氏
 山本敏太郎氏(三九大政)

井上三郎氏(3大商)
石川 滋雄氏(8大商)
福島鉦之助氏(11大商)
宇佐美眞造氏(5機械)

學生及運動記事

橋詰 馨氏(10專政)
岡田 隆文氏(9大商)
岡田 猛雄氏(二九邦政)

學生委員會規則 の制定

我が大學學生も年々其の數を増し且つ分科も彌々多きを加ふるに至りしを以て、學校と學生との圓滿なる連絡を圖り且つ學生に自治の精神を養はんが爲、全學部科に互りて委員を公選することとなり。先般來學校當局、各學部長、各教務主任會合して協議の上左記の新規則を制定したり

早稻田大學々生

委員會規則

- 第一條 早稻田大學各學部各學科、高等師範部各、專門部各科ニ學生委員ヲ置ク
- 第二條 學生委員ハ各學級(一學級數組ニ分ル、モノハ各組)壹名トシ一學級又ハ一組ノ學生五十名ヲ越ユルモノハ貳名同百名ヲ越ユルモノハ參名トス
- 第三條 學生委員ノ任期ハ一

學年トシ毎年四月各學級又ハ各組ニ於テ選舉シ總長之ヲ任命ス 但第一學年ニ限リ選舉ヲ省略スルコトアルベシ

第四條 學生委員ニ缺員ヲ生ジタルトキハ前條ノ規定ニ從ヒ之ヲ補充ス

第五條 各學部長、高等師範部長及教務主任ハ其學部及部科ノ學生委員ヲ指導ス

第六條 各學部及部科ノ全體ニ關スル事項ニ付キテハ代表委員三名ヲ互選シテ之ニ當ラシムベシ

第七條 各學部科ノ委員會ハ毎月一回開會シ當該學部長又ハ教務主任議事ヲ整理ス

第八條 學生委員ハ常ニ所定ノ委員章ヲ佩用スベキモノトス

附則本規則施行以前ニ任命セラレタル學生委員ハ其期間中在任スルモノトス

本規則ハ大正十二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

早大救護會の成立

先般の大震災に際し、在京有志學生發起にて直に罹災者の救護、罹災學生に對する衣類、學用品等の給與、罹災者の調査に着手し、應急の施設遺憾なからしめたが、新學期授業開始され、地方學生の上京と共に事業益々擴張され、茲に全般の學生委員會を中心とする多數學生の主張にて新に學生救護會を組織することとなり、十一月十日その成立を見るに至つた。

事務所を大隈會館に置き、平沼理事を會長に推し、役員として左の諸氏を依頼した。

賛助員

- 出井 盛之 片上 伸
 - 永井 一孝 中島半次郎
 - 阿部 賢一 難波理一郎
 - 山本 忠興 杉山 重義
- 猶ほ、同會の成立に就き各方面より深き同情と妙からざる援助を寄せられたが、左の諸團體より同會資金として夫れぞれ頭書の寄附を得た、

早大救護會寄附芳名

- 五百圓 早大溫交會
- 壹千圓 出版部
- 七十二圓 同 校外生
- 四百圓 同 柔道部
- 參千圓 同 野球部
- 壹千圓 日清生命會社

- 參百圓 日清印刷會社
- 百五十圓 中園 恰
- 貳拾圓 巖 松 堂

早大スケート・ホツケー俱樂部の近況

本俱樂部は冬期休暇を利用して東京の學生生活に取つて其色彩の乏しいウインター・スポーツを注ぐべく、昨冬、校友松宮三郎深澤政介上村鐵雄氏の主催によりて創立せられ、第一回の合宿生活を信州下諏訪の氷滑りリンクにて行ふ。集る學生約七八十名、早朝より堅氷のリンクにて氷滑の妙技に耽り、時に諏訪湖上遠く對岸まで遠滑し、湖上の堅氷を破りて處女氷に接吻し、冬の日を寒しとせずして氷に親しみ、宿に歸れば、温き温泉は慈母の如くに疲れたる我等を迎へ、夜の炬燵の圍繞に理想を語り、人生を談じ、頗る意義ある冬期生活であつた。而も本俱樂部は下諏訪町民の後援によつて中川ホテルを獨占し費用は一日約二圓にて充分なれば、此の點に於ても誇るに足ると信す。

本俱樂部は冬期に於てはスケートをなし其の他のシーズンに於てはフールド、ホツケーを練習し、今夏七月上旬より信州富士見高原に夏期合宿生活を爲し、冬に於てスケート界の權威者を以て任じ、春秋は、ホツケー界の新進たらん事を希望し、今回早、慶明、戸山の四校聯盟して大日本ホツケー協會を組織し、十一月十八日戸山學校校庭に於て發會式を舉行し、近來稀に見る盛大を極め、我部よりも多數の競技者を出場せしめたり。

氷滑及びホツケーなる競技に付き最近本俱樂部より宣傳的パンフレットを刊行して學園の諸士にこれを頒布する豫定にて、本年末に於ける諏訪湖行の計劃は本俱樂部より最近學校内に發表しつつあり。終りに臨み本俱樂部の趣旨に共鳴せられて意義ある冬の學生生活を學園の諸士のうちに、盛ならしめられん事を希ふ。(委員報告)

雜

錄

島田三郎氏の長逝

衆議院議員島田三郎氏は一生を舉げて政治に、新聞に或は教育宗教等の國民啓發指導の任に當り、しかも清廉を以て一貫し其の勳蹟また見るべきものあるは、世人の齊しく認むる所であるが、先生が多年の躍進的奮闘が痛くその健康に影響したるものか、今春來病の侵す所となり盡さ

れた保蔵の效もなく、十一月十四日
遂に白玉樓中の人となられ、十七日
午前十時青山齋場に於て葬儀を度修
せられ、柏谷業議院議長親しく弔辭を
朗讀し、多數官民有力者の參會あり、
本大學よりも高田總長其の他參列し
て哀惜の至情を致したのである。人
材に乏しき現代に於て氏の如き純潔
の士を喪つたことは、洵に國家の損
失である。

先生が我が早稲田大學のために陰
に陽に力を注がれたことは一にして
足らぬのであつて、明治十五年元東
京専門學校の創立と同時に、評議員
の制が置かれ、故小野梓氏をはじめ
前島密、北島治房、矢野恒太、藤田茂
吉その他の人が故大隈總長の指名に
因りこの任に當られたのであるが、島
田先生もその一人であつて、創立當
時より渺なからぬ力を添へられ、そ
の後評議員にも代謝あつてその職は
離れられたけれども、恒に直接間接
學園のために盡瘁されたものである
殊に近年故大隈侯爵は、島田君は政
治界にばかり立たず人ではない。一
面教育界に立つべき人である、殊に
第一議會以來絶えず衆議院に議席を
有して奮闘し、加ふるに民衆の指導
者として獻身の努力をされた點から
日本の憲政史を講ずるには、第一任
者であるといはれ、時の鹽澤學長に
も屢故總長よりこれを繰返されたの
で、特に御願して名譽講師といふ意

味で、『明治政史』を講述せらるゝ、こ
ととなり深き興味を以て熱心に調査
し病弱の身をも推して講義を繼續さ
れてゐたのであるが、其の講の半ば
にして隔世の人となられたのは、惜
みても尙ほ餘りある次第である。
令嗣島田孝一氏は先生が存生中我
學園に入り、優等の成績を以て業を
卒へられたので、この人をして早稻
田大學に盡させたいとて、先生自ら
費を投じて留學させられ、現に教授
として本大學のために貢獻して居ら
れるのであるから、この人によりて
先生の遺志が繼がれるのは何よりの
事である。

岡田講師氏の訃

本大學講師岡田正美氏は腸チブス
に冒され療養を奏せず十月三十日
遂に逝去されたり、由て十一月四日
午後一時より三時迄自宅に於て葬儀
を度修し、本大學其他の關係者多數
會葬して告別の至情を致す。氏は明
治三十年帝大を出で其の翌年より本
大學に入りて國文學を擔當し、爾來
廿有餘年一日の如く熱誠以て學生を
指導され傍ら研究は益々深遠を極め
て將に先人未發の國文典を大成され
んとするに際し忽焉として逝かる。
當に本大學の損失のみならず、此
に記して深く悼惜の意を表す。

校友中等教員招待會

文部省主催の中等教員講習會に出

席の爲中等教育に従事さる、校友多
數上京されしを機として校友中等教
員招待會を七月二十六日正午大隈會
館大書院に開催せり。
學校側より高田總長、宮井、日高、
岸本、片上、横山、高杉各教授及難波
幹事出席し、席上高田總長より一場
の挨拶あり、之に對して高知商業英
語主任木原順一氏の答詞あり和氣霽
々裡に散會したり。
當日の來賓諸氏の氏名左の如し。

出席者

- | | |
|------------|--------|
| 岡山縣關西中學校 | 來澤 核雄 |
| 大阪北野中學校 | 矢内 博 |
| 熊本縣立鹿本中學校 | 永野 義徹 |
| 鳥取第一中學校 | 今村 貞夫 |
| 岩手縣立農學校 | 菅原甲子太郎 |
| 福島中學校 | 大沼 義嶽 |
| 盛岡中學校 | 久水 英夫 |
| 茨城縣立太田中學校 | 右田 萬作 |
| 熊本縣立天草中學校 | 池崎 知康 |
| 茨城縣立太田中學校 | 井上幸次郎 |
| 長野縣大町中學校 | 久保田正教 |
| 兵庫縣第二神戶中學校 | 鈴木三之助 |
| 福島縣立磐城中學校 | 菅野 貞雄 |
| 茨城縣立商業學校 | 平岡 伴一 |
| 千葉縣大多喜中學校 | 藤本 傳助 |
| 茨城縣水戸中學校 | 加唐卯之助 |
| 新潟縣柏崎中學校 | 小宮堅次郎 |
| 佐賀縣小城中學校 | 福村 龜雄 |
| 朝鮮海州等高通學校 | 長谷川要次郎 |
| 高知市高知商業學校 | 木原 順一 |
| 大阪市西區商業學校 | 上田 鈴一 |
| 新潟縣立村松學校 | 片寄 義久 |

留學生の消息

本大學留學生教授煙山專太郎氏は
日下獨逸の見學を了へ、スカンジナ
ビア半島に渡り瑞諾兩國の文物及び
歴史等を踏査し居られ、猶ほ留學生
淺野登郎氏は米國コロンビア大學に
ありて近く所期の研鑽を終へる筈な
り。

大正九年專門部法律科得業の高井
忠雄氏は本大學留學生として大正九
年末より米國及獨逸に遊學して海法
及國際私法に就き研究を積み、今回
業成つて歸朝の途に就かれ海路恙な
く去る十一月廿七日神戸へ上陸され
たり。内容充實の折から法學部は新
鋭の士を迎へて益々活氣を呈せり。

訂正

前號校報中島根縣校友會選出
新評議員柴田秀造氏とあるは秀
藏氏の誤り
新名簿本欄一九四頁上段佐伯
好郎佐藤自共兩氏との職業及住
所入替る

大正十二年十二月十日印 刷
大正十二年十二月十日發 行

編輯兼發行人 難波理一郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所 日清印刷株式會社
府下豊多摩郡戸塚町字下戸
塚六百四十七番地
早稲田大學
發行所 早稲田大學校友會

大正十二年
本會維持費釀出者芳名報告

金參園也

七月二十八日

藤村 平信 安西計太郎 田中 藏造
高間 次作 野川 義章 安清 正之
木村 俊治 岩城 俊藏 藤井源左衛門
山崎菊太郎 佐々木健太郎 末岡 秀司
伊藤竹次郎 岩村鐵治郎 竹之下英三
上田 九市 松田 鐵造 小幡 信
北山 雄造 瀨良 泰治 鈴木 廣助
稻森 哲之 長谷川 進 西岡伊兵衛
鳥澤 一耶 卜部 守之 古谷野喜三郎
大橋兼次郎 大島 成一 村瀬 吉康

三宅 馨 末澤 潤吾 太田垣藤太
藤田幸太郎 森 美文 瀨下源三郎
中村堅太郎 浦川敏之助 菊竹 淳
森田 省三 伊東 祐保 波津久 清
新津 隆一 飛松 謹一 小澤安太郎
難波理一耶 瓜生 卓爾 淺川 湖郎
島田延次郎 平山 恒 杉浦謹次郎
猪股 正巳 稻垣泰之助 戶塚孝兵衛
太田 保 太田孝太郎 桂 達二
中澤才次郎 矢野 通保 山浦 武夫
安田 善造 增井 尙寬 小山 五美
江口 貞松 澤 亮 阪田國三郎
貴虎孟太郎 平澤兵之助 濱 宗義
森野 榮藏 富村 順一 山路 重水
是枝益太郎 石田 貞三 坂本 信道
園田 貞次 木下 修一 室 七二郎
久保田清太 篠原 秀吉 杉下 有潤
中村 庸 星野 剛男 大下 康孝
小澤 一雄 河津 祐信 高廣政之助
坂井 正壽 陣内 正美 神邊 昂太
田中 亮一 田島 常吉 宮本 虎一
寶性 確成 岡谷喜三郎 永江 清
不破 爲治 佐藤 七郎 木谷 辰巳
巖本 莊民 白南 薰 加藤 喬樹
無津呂敬道 上田 柴明 有近 興隆
三木 喜延 滿田 好秋 水野虎之助
和泉 慶三 堀見 潜鰐 辨官 爲秀
大久保清藏 松尾卯太郎 駒澤 鐵三
清水源一耶 神原 周平 安食 義憲
利重 準藏 近松千代磨 大木 貞一
金成 貞雄 高廣 三郎 中田 謙吾
赤松 勇 相良 賴夫 木下 貞一

石川 文一 小川 巴 和田 量平
那須野義勝 並木虎次郎 倉田 義晴
古財 徳夫 小河滋次郎 刀粥 勘三
小泉 清志 小林 定脩 渡邊 享
千田 精一 杉田金之助 栗山資四郎
大脇鏡三郎 山村勝次郎 井上 武夫
國貞 裕二 堀添 壯吉 小南 惟精
矢野 芳 春谷 清 淺川 得
櫻井 政一 馬場 重藏 服部 正明
船津 常六 小關 吉彌 堤 政一
竹原文六郎 上田 武弘 野間芳太郎
江原 卓爾 伊藤 貞次 伊澤 脊二
久保田 昌 遠藤喜四郎 平岩昭次郎
森保 祐昌 菅 周 治 石 房 吉
馬場定四郎 大浦 常造 高野 精一
鹽田彌徳八 稻田吉次郎 早川茂一耶
西川又二郎 土屋金太郎 松田 正三
手島横三郎 折原 英 田端 稔
牧原 修雄 阿部善治郎 澤田權右衛門
戸倉 誠司 楠元 芳熊 吉村 隆寛
小山晴一耶 安達 賢 佐藤 美太
山崎 保 武内 隆英 熊己 義憲
泰野 武記 高橋美佐雄 本間 直
竹之内文雄 松浦 三平 稻垣増次郎
大場富士男 岸本 丑松 鈴置 太郎
奥田幸次郎 金安 孝吉 山本 敏雄
小林 博 岸井 保 小田 三郎
須藤政太郎 徳永 秀夫 小本 博
大野 眞行 長町 義次 小林雄刀磨
坂本 龜登 瀧澤 孝 山内 一二
密田 育三 中村 孝吉 原 眞 吉

西村 貞甫 川合 有三 鳥井原節夫
一ノ瀬喜男 高江 幸彦 末安 眞治
新崎 盛珍 土屋 充 多田 憲一
村上 正榮 藤木 恭道 都築 等
西川善太郎 津原 淨勝 外池達之助
中西 大玄 加藤 正信 公野 靜枝
須賀 隆賢 笠羽 清吉 蘆田 義宣
河合 祖雄 江見 高直 宮廣 伸數
土橋 觀英 中村 幹知 山崎文之助
田村 源治 吉田 銀治 大平 新藏
太田 眞輔 中路 新吾 江幡新兵衛
田中 收吉 小野寺正太郎 三橋四郎次
安田 隆助 野田 襄 三橋 權藏
澁谷三右衛門 田村 鼎 菊地 眞造
池島 誠三 馬場 達郎 畑田 保次
岡崎 鴻吉 河原林象三 川口 秋助
横山 幹也 名取 夏司 山口 榮吉
兒玉 衛一 新井 章治 佐藤 光尾
水野 卯吉 宮尾 嘉市 白井 與一
鈴木 昇平 河端 廣益 石木岩三郎
加藤 俊雄 村上 英郎 八杉 眞宗
牧山 耕藏 江藤 庸藏 青木 宗重
澤口 育三 重信雄三郎 表野 一二
鈴木治三郎 鈴木 宗七 今里準太郎
原田 穠造 豊 福 武衛 義治
梅崎 廉一 山田 道兄 堀川 美哉
吉見 三郎 内藤 瞻義 益子 逞輔
太田 濟時 木村 俊作 渡邊 俊朗
西本 正雄 竹下浦次郎 三上徳三郎
土田 行丸 矢野出龜之助 山田竹子代
春田 登 植田 耕造 野間 正俊
小西 利雄 金 仁壽 青山 稔
鈴木 眞運 堀江 武治 河井常三郎
吉野 郡次 常政 眞作 鈴木 和藏
速水 久彦 星島季四郎 金 成 麗

松階 吉郎 中川 寛治 久保田明光
原田 龜雄 村上 村次 宿田 久一
森田 卓爾 關 順一耶 石井幸之助
片山 昂 余語 勝忠 田中 際藏
津田 毅一 武藤 五三 若林 成昭
金子 健八 吹譯 健次 井上 輝夫
奥田 新 影近 清毅 田地 隆元
北條 勘一 川井信次郎 熊谷 主膳
赤羽 柳吉 佐竹 龜 佐々木義山
中山 鹿助 鹽見 連 有住 宗憲
小野口朝治 橋 育二 大塚 半平
中西 源藏 白井實樹太 野田 正昇
木村豐次郎 宮谷 公雄 駒込譽之助
雨宮 景治 磯田外茂雄 大橋爲次郎
上野 慶造 遊佐 慶夫 星野徳太郎
春日井太助 野口 清一 松島 次郎
犀川 長作 北田 寛 島川 進
加藤 政敬 岡本 榮一 恒遠 左門
角田 銳彦 長尾秀太郎 内田 二郎
安富祖忠進 荒木 正孝 三崎 團靖
篠崎庄三郎 關口 安一 住谷敬三郎
原田 泉 仁田 正金 長島 忠信
生方 正 鬼怒川珪司 北正 野蠻
小笠原謙藏 島崎 謙 佐伯 仲藏
小池 素康 井上 忻治 西英 作
高須 安一 大原 周作 長松 雪夫
内田 喜雄 小野 忠夫 中村愛三郎
宮澤喜運治 川久 保正 塚越孝次郎
片岡 久宏 小堀 保吉 水野 三治
徳永 國雄 永田 成一 永 瀨 博
小泉 清(十三年度分納)

山路 恒男 中西 橋三 早川 富平
遠山 一尾 黒木 清介 福永 喜八
羅 弘 錫 小野 庄一 吉田 兼吉
大石雄之助 渡邊宗三郎 安島 康家
樺 鎮男 菊地 清治 土谷吉之助
橋詰 馨 韓在 晋 中山 繁
吉田 榮人 高井 誠道 土屋時次郎
淺井熊太郎 石丸秀次郎 田中長太郎
紹慶 密應 日野 正吾 關戸 信次
蒲池 鎮雄 小林萬之介 増野石次郎
滿田 和 稻葉 紹瑛 武藤 安雄
本山 秀夫 細田 民樹 松岡 哲
宮澤 末男 末松 豫彦 村上 末三
高市 久源 鶴田 萬三 小泉 一雄
宮澤 隆胤 今西國三郎 加藤癸巳二
永井順一耶 上村 英雄 林 貞次郎
平田 義雄 合田 九市 北村 俊平
額田 六福 松澤 廣身 寺西 敏
矢部 孝造 山田 賢治 深堀豐太郎
前田雄之助 岡本 俊人 依田 直吉

久保田清太 篠原 秀吉 杉下 有潤
中村 庸 星野 剛男 大下 康孝
小澤 一雄 河津 祐信 高廣政之助
坂井 正壽 陣内 正美 神邊 昂太
田中 亮一 田島 常吉 宮本 虎一
寶性 確成 岡谷喜三郎 永江 清
不破 爲治 佐藤 七郎 木谷 辰巳
巖本 莊民 白南 薰 加藤 喬樹
無津呂敬道 上田 柴明 有近 興隆
三木 喜延 滿田 好秋 水野虎之助
和泉 慶三 堀見 潜鰐 辨官 爲秀
大久保清藏 松尾卯太郎 駒澤 鐵三
清水源一耶 神原 周平 安食 義憲
利重 準藏 近松千代磨 大木 貞一
金成 貞雄 高廣 三郎 中田 謙吾
赤松 勇 相良 賴夫 木下 貞一

丸山宗次郎 古川 二郎 香取 吉萬
櫻井 好雄 山内 卯助 蔡 伯毅

鈴木 眞運 堀江 武治 河井常三郎
吉野 郡次 常政 眞作 鈴木 和藏
速水 久彦 星島季四郎 金 成 麗

山本賢五郎 寺澤 靖 春山 駿助
宮本 諄 時岡辨三郎 大江 善三

岩崎 四郎 山田 邦祐 小堀 淨因
 增田 知吉 中島好太郎 野中中太郎
 松田 知之 千石 光雄 玉造 泰助
 瀧澤 潛小松九郎右衛門 青柳 篤恒
 下澤 金藏 豐田 公平 渡邊 半吾
 鷺津貞二郎 神尾 茂 內田 邦逸
 大場 運次 中山 清男 平尾 源作
 鈴木 敏一 稻田 直道 諸遊 康英
 吉野 敬三 長澤 春雄 牧 湊
 田代名兵衛 長谷川常次郎 辻之上計三
 西村髮太郎 今村常三郎 鶴田清一郎
 佐藤 莞爾 篠田 定規 城所竹次郎
 笠原 亮一 森 利雄 小林政次郎
 佐々 欽吉 谷村 賴尚 押川 清
 丸山 新平 渡邊 喜德 工藤 清藏
 館岡 幹 菊地恒八郎 長濱信太郎
 拓植 昇 平賀 一藏 鈴木才治郎
 白神 宥久 松 陟 岡野 松男
 則武 久義 大屋 忠之

八月六日
 脇本 米司 別當庄右衛門 松島 恭一
 佐川 重敏 椎木 順一 小熊國治郎
 齋藤 惠雄 岡 純 福宜田隆然
 丸地 倫二 熊谷 義助 和田 巖
 山下 清一 伊藤重治郎 渡部善次郎
 小野 駿一 幸尾隆太郎 三明 諒夫
 鷺海 徹 渡邊 五郎 川瀬 四郎
 金子 己吉 米本 多七 龜山 貞一
 駿部武藏郎 出井 盛之 渡邊 有仁
 佐々木馨一 金 真 渡邊 源 模
 松原 常盤 井上 周 齋木政太郎
 後藤 薰 島田 金藏 內藤捨太郎
 熊谷彌之助 野崎辰治郎 佐藤 延吉
 免田 幸藏 岡田慶三郎 山本 愿太
 古橋 林司 山本多三郎 池田善三郎

八月七日
 長安 續雄 白築 祐久 月花 俊隆
 猪熊卯三郎 仁王頭辰二 浮岳 堯勳
 丹下長之助 石原 信順 廣瀬安太郎
 田中 清夫 志茂 成保 清水 平治
 埴原弓次郎 高山 健介 毛利 茂
 立花 真尋 飛鳥井雅信 牧野 健一
 高須兵次郎 井手 七良 甲斐 芳造
 山崎 九市 中山 太郎 齋藤 豐治
 千葉寅之進 泉 小次郎 大西 豐輝
 佐藤德一郎 阪本 治郎 森本隆太郎
 野口 綠 田中 源四 石井 文彌
 小澤 五郎 淺香光太郎 佐藤 時治
 佐藤安兵衛

八月八日
 菅井 長藏 伊藤 基明 眞野 信雄
 成田謙次郎 本多 正 原 重文
 村田 正一 永井 廣夫 照沼 信忠
 中川 庄作 庄司 丈夫 村田 健次
 市原 眞治 何春 喜 上田基太郎
 保江 衷 後藤 連平 東恩納寛文
 川上 貫一 佐々木省三 宮川 順輔
 高田 春男 矢野 通直 岡井 宗一
 柳田 鐵三 安達熊一郎 鈴木 祐彦
 福田三千百 安藤 吉郎 近岡忠次郎
 吉岡 榮藏 保科 市松 高森 一生
 松浦 一男

八月九日
 河添行一郎 菊池 謙讓 權藤四郎介

八月十日
 渡邊 富人 見矢 龍定 高橋 惇
 井上 雅二 恩地 信吉 宇野 武
 矢次 熊雄 早川 茂一 宮武 省三
 木本 隆章 馬島 日男 後藤 弘雄
 奧谷 爲治 芳養 武吉 市橋 茂雄
 橋本 義之

八月十一日
 三木 將雄 木村瑜一郎 原 龜之助
 小柳 覺 筑紫 富雄 野本福太郎
 廣田傳左衛門 與那城清信 大澤 逸策
 大森 啓介 坂本 隆昌 伊藤 祐倫
 戸 枝 貞 立岩 三作 立川銀二郎

八月十四日
 鞍谷 清慎 花岡健之助 瀧山 頁一
 渡邊 實 吉澤 武保 市川 博
 山本勝太郎 河村 國助 佐々木常記
 照林 眞雄 成 瀨 清 鄭 奎 鉉
 砂治 眞逸 有賀啓太郎 東 忠藏
 小柳 精藏 佐藤 金次 原田 次助
 野村 秀雄 小林 利明 山本 嶽治
 今村 寅 矢口 義 田村 直記
 中村萬二郎 楠野太一郎 眞子 博志
 三好 正雄 宮崎宗二郎 奥山新太郎
 笠井 馨 原 正康 青木 正美
 杉野 金市 芳村 忠明 寺内 太重
 門田 輝次 團野 新之 佐藤 渾

相馬 愛藏 伊藤齋太郎 坪内善四郎
 中林邦之助 桑原 末吉 桑原 貫淳
 矢吹 逸次 山本久太郎 深江基太郎
 新井智三郎 相良 常雄 筋瀬 徳松
 大貫勲次郎 奥田 源三 渡邊 寅治
 上原 鹿造 佐野 昇六 新井幸三郎
 大西孝次郎 大橋 誠一 磯山愛一郎
 佐藤 晶 關口 七郎 傍島 周吉
 柏 房五 山田 正 稻葉 眞男
 不二 頁一 森 勝次 宮尾 武男
 岡田 眞治 岡田 公輝 豐 田 實
 喜多壯一郎 庄司恪次郎 井上 順次
 小山 胖 武田道千代 伊達 光美
 石原 一英 山本 信政 深川 七藏
 稻垣 一雄 渡邊 俊一 笠松 石雄
 田沼 武兵 江淵 俊秀 齋藤字七郎
 鈴木彌太郎 伊多波俊吉 橋本 千畝
 岡西 介爾 上村 春馬 佃 頁一
 遠藤 秀雄 阿部 親八 安念 育英
 澤口 嘉男 三宅 朝茂 清水 正喜
 松村 翠 飯塚 鐵作 東儀 俊榮
 五十嵐三郎 伊藤 龜雄 伊藤 末次
 猪瀬 秀孝 石橋 彌 林 大藏
 細井 正太川喜多信太郎 吉野 重澄
 辻 正二郎 角田 清廉 宇尾野 潔
 中澤榮七郎 秋山 幹愛 寺内卯三一
 北村金三郎 外松龜太郎 佐藤 榮八
 伊藤 榮三 伊地知純正 磯部倫一郎
 今橋 稔一 原 彰 大橋 福松
 添田 富藏 灘波重太郎 梅 田 清
 久保 直枝 黒川 清 雲井憲二郎
 矢島明之丞 山口 眞平 山本 眞護
 牧野 善作 好地昇之助 河野安通志

近藤 晉 荒井英八郎 淺羽 三郎
 青木佐四郎 佐々木利助 齋藤春太郎
 齋藤金太郎 柴田 愛藏 日野 正信
 鈴木 素 猪瀬 誠意 一色 利武
 市川 正爾 池内 俊治 家富 重尙
 橋田東次郎 丸茂 忠郎 松岡誠一郎
 松代安太郎 藤井 恕亮 小松 督助
 香田 五郎 青木 郁三 淺川榮次郎
 佐々木寛次 齋藤 泰三 三品 幸造
 三島 眞藏 水 崎 保 清水 八郎
 清水 力 田 島 濟 澁 谷 三
 清水 眞輔 鹽田 敬吉 藤葉 嘉作
 平山富太郎 杉 本 昇 井手 徳一
 井手 亮藏 伊東眞五郎 飯田新太郎
 板谷 眞吉 石井 舜三 原 安三郎
 千早 正寛 大柴龜太郎 岡田 亥三
 加藤 德行 川瀬 傳藏 片岡恒太郎
 勝又 敏彦 高原 政治 高 島 徹
 對馬 謙尙 直井藤太郎 中根 正俗
 村上鐵太郎 山本 仁吉 鈴木 榮一
 五十嵐健吉 伊賀 朝一 生駒 晴吉
 飯島 英二 稻垣 伯勝 今井悅太郎
 池田 常直 石井 忠雄 石川 頼一
 馬場小太郎 服部 盛 原科 茂作
 細田 泰女 地 引 武 沼野 三郎
 沼尻 道利 岡野 孝吉 及川銀太郎
 奥山 一雄 荻 島 遠 太 田 植
 香河 利雄 勝 勉 横澤 正督
 吉富 嘉春 吉川 仙藏 吉田 利貞
 吉井 要人 吉田 光隆 田 中 稔
 高木 季雄 竹村 米吉 瀧川 三郎
 中村 有一 黒田榮太郎 栗原 一平
 楊井 二郎 山田 俊雄 山 本 眞
 藤田 欣哉 藤 倉 隆 小崎 文治
 小島 七郎 岡武 諭一 佐藤 政一

八月十六日

齊藤時之助 櫻山 四郎 鬼頭 政雄
 北村 正俊 三澤 正作 水谷房次郎
 宮信 一 平澤 最勝 師岡 昌德
 引野 春治 元本 政七
 藤田 彦治 桑島 主計 小西 元
 川村 虎雄 田中利喜太 倉田 太一
 山田 義男 江上 平助 水上藤右衛門
 小野勇次郎 岡本 信一 奧村芳太郎
 門井 弘 中村富三郎 永田 卓爾
 駒形 繁 安藤宇一郎 須藤愛太郎
 彦阪 矩雄 上村安太郎 山本 好直
 佐藤 啓 前川宗治郎 金澤種次郎
 佐藤 顯三 田尻 武次 中村恭太郎
 藤村龜次郎 櫻内 隆藏 島 利七
 川上 常郎 原 銀藏 黑澤 昇治
 須高 泰助 前島 亮治 小畑儀三郎
 角取 康榮 鈴木 泰介 伊藤農夫雄
 志賀茂次郎 片山 三郎 金澤 重威
 村上直次郎 石田友三郎 畑彌右衛門
 大内 源藏 久田 保 二宮 清德
 西村 勇 杉井 榮雄 杉田 榮次
 石坂 靜一 原田駒之助 林 葵未夫
 吉田 三平 野澤 俊一 岡分 義一
 山宮 鼎 平井平次郎 野々口實雄
 野口 次郎 舟崎 仁一 木野 正俊
 鈴木 雄治 井芹 繼志 渡邊 憲
 川邊喜三郎 柄澤 雅治 谷野 治越
 永井 勝藏 小管 讓作 早川 徳次
 塚原 喜秀 波野平四郎 監田 修吾
 鴨井 雅治 上田正太郎 清水 水札
 久恒 立雄 羽田重一郎 中田 信久
 天野政太郎 穴戸 伊八 山口市之助
 林 茂 福井 孝也 荒卷巳之助
 高野 幸雄 小池 春原 太田 儀一

竹上 正吉 山本久次郎 藤井 卓
 梅川 田室 重友 芳夫 瀨田 壽一
 吉田 春夫 小島小伊三郎渡邊 龜男
 種市 真實 松尾 章男 越宗 壽男
 飯星 忠雄 鷺見 甚造 伊勢孝太郎
 稻垣藤一郎 安生彦三郎 手塚 法麿
 白石 尙武 柴田 幸 本山 正雄
 小林 幹市川善右衛門 石原 修吉
 蜂須賀武彦 小熊倉次郎 加藤泰次郎
 上村 鐵雄 高橋 鈺吾 高田 逸藏
 武富禮太郎 長崎 進 生方 貞一
 楠田斧三郎 眞船 泰介 福地 福次
 遠藤麟太郎 木村 貫一 湯淺 泉
 溝口 伴六 下津 揆一 平木 狗平
 正田松三郎 瀨戸 好爾 杉田 米吉
 井口 誠一 稻田 元良 畑田 源輔
 林 誠一郎 伴 夏太郎 西崎 俊吉
 小倉 房藏 岡崎 幹雄 奥村繁太郎
 渡邊 研三 垣見 齊助 龜田 鶴夫
 柏木 潤三 田部 信男 田口 恒清
 長澤 倉吉 宇佐見德輔 久野木文三
 日下 貫一 山内 政市 松田 谷之
 松野 徹 柳谷 留吉 小西友次郎
 三井長右衛門 三好 直英 岩田 豊吉
 泉 幸夫 石井保三郎 早川 欽介
 於 勢 升 岡藤 敏雄 奥村 誠司
 橫内 信重 田中藤太郎 竹内徳太郎
 津久居平造 中村登利三 中野傳三郎
 村山 太郎 関 定次郎 久保田良一
 山岡 健三 山内與三郎 松本與七郎
 松本 茂雄 藤井與衛門 小原曾太郎
 小林 久七 海老塚徳三郎 遠藤紫三
 坂本 時雄 水野巳太郎 南 秀二郎
 島田 武夫 澁谷餘四郎 日向 毅

金參園也

八月廿壹日

森本金十郎 杉浦 義恭 住友 圭二
 西代 喜雄 戸田循一郎 友野祐三郎
 大塚 彦治 大崎喜代作 奥田 四郎
 吉岡長四郎 吉村 禎三 田中喜太郎
 田島 一郎 高間 順吾 瀧深誠之助
 筒井 糖逸 堤 庄三 工藤 郷輔
 熊本 石造 山本 平吉 安田喜三郎
 松橋 勝 藤井 英造 小林 正勝
 阿部 惠一 佐治 爲一 櫻井 省三
 皆川 重義 清水 洵平 鹽谷健次郎
 森繁 哉 杉本 光治 中村三男吉
 金六圓也 田村 信一
 飯田 三郎 園田 一藏 金 泳濬
 渡邊繁三郎 妹尾房次郎 村上 秀一
 山下 盛澄 武田 尾吉 村井 知雄
 山口 彦一 安江稻次郎 轟 盛 孝
 萩原 謙一 荻野 巖 岩水庸太郎
 藤原 竜一 谷田俊二郎 村木 好郎
 八木善太郎 中島 榮 藤澤鹿太郎
 奥水 直次 望月彌九郎 智場伊太郎
 織田 義信 高田 健造 中村 永吉
 小林 光雄 江戶 孝茂 相澤 堅
 文野俊一郎 松尾 正司 岡田 逸郎
 奥田 親一 棚澤 吉雄 永野 知親
 須藤 市藏 谷口 龍 堀本美之作
 平野 與次 二宮茂一郎 堀 林之助
 和田徳四郎 塚本熊次郎 川澤清太郎
 成瀬初太郎 杉本喜久次郎 中村 祐吉
 中村 祐吉 永富 貞平 白須 宗吉
 鹽田伊三郎 並木 幾彌 淺野 兼助
 酒谷國太郎 龜井喜一郎 藤田 春吉
 瀨尾嘉五郎 徳田 高二 久保田義三

藤田 若水 森 了一 星島 昂一
 篠崎 孫平 橋爪 甚平 高梨不二郎
 成田 春三 赤塚 善助 關口 直諒
 千代田惠三郎門井 東一 春日井風藏
 野村 龜藏 丸田 可平 有馬 順二
 島田碩之助 杉山保三郎 鈴木 世親
 富澤 充 和田 純 吉村 鎮雄
 中村 廣喜 野澤佛一郎野見山岩太郎
 井上 孝 原田 有恒 吉田與一郎
 福森虎次郎 神戶 政七 松岡 匡一
 福本清次郎 小柴卯之七 厚東 太郎
 清水久太郎 戸塚 眞一 渡 千 城
 筒井 頼亮 八木 通重 松田 清
 古 殿 基 小泉 改平 坂口 武市
 大島 勉次 桑原 庸雄 藤野 善生
 藤森源之助 佐藤 雅信 佐藤三三郎
 三田村平太郎 宮脇 丈八 今泉 丈吉
 若林 庸親 十川兵三郎 梶山 芳介
 勝田眞太郎 親井 八郎 菊井季太郎
 高橋 八郎 藤井 政八 中野岩太郎
 小松利兵衛 片尾 廉爾 佐瀨 家信
 佐瀨 信久 菊地仙之助 渡邊 源多
 米 知 徳 村田 正雄金光三代太郎
 黒澤三代喜知 木村宗七郎 横田 信義
 大野 精一 石川 浩 高木 秋雄
 月川 左京 福田 勝弘吉崎宇右衛門
 武田 孝 中島 好郎 藤村 寛
 酒井 正雄 今田 四郎 島田 傳
 秦 英 吉 高橋 眞惠 高橋藤四郎
 清水 滋 一色 信雄 二瓶 治夫
 尾花 四郎 八代 登 岩城 之
 丹羽 正夫 西島 孝一 友成 保
 寺田誠太郎 小西 利吉 小泉 一助
 佐野 久治 阪口 吾郎 北林 實
 神谷 一郎 伊藤 孫作 入江 悦造

岩永 祝三 原田 忠雄早瀬太郎三郎
 長谷川孝太郎堀 吉次郎 如田忠太郎
 如田 順三 大松 藤吉 川手龜之助
 谷崎善三郎 高津 秀政 高瀬 章三
 高須 三雄 武田 鼎一 中瀬 精一
 能島 通明 上野 宗 上田 晴雄
 久米川靜一 栗山 顯次 山田芳三郎
 近 寅一郎 江指 盛一 手束歌之助
 寺田 英三 安藝 元忠 北村 太朗
 湯淺 三至 三堀 寛 日野 威
 守永和三郎 井上 亮助 石川 虎三
 西尾 清信 西村 忠一 堀 貫次
 星野辯五郎 戸田徳之助 友松滿壽郎
 大石 馨一 大岡 俊 大山 利一
 大江 新 太田 八郎 渡邊丑之助
 脇坂 眞麿 加藤 龍 門田 康記
 河島榮次郎 吉田 信彦 吉田 精一
 田中文太郎 高橋 荒助 玉置 英三
 竹内 行男 土金兵太郎 向山 政恕
 村井 五郎 村上 彌生 植田 實
 増山滋次郎 深川 谷助 小林 啓邦
 小久江眞雄古岩井善太郎 遠藤 剛三
 勅使河原彦十郎定近 俊一 笹野鐵太郎
 岸 龜 三上 芳直 世古 松郎
 鈴木 正俊 井上 重治 入佐 龍丸
 石内 武 新田小一郎 西尾簡次郎
 堀田 結吉 小野寺 剛 大泉宗七郎
 大谷 貞三 大森 純一 鎌田 要助
 吉本 安三 田中 敬吉 田澤 康民
 田島 貞雄 伊達 筆一 土屋 啓造
 土屋光次郎 中村彌一郎 梅田啓次郎
 山内榮次郎 松本益太郎 深堀謙次郎
 福富 貫一 小西 退藏 近藤 祐吉
 縣保 三 天谷丑之助 天野 龍齋
 朝日 三郎 酒井鶴之助 北川 傳

君島 鳳吉 志賀 春雄 清水 政吉
 獅子内謹一 耶島崎精次郎 樋池鐵太郎
 兵頭 直明 諏訪 直夫 菅田 祐吉
 杉本常次郎 伊藤 豐次 伊藤 豐治
 石原 肇 波多野林一 原文 吉
 西尾 謙吉 西本 竹吉 德田 武夫
 大原 嘉三 大村 清 奥山敬太郎
 渡邊 太郎 渡邊 修三 吉岡 齊治
 田中 龍男 田代 弘藏 竹内 廉平
 辻一 郎 中島 忍 村田秀太郎
 野田 重三 黒田善太郎 八幡 輝一
 山田 專次 松井 敬三 松平 英
 小寺 順吉 越山 光吉 江角 興義
 阿部 米造 會田 彰誠 荒井 長祐
 秋本 統一 芦田 安一 佐藤千吉郎
 佐々木 魁 木寺安五郎 喜田 靈男
 由井二時三郎 皆川 三郎 宮福辰次郎
 志村 村 柴田 俊夫 島谷 清見
 木村 文一 森 愛藏 森 田 喬
 鈴木堅三郎
 八月廿五日
 工藤 直一 相馬 和雄 伊藤 正雄
 米村嘉一郎 小山 順造 清水千太郎
 山本諭次郎 寺尾 卯助 毛受 信雄
 吉中 顯郎 小野得一郎 光 信 享
 星野 治作 山内千代松 田中 三郎
 越智 通清 金尾慎太郎 内藤 義勇
 内山 廣三 池田信太郎 江上 弘遠
 二上 德藏 吉成 竹治 安藤 琢磨
 佐藤吉六郎 太田 勉三 黒木要太郎
 佐久間康一 粟津 榮藏 長安磯右衛門
 打田 耕一 天滿善次郎 木山 泰三
 市川 徹 大野 拓 内海 汎
 早川 友二 清水 三郎 山野 節三
 松本 元 高田 哲夫 新宮 武二

藤井 次郎 安部 壺 井上久太郎
 石井 英祐 粒良誠一郎 黒坂 五也
 山本恒太郎 佐々木誠吉 三浦友三郎
 日野 升二 平井 志朗 森本 繁雄
 飯田 茂 岡島 芳介 渡邊太三郎
 渡邊 汀一 兼坂 中 高崎 鑒
 玉置 定彦 永井 彌彦 松原 一樹
 小祝 武雄 小島 暁吉 藪 島 亮
 八田 俊吉 橋本 正身 大森 忠彦
 金澤 通誠 上片平直輔 藤田進一郎
 小安 章 手塚五郎平 手塚 積善
 雨森清三郎 安西於菟彦 久松 定省
 鈴木長次郎 鈴木 健三 石井 省二
 石月久太郎 原田甚四郎 尾家 藤藏
 吉村 慎一 中田 富男 中山 承次
 増田 三郎 小林八百吉 蛭谷金次郎
 淺野富太郎 三井 正俊 三谷 昌信
 水谷九平次 關屋 正元
 八月廿八日
 一金參圓也
 井上 傳照 堤 清三 中島 成効
 笠原 猷夫 山崎 啓三 三津間 董
 松田 幸郷 高田 悔音 小野房堅正
 兒島 茂助 久具 爲良 藤田忠次郎
 藤本 守 高橋富太郎 高根津長重
 高谷 振作 小島 信彦 高崎 源一
 館 孝六 淺見祐一郎 永 富 誠
 南原 隆平 森岡 三八 中里 眞清
 松本千太郎 小野 芳彦 與子田教行
 松田勝太郎 稻富信太郎 佐藤 澤吉
 鈴木吉兵衛 綾部 二郎 井原宇一郎
 横田宗次郎 宮野 照章 望月 恒造
 殿村 知明 小野 義夫 深井 貞亮
 石田義太郎 高橋 修 赤尾 元彦
 赤田 盛一 吉年宇兵衛 小原 直治

奥村 英一 松原 三郎 松澤 禮三
 清水 一夫 渡邊 周助 菊田隆四郎
 竹内 行一 長澤正太郎 島山 秀松
 森一 眞 金兒 一夫 家本 爲一
 吉川 充 青木 重嗣 末松健太郎
 川村 浩 伊藤寅治郎 館岡武太郎
 池口 太郎 木村 謙一 中村 金次
 岡 侃 矢 永 務 松園 進
 清水 定勝 大岩 銀象 芥 潔
 安保 全 奥田 眞磨 内田 虎雄
 久保田信之 吉村 寧 西村 定則
 矢谷 覺 櫻井 省吾 石谷傳兵衛
 上井 和一 加納鶴次郎 筧原 國雄
 田島 好 高橋 謙爾 竹村 房吉
 那須 正男 三宅 數多 鹽津猪十太
 入交 武備 今岡 誠一 本間 勇
 小川 親篤 綿田 久吾 川田喜代次
 米谷 眞三 田所 繁治 田村喜一郎
 中村 正司 久保田 清 味方 利造
 青木 咲吉 日根 周三 廣瀬 博
 杉浦 不二 飯島佐志郎 石丸 英一
 西田 稔 川口善兵衛 田後作次郎
 高橋久左衛門 瀧口 源久 鶴田 政雄
 八坂 甚二 山泉 利重 深瀬 史朗
 河野 健吉 三輪 留藏 宮川 庸之
 兩角 哲郎 百瀬 善重 西岡 重義
 上肥 敬治 大内孫次郎 渡邊 昇平
 米原伊之助 吉中 永建 高戸常太郎
 高田 榮三 種田德太郎 村上 知祥
 山口 太郎 増 田 登 船渡 佐輔
 荒井 武治 三輪 環 井戸 達夫
 井口龜三郎 伊藤 英保 飯島 正一
 岩崎 精次 石井 眞藏 石橋 義雄
 石館 久三 早川 純一 橋戸 義雄
 戸塚英之輔 殿村稀三郎 富永 三省

小川 茂 小川 重吉 大山 嘉藏
 大東 藤吉 太田 永吉 岡田 兼雄
 若林 忠武 加藤 享 加藤 陽康
 門脇 三郎 横井 順造 横山 賀利
 横山 琢衛新里藤一郎 西脇六郎左衛門
 大日方 篤 瀧川富之助 反町 茂作
 津島 廣吉 土田房次郎 筒井 常丸
 中田 訓 中島 一郎 永田 誠一
 村田 最一 浦野 元俊 野口專太郎
 野吹 實 野崎 貞逸 久野 眞苗
 工藤 遠一 矢内 榮次山添幸右衛門
 間山 清麿 黒澤 政章 栗原 雅信
 倉田信次郎 八木 豪 山本 茂治
 安井 盛三 眞板欽一郎 松岡清太郎
 牧田 二郎 小池 觀 兒玉 勝一
 近藤菊之助 枝本 幹太 赤廣 助雄
 佐々木春彦 安東 友哉 齋木 直亮
 木村賢三郎 宮本 眞月 清水 覺夫
 重松 實 平野 恒三 平山 茂厚
 杉浦伸太郎 鈴木 中二 池田 文次
 堀籠虎之介 島居 憲吉 小倉 曉
 大崎喜八郎 大見 忠義 太田 茂雄
 岡田常太郎 岡澤新太郎 若林 亮
 若 杉 勇 渡邊 貫治 高村 應一
 近藤富太郎 増田政次郎 山口 元吉
 鈴 木 素
 十二月九日
 一金參圓也
 味野 金平 丹生 實榮 伊藤東二郎
 野口 寛 長 太郎吉 竹本 正業
 倉田 隆介 今田德太郎 石黒大次郎
 寺澤 萬三 米田 勝造 長谷川松治
 吉崎 頼雄 青柳郁次郎 挾門 千年
 佐藤 清二 幡谷仙三郎 樺島 信福
 小林 光次 織田 正澄 深山 元繼
 成田 謙輔 飯島 方郎 石井泰一郎

門井 省三 甘樂辨次郎 宮崎 重助
 武者宗兵衛 山本 文作 太田 茂雄
 松野 竹吉 北 脇 祥 井上 興一
 荊木 誠三 市野 博 今井 孝
 石渡玉次郎 濱谷 信三 長谷川謙一郎
 本間友治郎 島取爲三郎 奥村源太郎
 和中虎十郎 若槻 直樹 若松新二郎
 加納 義之 川原 金造 神奈川台一
 吉田 温 田中與四郎 田中 秀穗
 田村 順三 鶴 島 勇 中村 静一
 中島 喜八 永沼 留雄 永田 嘉市
 永山五郎吉 内田 忠則 久保 周次
 熊谷 孝章 矢田部三四 山口 金伍
 山木篤三郎 山下 芳三 松原淳太郎
 松岡 敬之 藤田 貫治 小林重次郎
 小島 直一 郷間 宗平 近藤 直吉
 安積 勝三 佐藤 環 佐藤 潔治
 佐藤 昌尙 佐藤 茂亮 佐久間小一郎
 三枝 治郎 齋藤 民治 坂内 顯竜
 氣比新二郎 金納彌一郎 清水 信一
 白井忠二郎 重松傳治郎 直原 四郎
 下村 正治 一 杉 榮 鈴木佐平次
 伊藤佐十郎 飯 沼 明 岩岡 眞藏
 岩澤 數太 岩崎 重吉 岩瀬 純一
 稻生龜之助 石田 龜藏 石田 重利
 秦 進 二 萩原 民治 西 守
 西垣勳次郎 堀尾乃武夫 星野新八郎
 木間 義一 木間 信吉 戸川 潔
 富田達三郎 小原 純一 小澤 哲夫
 大島喜代治 和田 利彦 和田喜太郎
 渡邊 喜一 鶴澤 茂平
 十月八日ヨリ十一月二十二日マデ
 星野庄治郎 中川 久吉 三和 一男

梅津庸 中村 武雄 山田 文雄
 井上 正也 堀口 龜重 古市重次郎
 都筑 仁吉 林田 成美 能勢 正己
 澤石 省三 中村 甚一 森田 鷹彦
 揚 祥 隆 石見 良津 渡邊 藤吉
 小林 本功 前田 利一 椋原 政治
 松井覺三郎 石垣猪之吉 矢部 精一
 石川 穉二 山田 兵吾 星谷 佳雄
 高田 重一 堀川 垣男 長谷部金吾
 金子 謙 山崎文五郎 足立 清逸
 山榊 忠興 田中 富久 千野 林一
 天海丘四郎 北小路 勳 伊藤 廣光
 宮崎 宮衛 巽 精一 氏家 寛助
 林 半 藏 平塚 四郎 栗 原 精
 綿貫 和夫 武井 正房 谷 哲 二
 西倉壽三郎 久米 寛二 福田 靜義
 芝野 藤平 山崎 廉平 辰巳善治郎
 佐々木惣治郎 山根 健太 横田 秀隆
 山本喜久慶 松原 憲一 山口 景連
 間瀬才治郎 岡 正 徳 笹内 重晴
 藤井 貞一 福武 慶作 吉岡 利雄
 建部留三郎 山谷 盛康 田中 保男
 橋 爪 温 増田四一郎 豊田 武安
 金六圓也 村田勝三郎 山田 眞善
 金三四也 藤 常 輔 山田 眞善
 河 村 敏 山田 定治 高林 正
 西 村 清 猿田 春景 蒲原 賢次
 松島御三郎 中森 利平 松下 史朗
 山田 精治 中村道四郎 玉置 鄭次
 湊谷定次郎 佐々木一延 池田唯之助
 川崎 信顯 山住於儀人 中島 貫一
 加藤保之助 竹村 孝輔 土屋 卓一
 井上賢太郎 植野謙次郎 渡邊 乙彦
 今崎信四郎 藤田兵次郎 曾木 貴重
 藤 森 誠 岡村 吉平 増田稻三郎

河 邊 泰 松 尾 寛 氏家 正喜
 加藤達次郎 伊藤敏二郎 鹽尻 柳藏
 佐久間 章 松岡開地郎 大菅 儀一
 磯野 治作 四澤 英憲 坂本三重郎
 高見與一 團 田 格 山本 松三
 猪狩 暉治 鹿毛 三吾 樽村小善太
 國領 榮一 渡邊 綱夫 富田敏二郎
 中野恭一郎 山縣 壹二 岡村禎太郎
 和田 信一 向井竹次郎 久保田 貫
 長坂勝太郎 金 藤 幹 山崎 直治
 水谷 治平 林 宗 徳 石田 芳春
 横山啓治郎 坪谷善四郎
 金六圓也
 内田竹三郎
 金五弗
 井上恒太郎
 山内 忠文 三宅 尙三 植田 司朗
 佐野 頼直 小川 貞治 高東 有機
 市 橋 齊 野村 俊一 濱田宗三郎
 老川九十九 福島 誠嘉

記念事業部記事

特に校友諸君に懇ふ

故總長大隈侯爵記念事業は昨春
 發表以來校友諸君を始め滿天下
 仁人志士の深厚なる御同情と痛
 切なる御援助により既に其申込
 額百八十萬圓を超え漸く當初の
 豫定額貳百萬圓に近づき申候に
 つき今秋大學の創立記念日を卜
 し記念大講堂の建築に着手可致
 筈の處突如として這般の大震災
 に遭遇し在來の大講堂崩壊を初
 めとし莫大の損害を蒙りし事既
 報の通りに御座候就ては此際記
 念大講堂の建設は學園の教育上
 眞に焦眉の急に御座候へば未申
 込の諸君子は何卒至急御申込被
 下度切に希望に堪えず候

大正十二年十一月

早稻田大學

總長 高田 早苗

田中常務理事の關西出張

京都、大阪、神戸の秋期校友大會に
 就き高田總長臨席の筈なりし處生憎
 震災後の劇務により健康を害し靜養
 中なる爲、代理として田中理事は上村
 記念事業部副主事を随伴して十一月
 五日東京出發六日は京都校友會に八
 日大阪校友會に十日神戸校友會に臨
 みしが、大會は何れも甚だ盛會なりき
 席上田中理事は學園の近況特に震災
 後の財政状態を説明して、記念事業の
 拂込に付き懇請する所ありたるに、何
 れの校友大會に於ても、出席校友友滿
 場一致を以て記念事業資金の拂込促
 進の決議を爲し、各校友會より校友に
 對して、此の旨を移牒して該事業の資
 金の拂込を促したるが、中には即時
 拂込者も尠からず、大いに好結果を見
 たり。
 歸途十一日に名古屋に立寄り同地
 校友の招待會に臨みて、京阪同様に記
 念事業資金拂込促進の懇請を遂げし
 に出席校友の熱心なる贊助により即
 時に七千圓の新申込を得て、十二日歸
 京さる

故總長大隈侯爵記念事業
資金申込芳名

第拾七回(自大正十二年八月廿一日
至大正十二年十一月廿五日)

各府縣累計

東京府	一、〇七四、一四五、八四
大阪府	六九、四七一、〇五
兵庫縣	六一、九〇一、八〇
愛知縣	四二、七七三、四五
神奈川縣	三六、一八六、〇〇
福岡縣	三二、〇四九、三〇
京都府	二九、九二〇、三七
新潟縣	二四、一七九、〇五
支那及滿洲	二二、五九二、三五
佐賀縣	二二、一五八、四〇
北海道	二一、九一〇、八六
岡山縣	二〇、〇一三、九五
富山縣	一九、六三五、八〇
三重縣	一八、六四五、一三
栃木縣	一七、七四九、三〇
長野縣	一七、〇七二、二二
鳥取縣	一五、九三〇、〇〇
長崎縣	一五、三八〇、四〇
千葉縣	一四、〇〇一、一一
和歌山縣	一三、二六三、三五
大分縣	一二、五四二、〇〇
山形縣	一二、四二三、五二
埼玉縣	一一、〇三四、六〇
靜岡縣	一一、七〇二、〇一
香川縣	一一、四七五、〇〇

總累計

山梨縣	一〇、九九一、五〇
宮崎縣	〇、八五八、四〇
愛媛縣	九、八四七、三五
福島縣	九、七三三、三九
朝鮮	九、六六七、四〇
茨城縣	九、五九八、五〇
宮城縣	九、三七六、五〇
廣島縣	九、〇一一、五〇
群馬縣	八、二四九、三〇
岐阜縣	七、九七七、〇〇
福井縣	七、五五七、〇〇
島根縣	七、四九七、〇八
熊本縣	七、四四二、〇〇
鹿兒島縣	六、七三三、五〇
秋田縣	六、六六〇、七〇
校外生	六、五七八、八七
山口縣	六、二〇二、五〇
滋賀縣	六、一四四、六〇
石川縣	六、〇八六、六三
德島縣	四、五〇七、〇〇
青森縣	四、四九四、四六
奈良縣	四、三三三、五〇
岩手縣	三、七三五、〇〇
高知縣	二、三三七、五〇
樺太	一、六二〇、〇〇
沖繩縣	一、五六七、〇〇
臺灣	一、四二二、〇〇
外國	八七七、一四
謝票	八一、〇〇
總累計	一、八三〇、四〇五、一八

東京府

早稻田文藝大 觀版權收入	三六五、〇〇
故内々崎雄三郎殿	一〇〇、〇〇
佐々木與四郎殿	一〇〇、〇〇
日本工業合資會社殿	五〇、〇〇
三宅勤殿	五〇、〇〇
大正十二年 法學部卒業生一同殿	四四、五一
羽倉信朗殿	三〇、〇〇
森崎源吉殿	一八、〇〇
松原久次郎殿	一五、〇〇
唐澤整殿	一〇、〇〇
中川正左殿	一〇、〇〇
鍋倉春彦殿	一〇、〇〇
海老澤正忠殿	一〇、〇〇
三重野彦七殿	一〇、〇〇
杉浦宗三郎殿	一〇、〇〇
戸谷外助殿	五、〇〇
村田峰次郎殿	三、〇〇

神奈川縣

鈴木六一郎殿	五〇、〇〇
脇秀男殿	三〇、〇〇
山中鐵三郎殿	三〇、〇〇
中澤規矩夫殿	一〇、〇〇
須賀甚藏殿	一〇、〇〇
吉川佐右衛門殿	五、〇〇

千葉縣

高木清一郎殿	五、〇〇
--------	------

埼玉縣

信田峰吉殿外十二名	三五、〇〇
-----------	-------

茨城縣

大矢 敬香殿
松本 誠作殿
竹田 敏泰殿

栃木縣

竹内權兵衛殿
森道三郎殿
内藤 正規殿
宮本 清吾殿
島崎稻之助殿

群馬縣

阿部 善藏殿

福島縣

中村 九藏殿

青森縣

渡部 善三殿
本田 文助殿

宮城縣

北村 益殿
相馬 恭一殿
田中 實殿

秋田縣

佐々布朝治殿

香川縣

猪又 勉三殿
柿沼 邦司殿
佐原 武雄殿

二〇、〇〇

品川 秀規殿

山梨縣

五、〇〇 内田 二郎殿

愛知縣

三、〇〇〇、〇〇 伊藤 守松殿

二、〇〇〇、〇〇 神野金之助殿

一、〇〇〇、〇〇 富田 重助殿

一、〇〇〇、〇〇 岡谷清治郎殿

一、〇〇〇、〇〇 山田竹千代殿

五、〇〇〇 佐藤 秀子殿

五、〇〇〇 三浦 一殿

二、〇〇〇 早川鐵治郎殿

二、〇〇〇 田中 八穂殿

一、〇〇〇 小田原 勇殿

五、〇〇〇 高澤 彦一殿

二、〇〇〇 伊藤 秀次殿

新潟縣

一〇〇、〇〇 早稻田大學有恒會

五〇、〇〇 水島 八郎殿

富山縣

一〇、〇〇 近岡七四郎殿

一〇、〇〇 江尻 三郎殿

石川縣

三、〇〇〇 土井下傳七殿

三、〇〇〇 安田彌之吉殿

福井縣

五、〇〇 岩本 祐忠殿

滋賀縣

一〇、〇〇 廣瀬 秀圓殿

三重縣

三〇、〇〇 藤澤 常吉殿

三、〇〇〇 藤井源次郎殿

和歌山縣

一〇、〇〇 松村清次郎殿

奈良縣

一〇、〇〇 中田熊治郎殿

京都府

一、五〇〇、〇〇 谷村一太郎殿

五〇、〇〇 中村 己吉殿

大阪府

一〇〇、〇〇 松本 新殿

二〇、〇〇 押田 辰生殿

兵庫縣

三〇、〇〇 川崎由三郎殿

一〇、〇〇 長谷川宇平殿

一〇、〇〇 桂 二代次殿

一〇、〇〇 安永 傳亮殿

岡山縣

二〇、〇〇 米澤 核雄殿

五、〇〇〇 横山竹三郎殿

廣島縣

三〇、〇〇 畠山 鴻業殿

三〇、〇〇

菅田 秀雄殿

山口縣

六〇、〇〇 新谷 泰殿

二〇、〇〇 川杉 儀作殿

一〇〇、〇〇 梅田 眞一殿

二〇、〇〇 吉木 陽殿

一〇、〇〇 福田 清一殿

一〇、〇〇 新納 新吉殿

一〇、〇〇 和木 清吉殿

五、〇〇 田阪 綱助殿

五、〇〇 佐川 延治殿

五、〇〇 平田 徳次殿

五、〇〇 神田 吉松殿

五、〇〇 國森 重衛殿

五、〇〇 加藤豐次郎殿

五、〇〇 藤元松之輔殿

五、〇〇 岡村 數馬殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

五、〇〇 辻 富之祐殿

鳥取縣

二五〇、〇〇 安東哲次郎殿

二〇〇、〇〇 石谷傳四郎殿

一〇〇、〇〇 澤田 虎藏殿

一〇〇、〇〇 濱本 義信殿

五〇、〇〇 片尾 廉爾殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

五〇、〇〇 南條 繁殿

增藏殿○東條兵吉殿○沖原市太郎殿
○河内山政一殿

殿○天野鶴十郎殿○天岸一順殿○岸
節三郎殿○湯山吉五郎殿○由井源次
郎殿○蛭子暉廣殿○世良悠次郎殿○
菅井昇平殿○隅田稔成太郎殿

長崎縣

三〇、〇〇 田崎 重郎殿

佐賀縣

三〇、〇〇 小野 勝淨殿

五、〇〇 德永 伴六殿

熊本縣

二〇、〇〇 伊藤 俊記殿

大分縣

一〇、〇〇 唐木鐵次郎殿

鹿兒島縣

一〇、〇〇 濱田 良治殿

北海道

三〇、〇〇 高野 精一殿

三〇、〇〇 中村 喜藏殿

三〇、〇〇 兼坂 中殿

二〇、〇〇 吉澤 武保殿

二〇、〇〇 長尾 誠一殿

二〇、〇〇 荒井 初一殿

二〇、〇〇 白井 與一殿

一五〇、〇〇 今泉 丈吉殿

一五〇、〇〇 長谷川藤橘殿

一五〇、〇〇 橋谷 徳治殿

一五〇、〇〇	山内重次郎殿	三〇、〇〇	伊藤 定七殿
一五〇、〇〇	杉本喜久次郎殿	三〇、〇〇	伴 恒 雄殿
一二〇、〇〇	榊永 靜衛殿	三〇、〇〇	時田 隼輔殿
一〇〇、〇〇	伊藤 順次殿	三〇、〇〇	大橋初太郎殿
一〇〇、〇〇	西岡 重義殿	三〇、〇〇	王木 武則殿
一〇〇、〇〇	大瀧 猛夫殿	三〇、〇〇	亘 寅吉殿
一〇〇、〇〇	大谷岩太郎殿	三〇、〇〇	蒲原 正世殿
一〇〇、〇〇	大久保正時殿	三〇、〇〇	吉岡 高治殿
一〇〇、〇〇	渡邊長太郎殿	三〇、〇〇	横内 清一殿
一〇〇、〇〇	渡邊 昇平殿	三〇、〇〇	建部留三郎殿
一〇〇、〇〇	竹内 行男殿	三〇、〇〇	谷本 勇殿
一〇〇、〇〇	内山 英一殿	三〇、〇〇	寺木 正造殿
一〇〇、〇〇	山本 市英殿	三〇、〇〇	坂牛 謙次殿
一〇〇、〇〇	福原 清吉殿	二〇、〇〇	和田治五郎殿
一〇〇、〇〇	荒井 良祐殿	二〇、〇〇	渡邊熊四郎殿
一〇〇、〇〇	下村正之助殿	二〇、〇〇	綱塚徳次郎殿
一〇〇、〇〇	平野萬四郎殿	二〇、〇〇	奥寺徳太郎殿
六〇、〇〇	渡邊紋太郎殿	一一、〇〇	服部 信一殿
六〇、〇〇	渡邊内藏之助殿	一〇、〇〇	早瀬忠太郎殿
五〇、〇〇	泉 二郎殿	一〇、〇〇	大西 正信殿
五〇、〇〇	井上角太郎殿	一〇、〇〇	蚊野半三郎殿
五〇、〇〇	西尾昇太郎殿	一〇、〇〇	根岸 一殿
五〇、〇〇	小川 幸衛殿	一〇、〇〇	藤山 四郎殿
五〇、〇〇	渡邊 有仁殿	一〇、〇〇	鈴木 豊殿
五〇、〇〇	笠原 定藏殿	五、〇〇	渡邊 鐵太殿
五〇、〇〇	中村 穂吉殿	五〇〇、〇〇	勝俣與一郎殿
五〇、〇〇	中島 三郎殿	三〇〇、〇〇	遠藤 實殿
五〇、〇〇	山本 好一殿	一〇〇、〇〇	竹本 正業殿
五〇、〇〇	山崎 潔殿	一〇〇、〇〇	青木 清海殿
五〇、〇〇	興國寺竹三殿	一〇〇、〇〇	村上 元吉殿
五〇、〇〇	小池 學而殿	五〇、〇〇	庄内 貞秀殿
五〇、〇〇	下村 晴二殿	五〇、〇〇	
五〇、〇〇	東田 基見殿		

樺太

四〇、〇〇	猪股 猛殿
三〇、〇〇	池上巳三郎殿
三〇、〇〇	吉本曉三郎殿
三〇、〇〇	谷田 重邦殿
三〇、〇〇	天間榮太郎殿
三〇、〇〇	作間 三男殿
三〇、〇〇	平渡庄兵衛殿
二四、〇〇	櫻庭 順三殿
二〇、〇〇	中村 勝正殿
二〇、〇〇	美佐 捨治殿
三、〇〇	黒川 信殿
三〇、〇〇	藤田權三郎殿
一〇、〇〇	木村 晴光殿
五、〇〇	井上 冽殿
一〇、〇〇	譚 君 平殿

臺灣

朝鮮

支那

早稻田學報と廣告の效果

今や何れの事業でも、其の牢固たる根柢と潑刺たる營業振とを世人の心裡に銘記して、確實なる信用乃至販路を得るには、廣告の力を俟つもの決して尠なくないことは、實際家の夙に熟知せらるゝ所である。我が早稻田學報は、既に印刷部數三萬に上り、其讀者の内には、萬餘の學生は固より、特に各方面の購讀者をも含み、一萬九千の校友は内地にありては商工都市や農村の各方面に活躍し、更に、滿鮮のみならず、吾が民族の齊しく經濟的乃至文化的に緊密なる提携を翹望する中華民國には學報の讀者たるわが大學出身者が極めて多數を占めてゐるのでありまして、隨つて其の廣告の效果に就ては既に定評あり、半年又は年極めを申込まるゝ向も少くない實狀であります。

帝都の復興的氣運に乗じて將に我が經濟界に一新生面を拓かんとする今日、廣告活用の好機であります。本會に於てもかゝる時代の要求に鑑み、この際出來得る限り紙面を増大して江湖の利便に供すると同時に、本會發展の一助ともせん方針でありますから、揮つて之を利便せられんことを切に望みます。

大正十二年十二月

早稻田大學校友會

裏表紙 一頁金六拾圓
 内 郡 一頁金五拾五圓
 一頁金參拾五圓
 三分一頁金貳拾五圓
 (半年又は年極めは別に御相談に應ず)

文學博士 坪内逍遙先生著

小川治平氏
穴戸左行氏
初山滋氏 畫

色刷繪及挿繪多數
定價貳圓貳拾錢
郵稅八錢

家庭用兒童劇

第二集

坪内博士の兒童劇は兒童教育界の大評判となつて、家庭は勿論、全国各地の幼稚園、小學校で演ぜられ、大阪市では同市中央公會堂で壹萬人の小學生が見物しました。此第二集には有樂座や帝國劇場で大好評の「すくなくばこな」も載つて居て、第一集以上に面白い。口繪、挿繪には三畫家が筆を揮ひ、假面や衣裳圖や實演の寫眞や小歌劇化された「をろち退治」や兒童劇の扱ひ方に關する著者の注意や實演の諸評が添へてあります。(家庭用兒童劇第一集定價郵稅同前)

本兒童劇レコード (富士山印) 帝劇技藝學校第七期生吹込。本出版部の代理部(振替東京をろち退治(東京永井建子氏作曲)兩面一枚) 六一二八五番)で販賣。定價各一枚(兩面)壹圓五拾錢。神樂師の息子(其一、其二兩面一枚、神樂師の息子(其三)、メレー婆さん兩面一枚)。

坪内博士著 兒童教育と演劇

四六判美裝 定價壹圓八拾錢
二百五十頁 郵稅八錢

藝術教育は現代の一大 WATCHWORD です、併し其理論と其實際とが兎角離れぬことになるので存外其効果が擧がらない、本書は其弊を救ふために書かれた 第壹書です、主として婦人の爲に説かれたのだが、苟も家庭乃至初等教育に志ある人々の必讀書です、其要目は (一)現世紀の三特徵 (二)現代に於ける女性の任務 (三)遊戯の藝術化 (四)兒童劇の進化 (五)兒童劇の種類及び使命 (六)兒童劇の效用 (七)兒童劇に對する種々の杞憂 (八)兒童劇の扱ひ方 (九)結論

東 京 牛 込 早 稻 田 大 學 出 版 部 東 京 東 區 牛 込 三 一 三 號 早 稻 田 大 學 出 版 部 東 京 東 區 牛 込 三 一 三 號 早 稻 田 大 學 出 版 部 東 京 東 區 牛 込 三 一 三 號

ス タ イ ル の 良 い 晴 衣 は !!

在學生御制服及卒業服は

勿論英米佛獨其の他諸外

國に留學若しくは旅行す

る方は多年各國に於て實

地研究歸朝し最も諸外國

の人情流行に通ずる弊店

にて御調製なる様御願ひ

致します

早稻田大學
高等學院 **指定**

濱田洋服店

早稻田鶴巻町

大學通り五九番地

電話牛込二七三

早稻田大學新聞は其後益々

其の使命を完ふしつゝあり

ます。

學園の思想、學園の施設、學生

の催等を細大漏らさず、内容

の充實と報導の迅速、嚴正の

批判と獨立の筆を以て研究

せる學生の其の表現たる本

紙を御購讀ください。

一年分購讀料(郵税共)

壹圓六拾錢

早稻田大學構内

早稻田大學新聞學會

振替口座東京四九三九八

法律、經濟、哲學、宗教

文學、語學、理學、數學

美術、歷史、圖書、雜誌

大學各科
高等學院 **教科書販賣**

早稻田大學正門前

南風堂書店

理學博士橫山又次郎著

菊判總布 挿圖貳百七拾圓 索引付
定價五圓五拾錢 郵稅十八錢

自然地質學

地震に關する最新知識を得んと讀め!

自然地質學は近來の目覺ましき學術の進歩に適應した最新知識である。其の説く所は地殻、地球の内部、岩石、地層の構造、内外の天然力等で、地震の種類、震域、長さ、強さ、傳播速度、震源、地震の原因、土地の昇降、地盤等地震に關する最新知識を網羅してある。説明平易、挿圖貳百七拾個。

横山博士著 地質學攬要

參圓五拾錢 郵稅十八錢

◆横山博士著「地質學全書」◆

天文講話	價二・八〇 稅一・六〇	陸文學講話	二・八〇 一・六〇
地質學概論	同上	地質學攬要	三・五〇 一・八〇
天文地質學講話	同上	前世界史	四・八〇 一・八〇
人文地質學講話	同上	古生物學綱要	七・〇〇 一・八〇
海洋學講話	同上	氣界地質學講話	三・〇〇 一・六〇

圖書目錄進呈 東京牛込 振替名古屋二三四五 早稻田大學出版部

マントとトンビ

生地の精選、仕立の優秀、すべて當部が確信を以て御薦めいたします。

◆マント (頭巾附)

黒ラシヤ 二尺八寸(鯨尺) 金拾八圓

同 三 尺(同) 金貳拾圓

同 三 尺二寸(同) 金貳拾貳圓

◆トンビ (頭巾ナシ)

霜降メルトン 朱子襄 三尺三寸(鯨尺) 金參拾八圓

同 甲斐絹襄 同 (同) 金參拾圓

同 霜降ラクダ 朱子襄 同 (同) 金四拾參圓

同 甲斐絹襄 同 (同) 金參拾八圓

三尺三寸以上一寸延び壹割増のこと

頭巾メルトン五圓ラクダ六圓増のこと

マント、トンビ共一枚 送料 内地 四拾五錢 領地 七拾五錢

防寒用毛布の大廉賣

一純ラクダ毛布 大形 一枚 金拾六圓五拾錢

一茶褐陸軍毛布 同 金拾壹圓

送料 内地 四拾五錢 領地 七拾五錢

早稲田大學出版部 東京 電話 八二一 番 五八二 番 五八二 番

牛込

東京

チューブ人 大形金四十五錢
中形金二十五錢



清新の香味最もなつかしき

ライオン煉歯磨

チューブ人

歯牙に對する清掃的效果最も優秀にして、而もその香味の清新なる、
新時代の紳士淑女方の此上なき愛用品となつてをります。

リボン状に出る美しき、使用後の清爽感
容器の優雅なる、使用携帶共に至便なる

まことに御家庭用としても、御旅行用としても文化生活上缺くべ
からざる逸品で御座います。



ライオン 齒磨本館 東京本所 外手町
支店 大阪市 中區 小橋 小橋商店
名古屋 市中區 錦町 丁目
代店 上海 寧波路 天津 漢口 孟買 倫敦

早稻田大學學報

大正二十二年十月十日發行

第三百四十六號

早稻田學報

目次

第十三	第十二	第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
出版部	校友會	附屬工手學校	體育部	科外講演及特別講義	學生課	圖書館	會計	得業生	學科課程	學科課程	教職員	學年間の重要事項

早稻田大學 第四回報告

(自大正十一年四月一日至同十一年三月卅一日)

創立四十年記念式 學制頒布五十年記念式

大正十一年十月二十日は恰も本大學創立第四十年に相當す本大學は曩に大正七年秋季に於て創立三十三年祝典を舉げて以來僅に五星期に過ぎずと雖も而も此の短期間に於て内外共に一大改正と進歩とを效せり即ち大正九年二月五日大學令に依る大學として認定せられ第一第二高等學院を新設し各學部の組織及び内容に一大改善を施して名實漸く整ふに至れり、されば我が學苑は茲に創立四十年記念を祝すべき時を迎へたれば盛典を舉げてこれを祝福すべき筈なりしも本年は本大學の慈父たる故大隈總長を亡ぶの痛恨事は遭ひて其一周の喪も尙ほ未だ除せられざるのみならず故總長の記念事業を起して大方を煩はし居る時なるを以て此際には内部のみの式典を舉げて故總長の靈に告ぐると共に將來向上の一路を邁進するの意を鞏むることとせり
即ち創立記念日なる十月二十日午前は小石川音羽護國寺境内故總長大隈侯爵の御墓前に於て創立四十年記念報告祭を行ひ同日午後一時中央校庭に於て同記念式並に學制頒布五十年記念式を行ひ鹽澤學長高田名譽學長澁澤基金管理委員長の演説ありたり

高等豫科の廢止

本大學附屬高等豫科は高等學校令に據る高等學院新設の結果大正十一年三月三十一日限りこれを廢止したり

工手學校學則改正認可

本大學附屬早稻田工手學校學則並に生徒定員變更の件に付き曩に當局に向て申請中なりしが大正十一年四月二十六日付を以て其認可を得たり

專門部各科及高等師範部

各研究科存續

大正十一年十二月三日研究科に關する委員會に於て專門部各科及び高等師範部の各研究科に關して審議したるが其結果從前の通り右各部に屬する研究科を存續するに決したり

選科規定審查委員會及

同委員の新設

豫て本大學に選科設置の議あり先づ其の準備として選科規定に關する審查委員會を設くるの必要あるを以て各學部より學部長及び各二名宛の教授を舉げて同委員會を組織すること

となり大正十二年二月十九日及び二十日に互り各學部教授會を開き其の選舉を行ひ左の諸氏同委員に決定せり

政治經濟學部

部長安部磯雄氏 五來欣造氏

高橋清吾氏

法學部

部長寺尾元彦氏 遊佐慶夫氏

中村萬吉氏

文學部

部長金子馬治氏 山岸光宣氏

吉江喬松氏

商學部

部長田中穗積氏 北澤 新次郎氏

小林行昌氏

理工學部

部長山本忠興氏 德永重康氏

小林久平氏

但し金子文學部長病氣に付きその間片上伸氏代理す

政治經濟學部科學科課程の改定 (二學期制採用)

政治經濟學部及び專門部政治經濟學科に於て大正十二年三月十五日臨時教授會を開き安部學部長の提案にかゝる同學部科學科課程改正案を審議したるが教授上の充實及び能率増進を期し且つ學生の研究上にも能率増進を期し滿場一致を以て右學科課程改正案を通過したるが其の要綱左の如し猶ほ具體的細則に就ては委員會の議に附記すること、なり高橋五來阿部の三教授其の委員にあげらる

一、各學年中の學期は舊來三學期制なりしがこれを改めて二學期制を採用し其の學期を左の如く定むること
前學期四月より十月半まで後學期十月半より翌年三月まで

二、講義は各學期毎に結了するを本義とし隨つて前學期に開講せられたる學科目の講義は其の學期中に終へ後學期には更に新なる學科目に就いて教授すること、なる

三、試験は各學期末に於て夫れ々其學期中に講了したる學科目に就いてこれを行ふ

政治經濟學部科試驗制度改正

大正十二年三月十五日の政治經濟學部科教授會に於て審議の結果同學科の試驗制度上に改正を施したるが其の要目左の如し

一、試験は成るべく口述に依ること、且つこの場合には論文試験を附加するを得但し口述試験を行ふこと能はざる場合には筆記試験に依る

一、教員は自己の受持學科の試験に就ては絕對の責任を以て自らこれを施行すること若し必要ある時は助手をして輔佐せしむることを得

一、隨つて一學級の試験を一時に行ふこと困難なる場合には五六十人を單位として區分して各單位に就て別々に試験を行ふものとす

一、前二項の結果として從來の試験監督制は自ら廢止せらる

同 野間 八造氏(再)
 同 山田英太郎氏(再)
 同 山澤 俊夫氏(再)
 同 町田 忠治氏(再)
 同 昆田文次郎氏(再)
 同 齋藤和太郎氏(再)
 同 前島 彌氏(再)
 同 男爵
 辭任 中村康之助氏
 維持員會選出 松川駒次郎氏
 福岡縣校友會選出

逝去 石井 政吉氏
 校友會選出 小川 寅六氏
 長崎縣校友會選出 能村 千別氏
 教授會選出

海外視察及留學

○歸朝 本學年中左記諸氏海外より歸朝せり
 米國 經濟學財政學 二木 保幾氏
 歐米 教育視察 法學博士 田中 穂積氏
 米國 電氣工學 上田 大助氏
 英米 英文學 日高 只一氏
 歐米 礦物學 小室 靜夫氏
 歐米 建築學 吉田 亨二氏
 歐米 學校衛生視察 醫學博士 前田 實氏
 英佛 社會學 關 與三郎氏
 米國 建築學 大澤 一郎氏
 ○出發 本學年中左記諸氏海外に出發せり
 大正十一年五月七日 歐洲 親族及相續法 外岡 茂十郎氏
 大正十一年十月廿二日 歐米 史學研究 煙山 專太郎氏
 大正十一年十月卅日 獨英 電氣工學 川原田政太郎氏

大正十一年十二月 會津 常治氏
 歐米 歐米視察 中野 登美雄氏
 米國 公法 中村 宗雄氏
 瑞西 民事訴訟法 淺見 登郎氏
 米國 政治學史 高井 忠夫氏
 米國 海法及國際私法 松本 容吉氏
 獨國 機械工學 富井 六造氏
 英國 應用化學 長谷川安兵衛氏
 英國 會計學 末高 信氏
 英國 保險學 堤 秀夫氏
 英國 電氣工學 秀夫氏

教授志賀重昂氏は南米ブラジル建國五十年祝典に參列の爲め大正十一年八月出發同十二年二月廿三日歸朝せり
 教授中村進午氏は商科大學より歐米學術視察の爲め大正十一年八月十三日出發大正十二年二月廿五日歸朝せり
 教授服部文四郎氏は商業會議所より布哇に開催の汎太平洋商業會議に出席を命ぜられ大正十一年十月十六日出發せられたるが其序を以て渡米審に同國の文物を視察し大正十二年一月歸朝せり

各休暇及臨時休業

○臨時休業
 大正十一年五月十五日、十四日水上運動會舉行につき其慰勞の爲め臨時休業
 大正十一年七月三日、故東伏見宮依仁親王殿下の御葬儀當日につき敬吊の意を表し臨時休業
 大正十一年十月三十日學制頒布五十年記念日につき臨時休業

大正十二年一月十日故總長大隈侯爵一周年祭に相當するを以て敬意を表する爲め臨時休業
 大正十二年二月十四日故、伏見宮貞愛親王殿下の御葬儀當日につき敬吊の意を表する爲め臨時休業

○夏季休業
 大正十一年七月十一日より同九月十日まで
 ○秋季休業
 大正十一年十月十六日より二十二日まで
 ○冬季休業
 大正十一年十二月廿五日より同十二年一月九日まで
 事務は同十二月廿六日より翌一月九日まで休業

入學試験

○専門部及高等師範部入學試験期日
 △入學願書受付
 A 試験(考査)の分
 1、専門部政治經濟科、商科第一學年
 第一、二種生及専門部法律科高等師範部各科第一學年第二種生
 大正十二年三月十五日(木)より四月三日(火)正午迄
 B、銓衡の分
 口、高等師範部各科第一學年第一種生
 大正十二年三月十五日(木)より四月六日迄

ハ、専門部法律科第一學年第一種生
 大正十二年三月十五日(木)より四月十五日(日)迄
 △入學試験期日
 1、専門部政治經濟科商科第一學年第一種生及専門部法律科高等師範部各科第一學年第二種生
 大正十二年四月五日(木)より同七日(土)迄
 口、高等師範部各科第一學年第一二種生
 大正十二年四月八日(日)同九日(月)

○第一高等學院入學試験期日
 △第一高等學院(第一學年)
 入學願書受付
 自大正十二年三月十五日
 至同 同二十六日
 入學試験
 自大正十二年三月廿九日
 至同 同三十一日
 △第二高等學院(第一學年)
 入學願書受付
 自大正十二年三月十六日
 至同 同二十七日
 入學試験
 自大正十二年四月一日
 至同 同四日

得業證書授與式及始業式入學式

○得業證書授與式
 大正十一年四月九日午後三時第三十九回得業證書授與式を舉行鹽澤學長より各教科得業生九百十名に得業證書を高等像科各部終

了生一千七名に終了證書を授與す尙ほ同學長の學事報告及高田名譽學長の訓示ありたり

○始業式

大正十一年四月十日午前十時より中央校庭に於て本年度始業式を舉行鹽澤學長の式辭高田名譽學長の訓示あり正午閉式

○高等學院入學式

大正十一年四月十七日午前九時第一高等學院雨天體操場に於て第一第二高等學院入學式を行ふ中島杉山兩學院長の式辭野々村教頭松村學生係主任の訓示ありたり。

授業終了及試験

○第一第二高等學院第一學期試験

自大正十一年七月七日
至同 同十日

○第一學期の授業は大學各部専門部及び高等師範部は七月八日を以て限りとし第一第二高等學院は七月十日を以て終了す

○高等師範部の臨時試験

同部英語國語漢文科各第一學年の臨時試験を左の如く施行せり

自大正十一年十一月六日
至同 同 八日

○卒業試験

各學部別格の卒業試験を左の如く施行せり
自大正十一年十二月七日

至同 同 十三日

政治經濟學部及び法學部別格第三學年の口述試験を左の如く施行せり
自大正十一年十二月十六日
至同 同 十七日

○大學各學部未了試験

政治經濟法商學部
自大正十一年十二月十八日
至同 同 二十三日

理工學部
自大正十一年十二月四日
至同 同 九日

○第一第二高等學院第二學期試験

大正十一年十二月十九日第二學期授業終了左の如く學期試験を施行せり
自大正十一年十二月二十一日
至同 同 二十三日

○各部科授業終了並に卒業及進級試験

政治經濟、法、文、商、の各學部及び専門部政治經濟、法、商各第三學年
授業終了大正十二年二月二十一日
卒業試験
自大正十二年二月二十六日
至同 同 三月三日

同各學部科各第一、第二學年
授業終了大正十二年二月二十四日
進級試験
自大正十二年三月五日
至同 同 十四日

高等師範部各科第四學年
授業終了大正十二年三月七日
卒業試験
自大正十二年三月十二日
至同 同 十七日

同部各科第一、二、三、學年
授業終了大正十二年二月二十八日
進級試験
自大正十二年三月五日

至同 同 十四日

○文學部各科の卒業論文口頭試問
大正十二年三月十二日午前九時より今年度の文學部各科に於て卒業論文口頭試問を行へり

○理工學部授業終了及進級試験
授業終了大正十二年三月十七日
進級試験
自大正十二年三月十九日
至同 同 二十四日

明治天皇御集下賜

聖旨に基き、這般宮内大臣より、明治天皇御集一部(三卷)を下賜せられたるを以て、本大學に於ては謹んでこれを拜受し、恩賜館内貴賓室に寶藏す

英皇太子殿下奉迎送

大正十一年四月十二日英國皇太子ウエルス殿下御來朝橫濱港御上陸同午前十時四十五分東京驛御着につき本大學にては大學部専門部高等師範部第一第二高等學院の各學生及び工手學校生徒代表者は同日教職員の引率の下に宮城前所定の奉迎席に於て奉迎せり
同月二十二日同皇太子殿下御退京につき同日亦東京驛に於て奉送せり

文部省督學官の來校

大正十二年一月二十九日午後一時文部省監學官葉山萬次郎氏並に同書記官河原春作氏は岸丸岡の二屬官と共に來校教務上種々打合せを爲し圖書館及理工學部の設備と實驗等を視察せられたり

工手學校生徒監督制

工手學校の生徒取締は、從來「巡視」と稱したりしが、自今「生徒監督」と改めて其の任に當らしむること、せり

アインスタイン博士

を迎ふ

大正十一年十一月二十九日日本大學に於ては自然科學界に一新起源を劃するに至れる相對性原理の創設者たるベルリン大學教授アルベルト、アインスタイン博士を迎ひ、中央校庭故總長銅像前にて教職員並びに萬餘の學生に一場の講演を請ひ博士は教授學生諸氏の熱烈なる歡迎を謝する旨を述べ兼ねて日本の學界の意外なる進歩を観ると同時に將來世界の學界に貢獻せんことを切望せられたり

法學部主催訴訟演習

大正十一年十一月十一日午後一時第二十教室に刑訴訟演習開かれたり

第二教職員

(大正十二年三月三十一日現在)

本部

學長理事

法學博士 鹽澤昌貞

伯爵 松平 賴壽	伯爵 寺尾 元彦	伯爵 宮田 脩	伯爵 砂川 雄峻	伯爵 增田 義一	伯爵 淺野 應輔	伯爵 阪本 三郎	伯爵 鹽澤 昌貞	伯爵 松山 忠二郎	伯爵 三枝 守富	伯爵 昆田 文次郎
伯爵 平沼 淑郎	伯爵 田中 穂積	伯爵 宮田 脩	伯爵 難波 理一	伯爵 淺野 應輔	伯爵 田中 穂積	伯爵 宮田 脩	伯爵 難波 理一	伯爵 望月 嘉三郎	伯爵 金子 馬治	伯爵 山本 忠興
伯爵 阪本 三郎	伯爵 前田 多藏	伯爵 中村 芳雄	伯爵 溝口 直枝	伯爵 片山 利久	伯爵 安部 磯雄	伯爵 田中 穂積	伯爵 寺尾 元彦	伯爵 五來 欣造	伯爵 小林 行昌	伯爵 中島 半次郎
伯爵 前田 多藏	伯爵 中村 芳雄	伯爵 溝口 直枝	伯爵 片山 利久	伯爵 安部 磯雄	伯爵 田中 穂積	伯爵 寺尾 元彦	伯爵 五來 欣造	伯爵 小林 行昌	伯爵 中島 半次郎	伯爵 杉山 重義
伯爵 前田 多藏	伯爵 中村 芳雄	伯爵 溝口 直枝	伯爵 片山 利久	伯爵 安部 磯雄	伯爵 田中 穂積	伯爵 寺尾 元彦	伯爵 五來 欣造	伯爵 小林 行昌	伯爵 中島 半次郎	伯爵 杉山 重義

維持員

會長 大隈 信常	市島 謙吉	早速 整爾	渡邊 亨
金子 馬治	高田 早苗	田中 穂積	坪内 雄藏
中島 半次郎	上原 鹿造	浦邊 襄夫	山田 英太郎

伯爵 松平 賴壽	伯爵 寺尾 元彦	伯爵 宮田 脩	伯爵 砂川 雄峻	伯爵 增田 義一	伯爵 淺野 應輔	伯爵 阪本 三郎	伯爵 鹽澤 昌貞	伯爵 松山 忠二郎	伯爵 三枝 守富	伯爵 昆田 文次郎
----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	----------	-----------

◎基金管理委員

管理委員長 澁澤 榮一	原 富太郎	大橋 新太郎
內藤 久寬	村井 吉兵衛	安田 善三郎
男 畠 森村 開作		

◎名譽教職員

名譽學長 高田 早苗	名譽教授 坪内 雄藏	名譽理事 市島 謙吉
工學博士 高松 豐吉	竹内 明太郎	

◎理工學部商議員

法學博士 岩田 一郎	五十嵐 力
早稻田大學 伊地 知純正	服部 文四郎
早稻田大學 西村 眞次	本多 淺治郎
早稻田大學 德 永 重康	富田 逸二郎
早稻田大學 富 井 六造	大山 郁夫
早稻田大學 岡田 信一郎	沖 山 郁夫
早稻田大學 渡部 寅次郎	金 子 馬治
早稻田大學 神 尾 錠 吉	桂 五 十 郎
早稻田大學 勝 俣 銓 吉郎	片 上 伸
早稻田大學 橫 田 秀 雄	吉 江 喬 松

◎教授、講師、助教

法學博士 岩田 一郎	五十嵐 力
早稻田大學 伊地 知純正	服部 文四郎
早稻田大學 西村 眞次	本多 淺治郎
早稻田大學 德 永 重康	富田 逸二郎
早稻田大學 富 井 六造	大山 郁夫
早稻田大學 岡田 信一郎	沖 山 郁夫
早稻田大學 渡部 寅次郎	金 子 馬治
早稻田大學 神 尾 錠 吉	桂 五 十 郎
早稻田大學 勝 俣 銓 吉郎	片 上 伸
早稻田大學 橫 田 秀 雄	吉 江 喬 松

◎附屬早稻田第二高等學院

教授

第一高等學院長

第二高等學院

中島半次郎	野々村戒三	伊藤康安	岩本堅一	長谷川慶三郎	原隨園	二本保幾	富田逸二郎	岡次郎	渡俊治	勝俣詮吉郎	香川冬夫	吉川秀雄	吉江喬松	高見豐	民野雄平	中村仲	内ヶ崎作三郎	梅若誠太郎	窪田通治	熊崎武良温	山崎貞	矢口達	前橋孝義	松島鉦四郎	增田綱	
杉山重義	五十嵐力	飯田敏雄	石井眞峯	秦孝道	本多淺治郎	西村眞次	大久保常正	岡村千曳	川合孝太郎	影山千萬樹	片上伸	吉田源次郎	高谷實太郎	谷崎精二	中桐確太郎	中城陟	氏家謙曹	上井磯吉	久松廉吾	山口剛	山口宣	山岸光	牧野謙次郎	松永材	牧野鑑造	深澤由次郎

講師

藤野了祐	舟木重信	小林龍雄	會津常治	青柳篤恒	佐藤仁之助	定金右源二	菊池三九郎	光井武八郎	清水泰次	日高只一	鈴木貫一郎	猪俣津南雄	萩本文海	原久一郎	大濱信泉	カザリン、トーマス	吉田豊吉	高橋善吉	土橋仁之進	浦上五三郎	前原重秋	松島友次	步兵少佐	セイ、エス、ケナード	イー、エス、ケート	江間道助	早稲田大學	近藤潤治郎	古楠顯理	安部磯雄	赤松保羅	佐久間原	西條八十	宮島新三郎	繁野政瑠	島村民藏	樋口清策	藤本民雄	池田清	馬場哲哉	帆足理一郎	梶島二郎	吉田彌六	竹内潔	根本靜吉	中村萬吉	山本有造	山口一誠	マクニツキイ	エス、ケナード	フロイドル、スベルグ	デビット、セーリング	佐竹直重
------	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	-------	------	------	------	-----------	------	------	-------	-------	------	------	------	------------	-----------	------	-------	-------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	-----	------	-------	------	------	-----	------	------	------	------	--------	---------	------------	------------	------

フクトル、オフ、
フイロソフイー

法學士 佐野學
喜多壯一郎
望月信成

マスタ
オブアーツ
步兵中佐
メタクサ

步兵大尉 南晴耕

◎評議員

伯會長 松平 賴壽 副會長齋藤 和太郎

井上 要 井上 廣居 井上 辰九郎 五十嵐 力

石黒 大次郎 石澤 愛三 池田 龍一 石原 善三郎

早瀬太郎三郎 橋本 良藏 西尾 謙吉 早速 整爾

本野 博章 德永 重康 殿界 榮吉 星野 治作

大橋 誠一 小川 爲次郎 小野 駿一 伴野 賢造

沖 巖 渡邊 亨 渡邊 惣衛門 若林 成昭

金子 馬治 上遠野富之助 嘉納 虎太郎 川井 正進

片上 伸 金澤 種次郎 影近 清毅 横田 秀雄

横山 有策 田中 穂積 田手 喜市 高杉 瀧藏

高根 義人 高山 圭三 谷村 一太郎 田中 小太郎

副島 義一 坪谷 善四郎 辻村 良衛 内藤 多仲

中村 進午 中島 半次郎 永井 一孝 中桐 確太郎

中野 禮四郎 中川 末吉 中津 海知幾 中村 萬吉

中村 祐吉 中村 房次郎 並川 正 浮田 和民

内ヶ崎作三郎 上原 鹿造 浦邊 襄夫 野間 五造

栗山 資四郎 山田 英太郎 山田 甫 山本 忠興

山澤 俊夫 山本 慎平 松田 謹一郎 松平 康國

町田 忠治 牧野 謙次郎 増田 義一 松山 忠二郎

前橋 孝義 男爵 前 島 彌 松井 郡治 松澤 知司

松村 謙三 増子 喜一郎 藤井 健治郎 降旗 元太郎

福島 武之助 昆田 文次郎 小林 行昌 小林 久平

小山 松壽 小竹 文次郎 五來 欣造 寺尾 元彦

◎早稻田大學教授、講師、助教現在表 (大正十二年三月三十一日)

淺野 應輔	安部 磯雄	佐藤 正	坂本 三
崎山 刀太郎	菊池 三九	北澤 新次郎	遊佐 慶夫
宮田 脩	三宅 雄二郎	水野 正己	南方 常楠
鹽澤 昌貞	篠原 彌吉	平沼 淑郎	平田 讓衛
久富 久吉	廣井 一	森田 卓爾	森 盛一郎
關 和知	砂川 雄峻	杉山 重義	杉田 駿
杉坂 源清	鈴木 茂雄		

學科名稱	教授	講師	師	助教	教授	計
政治經濟學部	二〇		一五			三五
法學部	一二		一八			三〇
文學部	二二		六一			八三
商學部	一六		一五			三一
理工學部	二三		四六		二四	九三
專門部政治經濟科	一五		一三			二八
同法律科	八		一六			二四
同商科	七		二一			二八
高等師範部	一四		三一			四五
第一高等學院	七一		三六			一〇七
第二高等學院	五〇		三三			八三
附屬工手學校			一一二			一一二
計	二五八		四一七		二四	六九九

備考 本表教授助教及講師數は延人員なり

◎早稻田大學職員現在表 (大正十二年三月三十一日)

部課	職名	職員	事務員	助手及電	手交換	話生	監督及	職	工給	仕小	使	計
學長室	學長	理事	四一									五

必修科目	選擇科目	隨意科目
憲法 民法 刑法 外國法(獨法、英法、法佛、法) 經濟原論	國際公法 社會學	特別講義
民法 商法 民事訴訟法 刑事訴訟法 外國法(獨法、英法、法佛、法) 法學實習	羅馬法 行政法	特別講義
商法 民事訴訟法 法律哲學 外國法(獨法、英法、法佛、法) 法學實習	破產法 國際私法 國際制私法 國際私法史	特別講義

一 法學部ニ於ケル選擇科目ハ各學年ヲ通シテ四科目トス
 一 外國法ハ獨法英法及佛法中其一ヲ選擇セシム

文學部 哲學科

東洋哲學專攻

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	心理學 西洋哲學史(支那) 哲學概論 哲學研究	倫理學 西洋哲學史 美東洋哲學(支那) 東洋哲學(支那) 文學研究	社會學 哲學通論 東洋哲學(支那) 卒業論
隨意科目	第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

西洋哲學專攻

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	心理學 西洋哲學史(支那) 倫理學 西洋哲學史 社會學通論	倫理學 西洋哲學史 社會學通論	社會學通論
隨意科目	第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

隨意科目	必修科目
第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	科學概論 哲學研究 文藝思想史 西洋哲學(心理學) 哲學研究 文藝思想史 西洋哲學(心理學) 卒業論文
第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四
第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

社會哲學專攻

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	心理學 西洋哲學史(支那) 倫理學 西洋哲學史 社會學通論	倫理學 西洋哲學史 社會學通論	社會學通論
隨意科目	第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

哲學科選擇科目

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	論理學 宗敎史 近代藝術研究 文藝思想史 國際法 支那文學 露西亞文學	宗敎史 國制史 經濟思想史 文藝思想史 佛典研究	教育史 人類學 東洋史 經濟思想史 文藝思想史 佛蘭西文學
隨意科目	第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

國文學專攻

科目/學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目	文藝思想史 西洋哲學史 國文學概論 國文學研究	文藝思想史 西洋哲學史 國文學研究	國文學研究
隨意科目	第二外國語(獨逸語、佛蘭西語) 四	第二外國語(同上) 四	第二外國語(同上) 四

隨意科目	第二外國語(獨逸語) 露西亞語	四
第二外國語(同上)	四	四
第二外國語(同上)	四	四

支那文學專攻

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		文藝思想史 二 西洋哲學史 三 支那文學論概 二 支那文學史 二 支那文學史 二 支那文學史 二	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 支那文學史 二 支那文學史 二 支那文學史 二 支那文學史 二	倫理學 二 美學 二 支那文學史 二 支那文學史 二 支那文學史 二 支那文學史 二
隨意科目		第二外國語(獨逸語) 露西亞語	第二外國語(同上)	第二外國語(同上)
		四	四	四

英文學專攻

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		文藝思想史 二 西洋哲學史 三 英文學概論 二 英文學概論 二 英文學(英作文) 二 英語學(英作文) 二	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 英文學(英作文) 二 英文學(英作文) 二 英語學(英作文) 二 英語學(英作文) 二	倫理學 二 美學 二 英文學 二 英文學 二 英文學 二 英文學 二
隨意科目		第二外國語(獨逸語) 露西亞語	第二外國語(同上)	第二外國語(同上)
		四	四	四

佛蘭西文學專攻

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		文藝思想史 二 西洋哲學史 三 佛蘭西文學概論 二 佛蘭西文學概論 二 佛蘭西文學研究 六 佛蘭西文學研究 四	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 佛蘭西文學史 二 佛蘭西文學史 二 佛蘭西文學史 二 佛蘭西文學史 二	倫理學 二 美學 二 佛蘭西文學史 二 佛蘭西文學史 二 佛蘭西文學史 二 佛蘭西文學史 二
隨意科目		第二外國語(獨逸語) 露西亞語	第二外國語(同上)	第二外國語(同上)
		四	四	四

獨逸文學專攻

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		文藝思想史 二 西洋哲學史 三 獨逸文學概論 二 獨逸文學研究 六 獨逸文學研究 四	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 獨逸文學史 二 獨逸文學史 二 獨逸文學史 二 獨逸文學史 二	倫理學 二 美學 二 獨逸文學史 二 獨逸文學史 二 獨逸文學史 二 獨逸文學史 二
隨意科目		第二外國語(獨逸語) 佛蘭西語 露西亞語	第二外國語(同上)	第二外國語(同上)
		四	四	四

露西亞文學專攻

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
必修科目		文藝思想史 二 西洋哲學史 三 露西亞文學概論 二 露西亞文學研究 六 露西亞文學研究 四	文藝思想史 二 西洋哲學史 二 露西亞文學史 二 露西亞文學史 二 露西亞文學史 二 露西亞文學史 二	倫理學 二 美學 二 露西亞文學史 二 露西亞文學史 二 露西亞文學史 二 露西亞文學史 二
隨意科目		第二外國語(獨逸語) 佛蘭西語 露西亞語	第二外國語(同上)	第二外國語(同上)
		四	四	四

文學科選擇科目

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
西洋哲學		二	二	二
支那哲學		二	二	二
教育學		二	二	二
近世社會問題		二	二	二
文藝批評研究		二	二	二
近代藝術研究		二	二	二
國史		二	二	二
法制史		二	二	二
印度哲學		二	二	二
教育學及教授法		二	二	二
演劇研究		二	二	二
經濟學		二	二	二
佛典研究		二	二	二
宗教學		二	二	二
美術史		二	二	二
國文		二	二	二
文明史		二	二	二

史學科

科目	學年	第一學年	第二學年	第三學年
支那哲學		二	二	二
教育學		二	二	二
近世社會問題		二	二	二
文藝批評研究		二	二	二
近代藝術研究		二	二	二
國史		二	二	二
法制史		二	二	二
印度哲學		二	二	二
教育學及教授法		二	二	二
演劇研究		二	二	二
經濟學		二	二	二
佛典研究		二	二	二
宗教學		二	二	二
美術史		二	二	二
國文		二	二	二
文明史		二	二	二

科目 學年	第一學年 每週授 業時數	第二學年 每週授 業時數	第三學年 每週授 業時數
	第一學年 每週授 業時數	第二學年 每週授 業時數	第三學年 每週授 業時數

商學部	
(一) 文學部各學科ニ於ル選擇科目ハ各學年二科目トス 一、各學年ノ選擇科目ハ每年ノ初ニ之ヲ定ム 一、文學部學生ハ同一學年ニ於ル其所屬各分科ノ必修科目ヲ自己ノ選擇科目ト爲スヲ得 一、第二外國語ハ前掲科目中一ヲ選擇セシム 一、文學部學生ニシテ教員志望者ニハ所定科目ノ特ニ左記科目ヲ必修セシム (一) 修身、英語(佛蘭西語又ハ獨逸語)教員志望者ニハ 教育學、教授法、英語(佛蘭西語又ハ獨逸語)實際教授 (二) 修身、國語及漢文教員志望者ニハ 教育學、教授法、國語及漢文實際教授 (三) 歷史教員志望者ニハ 教育學、教授法、歷史實際教授	史學科選擇科目 選擇科目 心理學 二 西洋哲學 二 西語學 二 英語學 二 美術史 二 經濟史 二 統計學 二 支那哲學 二 佛蘭西文學 二 支那郡文 二 教育史 二 宗教學 二 近代藝術研究 二 外交史 二 外國社會問題 二 近世社會學 二 英國文學 二 露西亞文學 二 印度哲學 二 教育學及教授法 二 人類學 二 法制史 二 國際法 二 國文 二 獨逸思想 二 文藝史 二

必修科目	隨意科目
西洋哲學史 三 史學概論 三 國史 三 東洋史 二 西文 三 西洋哲學史 二 國史 三 東洋史 二 西文 三 社會學 二 倫理學 二	第二外國語(佛蘭西語、獨逸語、露西亞語) 四 第二外國語(同上) 四 第二外國語(同上) 四

電氣工學科	
必修科目 第一學年 電氣學及磁氣學 五 第二學年 電力機械學 六 第三學年 電氣機械學 二	隨意科目 外國語 四 外國語 四 外國語 四 計畫及製圖卒業論文 一 工場管理法 五

理工學部	
機械工學科	
必修科目 第一學年 數學 三 材料強弱學 四 水力学學 二 電氣工學 一 熱機關(汽機、汽鍋) 三 製造冶金學 二 工場設計法 二 機械設計 一 熱力學 二 計畫及製圖 九 物理實驗 三 工場實習 六	隨意科目 外國語 四 外國語 四 外國語 四 計畫及製圖卒業論文 一 工場管理法 五

必修科目	隨意科目
經濟學原理 三 經濟史 二 商業地理 二 簿記學 二 商業簿記(爲替マテ) 三 簿記學 二 商業簿記 二 貨幣及銀行論 三 商業經濟學 二 統計學 二 社會學 二 統計學 二 商業研究 二 保險學 二	第二外國語 四 第二外國語 四 第二外國語 四 第二外國語 四

科目/學年		探鑛冶金學科		探鑛冶金學科	
必修科目	第一學年 每週數授	探鑛學	探鑛學	探鑛學	探鑛學
建築構造學	第一學年 每週數授	地質學	地質學	地質學	地質學
建築構造學演習	第一學年 每週數授	鑛物學	鑛物學	鑛物學	鑛物學
建築構造法	第一學年 每週數授	鑛山測量	鑛山測量	鑛山測量	鑛山測量
鐵骨構造	第二學年 每週數授	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習
鐵筋コンクリート	第二學年 每週數授	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習
電機大意	第二學年 每週數授	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習
建築法規	第三學年 每週數授	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習
建築法及經濟	第三學年 每週數授	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習
構造學演習及設計	第三學年 每週數授	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習	鑛山測量實習

科目/學年		第一高等學院		應用化學科	
必修科目	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
建築材料	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
建築材料實驗	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
建築骨構造	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
西洋建築歷史	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
東洋建築歷史	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
住宅建築	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
透視畫及規矩	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
測量及實習	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
設計製圖	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
外國書研究	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
夏季實習(課題)	第一學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
建築意匠	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
工事實施法	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
工事實施法實習	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
西洋建築歷史	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
裝飾畫	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
裝飾畫	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
設計製圖	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
外國書研究	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
夏季實習(課題)	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
特別講義	第二學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
建築意匠	第三學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
都市計畫	第三學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
建築理學	第三學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
建築設備	第三學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學
特別講義	第三學年 每週數授	物理化學	物理化學	物理化學	物理化學

計	體自數法心理哲地歴第第國修 然制理學學理學史語語文身 操學學濟理說理史語語文身				
(四)	三二二	二三四	二三四	二三四	二三四
(二)	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二
(四)	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二

一、第一外國語ハ英語トス
 第二外國語ハ獨逸語、佛蘭西語、露西亞語又ハ支那語トシ之ヲ隨意科目トス
 但シ早稻田大學法學部ノ科目中外國法ニ就テ獨逸又ハ佛法ノ選擇志望者ニハ獨逸語若クハ佛
 蘭西語獨逸語ヲ第一外國語トシ又文學科中佛蘭西文學、獨逸文學若クハ露西亞文學ノ專攻志
 望者ニハ佛蘭西語、獨逸語若クハ露西亞語ヲ第一外國語トシ(第二學年ヨリ之ヲ課ス)其他ノ
 外國語ヲ第二外國語トス每週授業時數左ノ如シ

計	第一外國語 第二外國語	第一學年 第二學年 第三學年	第一學年 第二學年 第三學年	第一學年 第二學年 第三學年	第一學年 第二學年 第三學年
(四)	(四)	(四)	(四)	(四)	(四)
(三)	(三)	(三)	(三)	(三)	(三)
(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)

理科

計	植物及動物 化學 物理學 第一外國語 第二外國語 第三外國語 國語 漢文 修身	第一學年 第二學年 第三學年	第一學年 第二學年 第三學年	第一學年 第二學年 第三學年	第一學年 第二學年 第三學年
二	四(四)八四一	三三六(四)六二一	三三六(四)六二一	三三六(四)六二一	三三六(四)六二一
實講實講 驗義驗義 二二三三 五五六					

計	體圖法心礦 制及及物 畫濟理地 操畫濟理質				
(四)	三二二	二二二	二二二	二二二	二二二
(二)	二二三	二二三	二二三	二二三	二二三
(四)	二二三	二二三	二二三	二二三	二二三

第二高等學院
文科

一、第一外國語ハ英語トス
 第二外國語ハ獨逸語、佛蘭西語、露西亞語又ハ支那語トシ之ヲ隨意科目トス

計	體自法心哲 然制理學 及及及 科經論 操學濟理	第一學年 第二學年	第一學年 第二學年	第一學年 第二學年	第一學年 第二學年
(四)	二二三	二二三	二二三	二二三	二二三
(二)	二二三	二二三	二二三	二二三	二二三
(四)	二二三	二二三	二二三	二二三	二二三

一、第一及第二外國語ニ關スル規定ハ第一高等學院文科ニ同シ
 一、第二外國語ヲ第一外國語トスル場合ニ於ケル每週授業時數左ノ如シ

計	第一外國語 第二外國語 第三外國語 國語 漢文 修身	第一學年 第二學年	第一學年 第二學年	第一學年 第二學年	第一學年 第二學年
(三)	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
(一)	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
(三)	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三

●早稻田大學卒業生府縣別 (大正十二年度調)

府縣別	總數	內																								
		大學部					專門部					高等部														
山形縣	三三九	政治經濟學部	法學部	文學部	商學部	工部	政治經濟學部	法學部	文學部	商學部	工部	政治經濟學部	法學部	文學部	商學部	工部	政治經濟學部	法學部	文學部	商學部	工部	政治經濟學部	法學部	文學部	商學部	工部
青森縣	一八四																									
巖手縣	一七〇																									
福島縣	三八六																									
宮城縣	二九六																									
長野縣	五九六																									
岐阜縣	三三八																									
滋賀縣	二二六																									
山梨縣	三〇五																									
靜岡縣	六三六																									
愛知縣	六四九																									
三重縣	三八一																									
奈良縣	一六七																									
栃木縣	三九八																									
茨城縣	四四八																									
千葉縣	四九三																									
群馬縣	三三三																									
埼玉縣	四六二																									
新潟縣	八〇六																									
長崎縣	三七二																									
兵庫縣	六一〇																									
神奈川縣	四四四																									
京都府	三三六																									
大阪府	五六八																									
東京府	二,三三五																									

早稻田大學報告(大正十二年十二月)

秋田縣	福井縣	石川縣	富山縣	鳥取縣	島根縣	岡山縣	廣島縣	山口縣	和歌山縣	德島縣	香川縣	愛媛縣	高知縣	福岡縣	大分縣	佐賀縣	熊本縣	宮崎縣	鹿兒島縣	北海道	神繩縣	臺灣	朝鮮	支那	米國	瑞典	小計	合計
二六〇	二四六	二四八	三〇二	二〇六	二四〇	六三三	五三一	四五六	二五三	一五三	三〇〇	三四二	二五〇	七二七	三三三	四二六	三四七	一五一	三四一	五五一	六一	一六	一〇八	一、二七八	一	一	一七四	三〇、六〇〇
三	四	二	三	一		五	九	六	二	一	三	四	一	一	五	六	二	二	五	一			二			六七	七八	
一	一	一	一	一			五	一	一		二	一		二	三	一	三	一	二	一						八一一	八一一	
九	八	一	二	九		七	二五	一〇	一〇	二	三	二五	七	七	七	一六	二一	六	一〇	二七	三	一				三五六	三五六	
二	五	五	四	四	六	六	一二	八	六	六	三	三	七	一六	九	四	七	七	七	八						一、四二四	一、四二四	
二四	三三	一八	二二	二二	一五	三三	二〇	三〇	一六	六	二六	二二	一五	六八	二四	二四	三三	一〇	一五	二四	七	三	一一	六四	一	五七〇	五七〇	
一一	七	一〇	一四	四	六	三	三	二	六	五	一四	一六	六	二四	一一	一一	一〇	五	三	七	二	二	二	二	七	三三一	三三一	
一五	二八	一七	二六	二二	二七	五〇	一五	三〇	三〇	一〇	二四	二八	一六	四一	一三	一〇	一六	一三	一六	一〇	八	一一	八	七	三五	二五九	二五九	
三三	五六	六七	七四	四八	五六	二九	八四	三三	三〇	三	八四	九四	六七	一五六	六三	一〇七	六三	四三	六三	一〇	二二	三	三	三	八	一、八八四	一、八八四	
二〇	九	二六	二六	一五	一四	二九	八	三七	三〇	八	一六	一六	一〇	五六	七六	三三	八	七	三	三	三	一	七六	五三四	一	〇四六	〇四六	
七五	三六	三八	五五	四〇	三〇	一〇七	八八	七九	七二	二八	三一	三五	五五	一五七	七六	七七	八三	二六	六九	六八	一四	八	七六	八	八	一、三三六	一、三三六	
三一	三〇	二六	三七	二一	二一	五九	六四	六四	二二	二二	三九	三二	二二	六二	五〇	四九	四一	一三	二〇	二五	二五	一	一一	一一	八	三八九	三八九	
九	八	一	四	五	四	五	七	六	一	六	二	二	一	二	七	一	八	六	八	二	一					四七四	四七四	
一	三	二	二	四	二	二	二	二	三	一	一	一	一	六	五	四	六	六	六	一	八	二				二二四	二二四	
四	七	七	三	二	八	一〇	九	九	三	一	八	五	四	六	五	五	四	三	一	一	三	一		一〇		四七	四七	
四	七	四	三	五	五	八	九	九	一	五	五	八	四	二	二	二	九	二	六	六	六	一				三四八	三四八	
二	一	一	一	一	一	三	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一					三二	三二	
二	二	三	三	六	二	二	四	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一					二九	二九	
八	八	三	五	六	六	一八	八	八	六	三	九	六	三	一六	一〇	一四	一四	一四	一四	六	一					三八九	三八九	
二	三	四	三	六	三	五	七	七	五	三	九	六	三	一七	四	四	四	四	五	八	七					三七七	三七七	
八	六	四	八	三	三	七	五	五	一	三	七	三	一〇	一三	一三	一三	一三	一三	五	六	七					四三九	四三九	
八	六	四	八	三	三	七	五	五	一	三	七	三	一〇	一三	一三	一三	一三	一三	五	六	七					一五〇	一五〇	
二	三	四	三	六	三	七	五	五	一	三	七	六	三	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	五	六	七					七二	七二	
八	六	四	八	三	三	七	五	五	一	三	七	六	三	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	五	六	七					五八	五八	
二	三	四	三	六	三	七	五	五	一	三	七	六	三	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	五	六	七					八〇	八〇	
八	六	四	八	三	三	七	五	五	一	三	七	六	三	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	五	六	七					四七	四七	

第六會計

大正十一年度財產目錄 (大正十二年三月三十一日)

資產		負債	
科目	金額	科目	金額
未收基金	三八〇,七三五.〇二〇	預備金	二五二,五〇一.二五〇
校地	七三三,八四三.九四二	未拂金	二,六六五,八四九
建物	一,二九〇,四三九.七九四		
機械工具及標本	二二四,六二七.五三四		
什器	一八六,七五四.六八五		
圖書	二七八,三〇五.九〇九		
有價證券	三六九,二四八.〇二一		
年金積立定期預金	七二,八〇〇.四一〇		
年金積立有價證券	五,〇〇〇.〇〇〇		
購買組合出資金	五一三.五〇〇		
假支出金	八二,一一一.一六四		
所有土地	二一七,七五八.八三〇		
振替貯金	一,七三〇.二二七		
銀行預金及現金	二五九,一一二.五九四		
合計	四,〇八三,〇〇一.六三〇	合計	二五五,一六七.〇九九

大正十一年度貸借對照表 (大正十二年三月三十一日)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
未收基金	三八〇,七三五.〇二〇	基金部收益金	二,六四九,七三一.四一九
校地	七三三,八四三.九四二	經常部受入金	二三四,四六五.三五六
建物	一,二九〇,四三九.七九四	特定寄贈金	一七九,五三三.九一五
機械工具及標本	二二四,六二七.五三四	贊助會殘高	一〇四,八六七.五四五
什器	一八六,七五四.六八五	寄贈有價證券	四四,二五〇.〇〇〇
圖書	二七八,三〇五.九〇九	教職員年金基金	七七,八〇〇.四一〇
有價證券	三六九,二四八.〇二一		
年金積立定期預金	七二,八〇〇.四一〇		
年金積立有價證券	五,〇〇〇.〇〇〇		
購買組合出資金	五一三.五〇〇		
假支出金	八二,一一一.一六四		
所有土地	二一七,七五八.八三〇		
振替貯金	一,七三〇.二二七		
銀行預金及現金	二五九,一一二.五九四		
合計	四,〇八三,〇〇一.六三〇	合計	四,〇八三,〇〇一.六三〇

大正十一年度經常部收支計算表 (自大正十一年四月一日起至大正十二年三月三十一日)	
科目	金額
年金積立定期預金	七二,八〇〇.四一〇
年金積立有價證券	五,〇〇〇.〇〇〇
購買組合出資金	五一三.五〇〇
假支出金	八二,一一一.一六四
所有土地	二一七,七五八.八三〇
有價證券	一〇八,〇五七.〇〇〇
振替貯金	一,七三〇.二二七
銀行預金及現金	二五九,一一二.五九四
合計	四,〇八三,〇〇一.六三〇
體育會積立金	二〇,〇〇〇.〇〇〇
預備金	二五二,五〇一.二五〇
未拂金	二,六六五,八四九
本年度剩餘金	三,六六九,三六〇
合計	四,〇八三,〇〇一.六三〇

大正十一年度經常部收支計算表 (自大正十一年四月一日起至大正十二年三月三十一日)

收入		支出	
科目	金額	科目	金額
學費	九六一,三一四.三六〇	職員給	五〇三,一五六.五四〇
入學料	二七,二五九.〇〇〇	教員給	一三一,一四三.二七〇
試驗料	三九,七七一.〇〇〇	小使給仕職工給	三二,四五六.一九〇
實驗費	二八,一一八.〇〇〇	雜勞手當	一八,〇四三.〇三〇
株式配當金	一一,五六二.五〇〇	慰勞費	六八,〇四一.三二〇
受入利子	二〇,二六六.一二〇	交際費	五〇〇.〇〇〇
海外留學費寄附金	四,二〇〇.〇〇〇	旅費	一,五八四.六八〇
雜收入	二,九二九.三六〇	給與被服費	三,〇九二.七六〇
合計	一,〇九六,四二二.三四〇	實驗實習費	四八,八〇五.九八〇
消耗品費	二六,八九九.四二〇		
點燈費	六,八一二.九四〇		
薪炭費	一四,二一六.一〇〇		
通信費	八,一〇一.二四〇		
乘車費	三,五四九.七三〇		
圖書費	一七,七三七.六〇〇		
器具費	八,四五三.七八〇		
火災保險料	九,四二九.七九〇		
敷地料	三四一.四六〇		
衛生費	二,二七六.五二〇		
諸生稅	四〇五.七二〇		
廣告費	三一,七四四.〇九〇		
營業費	七,一三五.〇六〇		
集會費	七,二八三.三九〇		
廣集費	二,七八四.二七〇		
得業式費	一,五二六.三五〇		
學會補助費	一〇,〇〇〇.〇〇〇		
體育會補助費	七,一二四.九一〇		
校友會補助費	一,〇〇〇.〇〇〇		
永樂俱樂部補助費	一,〇〇〇.〇〇〇		
基金募集費	一,〇三五.八〇〇		
海外留學生費	三八,六三三.八九〇		
教職員年金積立金	一〇,六六一.一二〇		
雜費	一六,六一七.四六〇		
臨時費	三八,〇七〇.六五〇		

豫備金 一〇、四七四・八九〇
大隈會館費 三、四〇七・〇三〇

合計 一、〇九二、七五〇・九八〇
差引剩餘金 三、六六九・三六〇

第七 圖書館報告

大正拾壹年度(自大正十二年四月一日至大正十二年三月三十一日)

(一) 圖書

總數 五五、〇七部 二四四、六四冊

和漢書 五五、六〇部 一八八、二七冊
洋書 三九、二七部 五、三六八冊

一、本館藏書

八九、六七部 二七、一七冊

內 和漢書 五、〇三〇部 一六、五八冊
洋書 三、六四三部 五、八二冊

右之內本年度中增加 四、〇九八部 八、四〇〇冊

內 和漢書 一、四九二部 四、七八七冊
洋書 二、六〇七部 三、六三三冊

二、寄託圖書

五、四一五部 二七、四九四冊

內 和漢書 四、九三〇部 二六、九一八冊
洋書 四、八五〇部 五、七七冊

(二) 標本

一、歷史地理科參考品

總數 二、四五〇點
本年度增加 〇

二、商科參考品

總數 一、七五種 四、三九點

本年度增加 〇

(三) 本年度內圖書標本

購入寄贈別

一、購入圖書

二、〇八部 四、三六〇冊

內 和漢書 四三九部 二、〇八五冊
洋書 一、五七〇部 二、一五九冊

二、寄贈圖書

二、〇八九部 四、三〇〇冊

內 和漢書 一、〇五三〇部 二、七〇三冊
洋書 一、〇三七部 一、四二一冊

三、歷史地理科參考品

購入 〇
寄贈 〇

四、商科參考品

購入 〇
寄贈 〇

(四) 本年度內閱覽人員並貸出圖書數

一、壹々年總計 閱館日數 三五五日
閱覽人員 九、九〇三人
貸出圖書數 一八、七五冊

二、一日平均 閱覽人員 三七人
貸出圖書數 五八〇冊

(五) 最近五々年比較

一、增加圖書年々比較

年 度	圖書增加	前年度比較	購 入	寄 贈	前年度比較
大正八年	七、五九九	增	四、七六九	二、八三〇	購增 二、一五〇
同 九 年 (第一次)	六、六四二	減	三、四五九	三、一八三	購減 三、九〇二
同 十 年 (第二次)	一、〇二二	增	八、六二二	二、四〇〇	購增 五、一六三
同 十一年 (六月-三月)	五、六二五	減	三、五九四	二、〇三一	購減 五、〇二八
同 十一年	八、四〇〇	增	四、二八〇	四、一二〇	購增 六、八六六

二、洋書之部

年 度	增加總數	前年度比較	購 入	寄 贈	前年度比較
大正八年	三、〇〇二	增	一、六七六	一、三二六	購增 一、八八八
同 九 年 (第一次)	三、九二九	增	二、五九八	一、三三一	購增 一、〇九五
同 十 年 (第二次)	三、四七一	減	三、二七五	一九六	購增 六、七七五
同 十一年 (六月-三月)	三、七八九	增	二、六九三	一、〇九六	購減 一、三五五
同 十一年	三、六一三	減	二、一九五	一、四一八	購減 四、九〇〇

三、和漢書之部

年 度	增加總數	前年度比較	購 入	寄 贈	前年度比較
大正八年	四、五九七	增	三、〇九三	一、五〇四	購增 一、九六二
同 九 年 (第一次)	二、七一一	減	八六一	一、八五二	購減 二、二三二
同 十 年 (第二次)	七、五五一	增	五、三四七	二、二〇四	購增 四、四八六
同 十一年 (六月-三月)	一、八三六	減	九〇一	九三五	購減 四、四四六
同 十一年	四、七八七	增	二、〇八五	二、七〇二	購增 一、一八四

傳講演募集に際し各其郷里に於て其準備と募集に盡力し或は又種々なる催を以て收益を得之れを寄附する等其活動其盡力實に著大なるものありたり。

○集會及揭示宣傳ビラ等 科外講演其他學會に關しては本學年間特に記すべき事故の發生せしものなし。

學生の集會にして本學年中特に多かりしは縣人會及同窓會にして故總長記念事業に對し之れが應援の必要ありし爲め從來縣人會の設立なかりし府縣の學生も之を組織して今や殆ど各府縣に其設立を見るに至れり。

○一〇件なり。

○警備 冬期火鉢ストーブ煙突等火氣取締の爲め學生課員は特に居残り勤務を爲し各事務室及講師室等の火氣の始末を監督することは例年の通り實行し失體なきを得たり。

○遺留品の取扱 本年度に於ける遺留品の届出點數は二百五十四點なり。

○衛生事項 昨年十月中虎列刺病流行の兆あり之れが豫防警戒の必要を認め豫防心得條項を揭示し學生一般に注意し又校醫をして豫防注射を施行せしめたり。

豫防注射は教職員及學生の希望者に施行し實費として一人金拾五錢を徴收せり學生の注射を受けたるもの二百九十五人なり。

本大學各便所の構造も不完全にして之が掃除及消毒に不充分なるものあり之れが改造は衛生上の急務なりと認む。

本學年間校内に傳染病患者等の發生せしものなし。

○雜件 本學年間學生に配布せし學報總數十萬六千六百五十二部にして平均八千二百四部なり又追悼號及早稻田の今昔を各學生に配布せり其部數七千部に達せり。
鐵道乘車割引證を交付せし總數十四萬九千七百二十枚なり。

第九 科外講義

本年度中開催したる科外講演及特別講義左の如し。

大正十一年四月廿七日

米國の經濟界と戦後の調節

三井物産會社 小林 直氏
ニューヨーク支店長

大正十一年五月五日

工業上より觀たる歐米漫遊所感

理學博士 德 永 康氏

大正十一年五月十二日

最近の支那の情勢

法學博士 吉 野 作 造氏

大正十一年五月十九日

獨逸憲法の民法觀

法學博士 穂 積 重 遠氏

大正十一年五月廿六日

學生と明日の世界

英國學生基督青年會主事 アール、
オー、ホール氏

大正十一年六月二日

南方支那の文化運動

講 師 清 水 泰 次氏

大正十一年六月八日

歐米に於ける最近の勞働運動

協同會理事 永 井 享氏

大正十一年六月廿三日

聚落地理概論

講 師 小田内通敏氏
大正十一年六月廿八日
日本三百年間に於ける「アングロサクソン」民族の功績

教 授 志 賀 重 昂氏
大正十一年九月廿五日

明治政史梗概

第一回 大政返上 皇政復古
島 田 三 郎氏

大正十一年十月六日

第二回 封建廢止

同

大正十一年十月十三日

第三回 遣外使節

同

大正十一年十月廿六日

第四回 西南戰爭 征韓論

同

大正十一年十一月三日

第五回 民選議院

同

大正十一年十一月十日

第六回 開拓使事件 國會開設決定

同

大正十一年十一月十七日

第七回

同

大正十一年十一月廿四日

第八回

同

大正十一年十二月一日

第九回

大正十一年十二月八日

第十回

同

大正十二年一月十九日

第十一回 對支戰爭内容

同

大正十一年十月廿三日、廿五日、廿七日、廿八日、大社會とテクノロジ

同

大正十一年十一月一日

如何にして戰爭を修熄せしむべきか
ビーマット博士

同

大正十一年十一月二日

太平洋の樂園
ジヨルダン博士

同

大正十二年一月二十三日

米國の大學生活に就いて
エー、エル、
デイン博士

同

大正十二年一月二十四日

現代の宇宙觀
米國ロシントン
大學教授 ガウエン博士

同

大正十二年二月一日

羅馬法皇朝使節派遣の學術的批判
京都帝國大學教授
理 學 博 士 新 城 新 藏氏

同

大正十二年二月六日

新聞事業の現實と理想
法學博士 吉 野 作 造氏

同

大正十二年二月十六日

獨逸西南學派の價值問題に就て
大阪朝日新聞社理事
法 學 博 士 下 村 宏氏

同

大正十二年二月二十日

北 吟 吉氏

太平洋に於ける日本の發展

教授 服部文四郎氏

大正十二年二月二十三日

日米問題の過去現在及未來

神學博士 シドニー
ギューリック氏

文學部公開講演

大正十一年十月二十八日

江戸時代の古學復興の中心思想

講師 窪田通治氏

人生概念及び社會概念の現代に於ける一構成

教授 杉森孝次郎氏

同 十二月四日

太平洋崇拜復合文化

教授 西村眞次氏

文藝上の國民主義と國際主義

教授 吉江喬松氏

同 十一月十一日

ソキエツトロシア文學

教授 片上伸氏

永遠性の現實感と文藝

講師 吉田源次郎氏

商學部科外講義

大正十一年十月十五日より三回

カントとアダム、スミス

石塚鍊慧氏

大正十一年十月十一日より三回

商品學に就て

坂口武之助氏

專門部商科第三學年

特別講義

大正十一年六月二十日より十回

商品學に關する特別講義

坂口武之助氏

大正十一年九月三日より四回

經濟學說の變遷

教授 北澤新次郎氏

理工學部主催特別講演

大正十一年下旬より十二月に亙り

電力の法令並に管理

工學博士 澁澤元一氏

送電線の計算に就て

米國イー、ジー會社 ルイズ氏

請負制度の變遷

三菱合資會社技師 山下壽郎氏

大正十二年二月二十三日

鐵と鋼の組成に就て

理學博士 本多光太郎氏

歐米に於ける鐵工業に就て

工學博士 依國一氏

國際聯盟協會主催

特別講演

大正十一年十月十七日

國際聯盟表裏觀

法學博士 林毅陸氏

國際關係の趨勢

法學博士 山田三良氏

第十體育會

水上運動會

大正十一年五月十四日午前八時より隅田川に於て水上運動會を催せり

陸上運動會

大正十一年十月十七日午前八時陸上大運動會を催せり

高等學院陸上運動會

大正十一年六月十一日第一高等學院運動場に於て第一第二高等學院學生主催の運動會を催せり

端艇部

大正十一年は我端艇部にとつては改造の年であつた、端艇部の覺醒の時代であつた。過去三年間の連敗の歴史は返つて我端艇部に大なる覺醒の動機を與へたのであつた。連年の慘敗の原因が早大全力の不統一にあること又從來の分科競漕が各科選手間の軋轢の根原なることを覺り該競漕を一時中止した其他あらゆる點で改造が行はれひたすら早大全力の集中に苦辛したのであつた。

斯くして水上運動會は天氣晴明なる五月十五日に開かれ競漕回数二十回、出漕人員四百名と言ふ盛會であつた。中にも對校レース選手を試漕は我端艇部の威力を示すに十分であつた。

五月下旬秋十月に行はる、日本漕艇協會對校競漕選手の發表を見七月一日を期しいよいよ

よ猛烈なる第一期練習は川崎六郷川に於て二週間行はる、こと、なつた。二階堂、喜多兩氏の熱心なる指導の下に選手は川崎社會館に勞動者と寢食を共にし、ひたすら勝利に向つて猛練習を累ねたのであつた。

同月十五日一先ず第一期練習は切上けること、し競艇は品川灣を縦斷して回航されたのであつたが丁度當日は風波強く大森沖にさし掛つた時艇は沈没の厄に逢つた。選手一同は寒氣と波浪の爲め危檢に瀕したが幸に援の舟の來るに及んで事なきを得た。然し競艇は沈没の際大破したので大森海岸に一先づ上陸したのであつた。

八月二十日選手一同は艇庫に集合の上持力を養ふ目的で銚子遠漕を試みた。歸京するや直に再び六郷川に第二期練習は開始された。こ、一月間の猛練習は選手の技倆に一段鋭さを増したのであつた。

かくして自信と燃るが如き勇氣とを懷いて九月下旬いよいよ本舞臺なる墨田に練習を移すと同時に掉尾の猛練習は開始せられたのであつた。

十月二十二日、二十三日は待ちに待つた決勝の日である、兩日共快晴無風のレース日和墨堤二哩間は人垣を築いた。

これより曩三日前に豫選組合の抽籤の結果我々は商大、拓大と戦はねばならなかつたのである。

商大は昨年優勝校、我も許し人も又許す漕艇道の權化である。かくして十一時下江二哩のスタートは切られた。約二艇身半の差を以つて強敵商大を屠つた。

翌二十三日は準決勝の日である、我校は昨日日大を十艇身の大差で破つた高師と組み愈決勝戦に参加することとなつた。

午後四時いよいよ隅田の河精帝大と高工とを一蹴した外語校と決勝優勝した。

この日恐れ多くも伏見、山階兩宮殿下には極名艦艇に召され親しく決勝レースを御覽せられた。

かくして墨田の覇権を握つたる我部はいつまでも勝利に酔つては居なかつた、屢々各科委員會を開いて端艇部の内容充實に努力したのであつた、越へて十二年に入るや三月早くも對校選手の見四月より練習を開始する事となつたのである。

庭球部

早稲田にも硬球が植ゑられてから第二年度の春を迎へた。そして先輩諸兄の指導と選手の奮闘によつて、我庭球部も芽を出す事を得た先づ春のリーグ戦に優勝し、それから九月に開かれた全日本庭球選手権競技大會及び秋のカレッチ・オープン・トーナメントに於て好成绩を挙げ、殊にダブルに於ては日本の選手権さへも獲得するに至つた。又先輩福田君はシングルの選手権を得、其他先輩諸兄の奮闘も目覚しく、遂に我早稲田は事實上硬球界の覇権を握り、再び其の名を爲す事が出来た。然し軟球では日本の庭球界の牛耳を取つて来たから、世界的硬球を使用した以上は、日本を征服した許りで甘んずる事は出来ぬ。世界的に成らねばならぬ。

重要記事

四月廿五日、春季リーグ戦出場選手を發表

四月廿九日より硬球リーグ戦始る。本年よりダブル三組、シングル六名の選手にて合計九點とし、五點以上を得たる學校の勝とすダブル六對三にて吾部優勝す。

五月十三、十四日、リーグ戦準決勝戦、早大對商大の戦はダブルは早大コート、シングルは商大コートに於て舉行。五月廿一日、リーグ戦決勝戦の早大對高師の戦は慶應コートにて舉行。五月廿六日、ボブラ俱樂部に於て春季シーズン優勝祝賀會を行ふ。五月廿七日東京ローンテニス俱樂部コートに於て、同部主催日本選手権大會舉行せらる。坂本横山組出場してセミファイナルにて深谷大井組に敗らる。

六月一日、芝浦コートに於て連戦連勝の加州大學庭球選手と戦ひ、二一の一のスコアを以て目度く勝つ。

八月四日、輕井澤トーナメント始まる。安部第一ラウンドに於て福田氏と戦ひける。八月廿五日、秋季シーズン練習開始。

九月九日、庭球協會主催全日本庭球選手権競技大會、帝大コートにて舉行せらる。九月十五日、同大會終る、川妻安部組はダブルの選手権保持者として攝政宮カップを先輩福田氏はシングルの選手権を獲得してニューヨークカップを朝香宮殿下より賜る。九月十四日築地精養軒に於て日本庭球協會の懇親會開かる。九月廿一日、第二回カレッチオープン・トーナメント始まる。第四ラウンド迄、帝大、慶大、立大、高師、早大の各コートに於て舉行。同トーナメントダブル、師、帝、早、慶コートに於て舉行。準決勝戦より高師コートに於て舉行。

十月十四日、同トーナメント終る、シングルは高師太田、ダブルは早大安部川妻組優勝す。十月十四日より十六日迄三日間に互り、早大主催、武俠世界社後援、第二回京濱中等學校庭球大會を舉行す、參加學校廿七校、各校參組づ、にて舉行し、優勝戦は千葉師の棄權にて早實遂に優勝す。十月廿六日、安部、川妻の兩君關東關西對抗競技出場の爲め針重監督に引率せられて大阪に赴く。十月廿九日より三日間、大阪にて關東關西對抗競技舉行せらる、關東軍四對一で大勝す。十月廿九日早大コートに於て關東硬球聯盟主催第二回全國中等學校庭球大會舉行せられ、參加學校七十二校、各校一組づ、にて、優勝戦は早實鎌倉師を破りて遂に優勝。

十一月二日、凱旋せる關東軍を東京驛に迎ふ。十一月廿一日、早稲田高田牧舎に於て高等學院庭球部と聯合して懇親會を開く、學院に硬球採用を促し、茶話會に移る。十一月廿五日、午後五時より神田今文に於て、秋季シーズン祝勝會を開く、十一月廿五日、午後五時より神田今文に於て硬球聯盟懇親會開催せられ、當部より野波、八十川の兩君出席す。十二月二日、午後五時より神樂坂小澤にて早稲田大學體育會選手會開かる。十二月十一日、午前十時より軟球部員大會を開く。

柔道部記録

(自大正十一年四月一日至大正十二年三月廿一日)

- 十一月五日 新入部員歡迎試合を行ふ
- 三日 部員大會を行ふ。
- 六月十九日 宮川師範就任さる。
- 廿六日 委員七名を任命す。

- 九月廿四日 舊委員の慰勞懇親會を行ふ。
- 十月八日 第廿七回柔道大會を開催す。
- 十一月十日 本日より向ふ一週間東北地方柔道講演講習旅行を行ふ。
- 十二月二日 本學期納會を行ふ。
- 十六日 昇段祝賀會を行ふ。
- 十二月十五日 本日より向ふ一ヶ月間寒稽古を行ふ。
- 二月十一日 寒稽古納會を行ふ。
- 十二月二十一日 本年度部員卒業生送別會を行ふ。

蹴球部

- 本學年に於ける本部の競技として報告すべきもの左の如し。
- 大正十一年四月廿三日、本部對A、J、Rは三田グラウンドにて行ひ
- 九對六 A、J、R勝
- 同十月十五日、本部對A、J、R同じく三田グラウンドにて
- 十二對零 本部勝
- 同十一月五日、本部對橫濱外人クラブ本牧グラウンドに於て
- 十五對零 外人勝つ
- 同十一月十二日、本部對全日本三田グラウンドに於て
- 六對零 本校勝つ(日没のため三十分デ
- 同十一月廿三日、本部對慶應大學三田グラウンドに於て

十四對零 慶大勝つ

同十二月二日、本部第二チーム(G、B)對 K、F、O、B 戸塚グラウンドに於て

零對零 引分

同十二月十日、本部對 A、J、R 戸塚グラウンドに於て

八對零 勝(本部)

大正十二年一月九日、本部對第三高等學校 戸塚グラウンドに於て

三對三 引分

同十一月十一日、本部對同志社大學戸塚グラウンドに於て

三對零 同大勝

同一月廿八日、本部對東京帝國大學一高グラウンドに於て

零對零 引分

同一月卅日、本部第二チーム(W、G、B)對 商科大學戸塚グラウンドに於て

十二對零 本校勝

尚ほ本部は信州杏掛千ヶ瀬遊園地グリーンホテルグラウンド(同地箱根土地株式會社所有グラウンド)に於て部員二十五名大正十一年八月十五日ヨリ九月十日合宿練習を行ひたり。

山岳部

△雁坂峠より將監峠まで 四月廿九日―五月二日リーダー八代陽 參加者二名

△將監峠より雲取山まで 四月廿九日―五月二日リーダー橋本濟 參加者三名

△丹澤山塊縦走 四月廿九日―五月二日リーダー大井正三郎 參加者二名

△天幕懇親會 五月六日―七日於多摩川河原

△春の槍岳より南岳へ 五月十八日―五月廿

二日リーダー舟田三郎 參加者二名

△甲斐駒、仙丈より地蔵、風凰へ 六月一日―六月七日リーダー土屋山郎 參加者一名

△雜誌發行 六月廿一日本部機關雜誌「リュックサツク」創刊號發行

△山岳寫真展覽會 六月廿六日―六月廿七日於早高物化實驗室

△夏期登山

△第一隊第一班、常念山脈縦走 七月十一日―七月十四日リーダー小笠原勇八 參加者十一名

△第一隊第二班、常念山脈縦走 八月二日―八月五日リーダー八代陽 參加者十五名

△第二隊、白馬連峯 八月二日―八月六日リーダー田村朔四郎 參加者四名

△第三隊、針之木越之劍岳より白馬岳へ 七月十二日―七月廿一日リーダー田村朔四郎 參加者七名

△第四隊、烏帽子、槍縦走 七月廿五日―八月一日リーダー本山榮三 參加者一名

△第五隊、槍、穂高縦走、笠、藥師高瀬下り 七月十三日―七月廿二日リーダー小笠原勇八 參加者一名

△第六隊、赤石山脈縦走 七月五日―七月廿日リーダー大井正三郎 參加者一名

△第七隊、八海山、中の岳方面 七月十七日―七月廿五日リーダー八代陽 參加者一名

△第八隊、北海道方面 七月十一日―八月十日リーダー中川太郎 參加者四名

△第九隊、高瀬入り硫黄澤より赤牛岳 八月八日―八月十六日リーダー土屋山郎 參加者一名

△第十隊、岩菅山麓キャンピング 八月七日

―八月十六日 參加者六名

△鋸岳 九月廿九日―九月卅一日リーダー大井正三郎 參加者一名

△中津川溪谷入り國師岳、金峰山縦走 十月十五日―十月廿一日リーダー會田次郎 參加者五名

△鋸岳縦走 十月十九日―十月廿四日リーダー舟田三郎 參加者一名

△卒業生送別會 十二月五月於京橋第一相互館

△三月の劍岳へ 三月廿六日―四月二日リーダー舟田三郎 參加者二名

△吾妻スキー登山 三月三十日―三月卅一日リーダー中川太郎 參加者六名

△リーダー田村朔四郎君の訃

君は中の澤スキー練習の歸途一月九日午前二時東北本線久田野驛に於ける列車轉覆の爲不慮の災禍に遭ふ。謹んで哀悼の意を表す。

右外六部は特に報告すべき事なし。

第十一 附早稻田工手學校

第一 施設經過

(大正十一年八月より同十二年三月に至る)

一、大正十一年八月十五日職員一同出勤事務を開始し、同二十一日大學講堂に於て午後五時始業式舉行、翌二十二日(火)より授業開始。

一、八月より在學生一同毎月金二十錢づつ、大隈侯記念事業寄附金として醸出す。

一、九月三十日までの新入生徒九百八十一名にして前年度に比し約一割の多數を示せり十月十四日より三日間機械電工探鑛建築の各科秋期見學旅行、機械科は山ノ内村田兩講師引率四十名、探鑛科は三宅野村兩講師引率八名共に足尾より日光へ、電工科塩野講師引率三十六名日光より湯元へ、建築科は片山講師引率十七名、日光より大谷石探鑛場へ赴き、土木科三十二名は十五、十六の兩日秋田講師指導の下に熱海方面へ見學旅行せり。

一、十月二十日本大學創立四十年記念式日午前、本校校長主事並に生徒代表者は故大隈總長墓前參拜をなし、午後の記念講演會には生徒をして隨意參列せしめたり。

一、十月二十八日、稻友會雜誌二十一號發行、十一月十九日(日)正午中央校庭に於て第二十二回稻友會秋季大會開催、徳永校長、鹽澤學長、内藤游工學博士、杉山第二高等學院長等の講演あり、午後五時散會後、教

職員並に卒業生三十八名晚餐會に移り、懇談せり。

一、十二月五日故大隈總長記念事業寄附金として竝に本校卒業生より成立せる東京計器製作所内早睦會より五百圓、所澤航空學校内の稻友會員より五百九十六圓の申込あり、尙ほ芝浦製作所の本校出身者より金六百六十一圓その他の卒業生寄附申込を合して總計約四千圓餘に上れり。

一、十二月十日午後五時より本校當番幹事となり第七回工學校懇談會を學士會館に開會私立工學校八校代表者出席工業教育上に關する協議申合をなせり。

一、十二月二十三日本校教職員卒業生名簿發行、稻友會員に配布。

一、十二月二十七日(木)より大正十二年一月九日(火)迄冬季休業翌十日は故大隈侯一周年祭に付休校

一、大正十二年一月十一日(木)授業開始、同二十四日授業終る。

一、一月二十五日(木)より同二十九日(月)に至る試験施行。

一、二月十一日(日)大學講堂に於て午後二時より第二十二回卒業證書授與式舉行、各科の卒業生左の如し。因に新制度による高等科第一回の卒業生を出せるものとす。

機械科生六十五名
電工科生五十六名
探鑛冶金科生八名
建築科生四十一名
土木科生二十二名
一、二月十五日(月)始業式十三日(火)授業開始。

第二 教職員(大正十二年三月現在)

校長 理學博士 徳永 重康
主事 土屋 詮教

商議員(イロハ順)

服部 金太郎
大橋 新太郎
太田 黒重五郎
吉村 鐵之助
竹内 明太郎
高松 豊吉
村井 吉兵衛
淺野 應輔

工學博士 伊原 貞敏
岩崎 富久
岩野 城生
伊藤 直和
石井 兼次
今井 邦治
井上 一之
稻葉 秋藏

講師

早稻田大學 伊原 貞敏
早稻田大學 岩崎 富久
早稻田大學 岩野 城生
早稻田大學 伊藤 直和
早稻田大學 石井 兼次
早稻田大學 今井 邦治
早稻田大學 井上 一之
早稻田大學 稻葉 秋藏

早稻田大學 石川 文雄
早稻田大學 市川 繁彌
早稻田大學 原田 長松
萩本 文海
堀野 一郎
堀江 貞治郎
星野 富太郎
徳永 重康
徳永 庸
鳥山 邦彦
大隅 菊次郎
緒方 一三
織田 隆
沖 巖
大久保 常正
岡村 千曳
尾崎 久助
渡部 寅次郎
渡部 善一
片山 勝藏
片岡 孟夫
加藤 觀三
吉原 重威
吉田 謙二
吉田 享二
武田 修三郎
立川 長宏
民野 雄平
高澤 雅雄
高橋 勇

工業數學		高等數學	交流理論	製圖	電氣機械	應用力學	原動機	電氣測量及理論	電信電話	發電所	電燈及電氣鐵道	電氣工學實驗	電力傳送及分配	電氣化學	學科演習	合計
二	四	二	二	六	四	二	二	四	二	二	二	二	四	一	二	二四
二	二	二	二	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二四
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二四

探鑛冶金科		學科	學期	第一學期	第二學期	高等科
二	二	數學	幾何	二	二	二
二	二	物理	三角	二	二	二
四	二	製圖		四	二	四
二	二	探鑛學		二	二	二
二	二	製造冶金學		二	二	二
二	二	選礦學		二	二	二
二	二	試金術		二	二	二
二	二	同實習		二	二	二

建築科		學科	學期	第一學期	第二學期	高等科
二	二	數學	幾何	二	二	二
二	二	物理	三角	二	二	二
七	一	製圖		七	一	六
四	一	建築圖法		四	一	四
二	二	建築構造		二	二	二
二	二	鐵骨構造		二	二	二
二	二	建築材料		二	二	二
二	二	日本建築		二	二	二
二	二	同實習		二	二	二

土木科		學科	學期	第一學期	第二學期	高等科
二	二	測量		二	二	二
二	二	同實習		二	二	二
二	二	機械的設備		二	二	二
一	一	裝飾畫		一	一	一
二	二	鐵骨構造		二	二	二
二	二	建築法		二	二	二
二	二	耐火建築		二	二	二
二	二	建築史		二	二	二
二	二	建築意匠		二	二	二
二	二	鐵骨鐵筋		二	二	二
二	二	微積分大意		二	二	二
二	二	建築裝飾		二	二	二
二	二	合計		二六	二四	二四

第四 在學生徒數(大正十二年三月現在)		學科	學期	第一學期	第二學期	高等科
二	二	構造學並演習		二	二	二
二	二	測量		二	二	二
二	二	同實習		二	二	二
二	二	機械的設備		二	二	二
二	二	裝飾畫		二	二	二
二	二	鐵骨構造		二	二	二
二	二	建築法		二	二	二
二	二	耐火建築		二	二	二
二	二	建築史		二	二	二
二	二	建築意匠		二	二	二
二	二	鐵骨鐵筋		二	二	二
二	二	微積分大意		二	二	二
二	二	建築裝飾		二	二	二
二	二	合計		二六	二四	二四

學科	學期	第一學期	第二學期	高等科
數學	幾何	二	二	二
物理	三角	二	二	二
製圖		四	二	四
探鑛學		二	二	二
製造冶金學		二	二	二
選礦學		二	二	二
試金術		二	二	二
同實習		二	二	二
合計		二八	三〇	二五

學科	學期	第一學期	第二學期	高等科
土木機械學		一	一	一
英語		四	一	一
建築大意		一	一	一
製圖		四	四	六
同實習		四	四	八
測量學		二	一	二
河海工學		二	二	二
石工學		二	三	二
水利學		二	二	二
工業數學		二	一	一
橋梁學		一	三	一
交通學		一	二	二
應用力學		二	二	一
物理解		二	二	二
數學	幾何	二	二	二
合計		二八	三〇	二五

期別	科別	機械	電工	探鑛冶金	建築	土木	小計	合計
豫科第一學期								六三一
同第二學期								八二七
同第三學期								五五〇
本科第一學期		一四一	二二一	七	一六八	二二二	六四九	六四九
同第二學期		一一〇	二〇〇	八	一八〇	二八二	三八二	三八二
同第三學期		七〇	七九	七	七三	二八六	二八六	二八六

合計 三二二 三九〇 二二二 三三四 二六〇一、三二七 三三三五

第五 卒業生數 (大正十一年三月調査)

學期別	科別	機	械	電	工	探礦冶金	建	築	土	木	合	計
大正二年二月		一五	四八	九	一九	二八	一一九					
同 七月		二六	七三	七	一六	二三	一四五					
大正三年二月		一一	六四	一六	二六	三七	一五四					
同 七月		一六	六一	一六	二四	三八	一五五					
同 七月		二七	六八	一〇	二七	二八	一六〇					
同 七月		三二	八八	二二	一八	四五	二〇五					
同 七月		二四	五六	一六	二二	三一	一四九					
同 七月		二四	四六	二四	一六	三六	一四六					
大正六年二月		三五	三六	一六	一六	二五	一二八					
同 七月		五七	四三	三三	二〇	二〇	一七三					
同 七月		四三	三九	二六	二〇	一九	一四七					
同 七月		六二	三四	三五	二六	二三	一八〇					
同 八月二月		六四	四七	三六	二〇	二二	一七九					
同 七月		一〇七	四八	四五	二二	一三	二三五					
同 九月二月		一〇四	七四	三七	三六	一四	二六五					
同 七月		一一一	八二	四七	三五	三五	三一〇					
同 七月		一一一	七八	三四	二七	二四	二七四					
同 七月		一一八	九五	二六	五三	四八	三四〇					
同 七月		一二四	九一	一八	六三	四五	三四一					
同 七月		一〇二	五九	八	四三	六五	二七七					
同 七月		六五	五六	八	四一	二二	一九二					
累計							四二七四					

第十二 校友會

春季校友會大會

大正十一年四月十四日。午後四時半より京橋區采女町精養軒に於て例規校友大會を開く、特に此の會には母校早稻田大學評議員の選舉、本會幹事設置委員の選舉あり尙ほ故總長大隈侯等記念事業につきての鹽澤會長及び高田名譽學長の發表並に説明あり出席五百餘名盛會を極む

秋季校友會大會

大正十一年十月二十一日。即ち、我が母校の創立四十年記念日の翌日を期し、秋季校友大會を上野公園精養軒に於て開催す。當大會には母校創立四十年記念につき特に母校の教職員全員を招待し些か慰勞の意を表したり。此他各地方に於て早稻田大學校友會の名を以て開かれたる會合中判明せるものを列挙すれば概ね左の如し。

大正十一年四月十二日

- 京都校友會 高田、片山
- 四月十三日 和歌山校友會 沖、米元
- 四月十九日 上毛校友會 松平
- 四月廿日 大阪校友會
- 四月廿二日 茨城縣校友會 鹽澤、五來、中桐
- 四月廿二日 京城校友會
- 五月十日 廣島縣校友會
- 五月廿二日 廣東早稻田會 清水
- 五月廿七日 東播校友會
- 五月卅日 上海校友會
- 六月十一日 鳥取縣校友會 高田、鹽澤、五來

六月十四日 島根縣校友會 高田、五來

六月廿六日 函館校友會

七月一日 青島校友會

七月五日 三重縣校友會

七月十一日 長崎縣校友會

七月十六日 新潟市校友會

七月廿二日 吳校友會

七月廿八日 下館校友會 鹽澤

七月廿八日 諏訪校友會 金子

八月四日 宮城縣校友會

八月四日 內ヶ崎、氏家、秋田、永井

八月十二日 多賀早稻田會

八月廿四日 上海校友會 片上

十月八日 天津校友會

十月廿五日 大阪校友會 澁澤、高田、田中

十一月廿日 札幌校友會

十一月廿二日 橫濱校友會 高田、田中

十二月五日 新潟市校友會

十二月七日 門司校友會

大正十二年一月六日

石川縣校友會

一月十二日 ロスアンゼルス校友會 服部

一月十四日 名古屋校友會

一月十四日 小樽校友會

一月十五日 京城校友會

一月廿九日 札幌校友會

二月十日 上海早稻田會 高田

二月廿一日 北九州校友會 高田

三月八日 名古屋校友會 高田、佐藤

三月九日 新潟市校友會 高田、佐藤

三月廿日 奈良縣校友會 河原

第十三 出版部

本大學設立の本旨を貫徹するの一方便として明治十九年十月始めて出版部(當時は東京專門學校出版局と稱す)を置き政學講義を創刊して本邦に於ける講義録發行の端を開きしより實に三十有七年從來主として男子の教育を目的として刊行し來りし五種講義録の外昨年新に高等女學講義録を創刊し以て女子教育の普及發達に裨補すべく企圖せり既往に於て講義録に依り各種の學科を講修せしもの無慮壹百拾八萬五千(明治廿二年以前の記録現存せざるを以て之を省く)に及び又明治廿年早稻田叢書を創刊して書籍發行の端を開きしより大小の書籍を發行すること五百十一册今期間の發行卅八册之が爲に本邦の文化を裨補せしとの尠からざるは多言を要せず今現に處行しつつある講義録の種類を擧ぐれば左の如し

政治經濟科(修業年限一年半) 毎月二回
 法律科(同上) 毎月二回
 文學科(同上) 毎月二回
 中學科(修業年限二年) 毎月二回
 商業科(修業年限一年半) 毎月二回
 高等女學科(同上) 毎月二回

出版部は大正七年十二月十日の本大學維持員會の決議により其組織のを變更して株式會社と爲したれども元如く早稻田大學出版部と稱し本大學總長及び理事數名其相談役となり本大學校外生の養成機關たること舊の如し現任の役員相談役編輯顧問其他左の如し

取締役主幹 市島 謙吉
 取締役理事 種村 宗八

取締役 高田 俊雄
 監査役 小久江成一
 相談役 男爵 前島 彌
 相談役 侯爵 大隈 信常
 相談役 法學博士 高田 早苗
 相談役 法學博士 鹽澤 昌貞
 相談役 法學博士 平沼 淑郎
 編輯顧問 法學博士 田中 總積
 編輯顧問 文學博士 坪内 雄藏
 編輯顧問 文學博士 金子 馬治
 編輯長 青柳 篤恒
 主事 岡本 季三

○出版部創立以降校外生年別表

年 度	政治經濟科	法律科	行政科	文學科	歷史地理科	商業科	中學科	高等國民教育科	高等女學科	計
二十三年	八〇	七	四〇							一、九七
二十四年	四三	四二	一五二							一、二五
二十五年	五七	四六	二六五							一、二六
二十六年	七五	七六	二九九							一、九〇
二十七年	八四	八七	三〇六							二、〇五
二十八年	八九	七四	三三三	九五						二、九二
二十九年	一〇〇	一、九七	七九	八四						四、五〇
三十年	一、五五	二、一七	一〇一	一、五七						六、二六
三十一年	一、九五	二、三三	一一三	一、三五						七、八四
三十二年	二、六六	三、一九	二、九二	一、三五						一〇、二二
三十三年	二、五〇	四、〇六	三、二九	二、七九						一三、五五
三十四年	二、七九	三、四〇	三、三三	三、八一						一、六四
三十五年	二、六七	三、〇六	三、七四	二、五〇						一三、三〇
三十六年	三、六二	三、七八	三、三三	二、六五						一六、四〇
三十七年	三、七四	三、七九	三、七四	三、〇一						一七、三三
三十八年	四、七三	三、七四	二、八四	三、五三						二、六四
三十九年	三、五三	三、九七	一、七六	三、五九						二八、六五
四十年	三、〇一	三、五〇	廢刊	三、〇二	廢刊					二六、六四
四十一年	二、三四	三、二九		二、四八						三、五三
四十二年	三、三三	三、五七		二、三三						三、七〇
四十三年	二、九六	三、五九		二、二九						二八、七六
四十四年	三、四四	三、七九		六、八四					廢刊	三、四〇
四十五年	三、六五	三、七九		三、二四						三、四六
大正二年	三、六〇	三、七三		三、六五						三、六七

大正三年	四,一〇八	四,三六一		三,九四四		六,三〇八	三,〇四四		四〇,七〇七
大正四年	三,七九一	四,〇三四		三,三九五		五,七八四	三,六〇六		四九,六〇〇
大正五年	四,三六三	四,九三三		四,一八四		七,〇四七	三,五二九		五五,六四四
大正六年	三,二四八	三,六〇〇		三,五二〇		七,六八〇	三,二〇七		四九,二七五
大正七年	三,一五七	三,三六六		三,〇九六		二,二八〇	三,五三二		五五,九八〇
大正八年	七,八五四	六,九三〇		五,九二六		二,三八〇	四,五三〇		八八,八〇五
大正九年	二,〇五六	九,三九八		七,六四七		二,三八三	四,〇四〇		一〇〇,〇九九
大正十年	二,六六七	二〇,二五一		九,六五七		二,四,五五八	五,三,九九四		一〇九,一八七
大正十一年	二,七五三	二一,〇六一		一三,三〇一		一九,二〇六	六,一,六四三		二八,九七四
大正十二年	二,一八〇	一三,九一〇		一四,五六〇		二,二,五八〇	五,七,一八〇		二七,八二〇
計	一三〇,三五五	一,五,八四八	二八,三四八	一,二七,二九三	三,一,七四五	三,二,五五四	五,一,五七九	一〇,四〇五	一七,八〇二
									二八,九七四

大正十二年度本大學報告右之通候也

早稻田大學

大正十二年十二月

總長 高田 早苗

